

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第313集

佐野遺跡第1次・三日町I遺跡第2次発掘調査報告書

平泉バイパス建設事業関連発掘調査



(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

佐野遺跡第1次・三日町Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書

平泉バイパス建設事業関連発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されています。これら多くの先人たちの創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民一人ひとりに課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺跡が消滅することはまことに惜しいことではありますが、その反面、それまで闇につつまれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護や保存と開発との調和も今日的課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとって参りました。

本書は、建設省東北地方建設局岩手工事事務所による国道4号の平泉バイパス建設事業に関して、平成10年度に発掘調査を実施した西磐井郡平泉町の佐野遺跡第1次調査と三日町I遺跡第2次調査の調査結果をまとめたものです。遺跡は、東部の北上山地系と西部の奥羽山脈系に挟まれた北上川西岸の河岸段丘上に立地しており、今回の調査では、竪穴住居跡をはじめ多数の掘立柱建物跡や墓墳などが検出され、またそれに伴う遺物も出土し、縄文時代から現代まで断続的につながる遺跡であることが明らかになりました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深め、役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にご協力とご援助を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所や平泉町教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成12年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 船越昭治

例 言

1. 本報告書は、岩手県西磐井郡平泉町字佐野20-1ほかに所在する佐野遺跡第1字調査及び回町字三日町143-1に所在する三日町I遺跡第2次調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、岩手県教育委員会と建設省岩手工事事務所との協議を経て、㈱岩手県文化振興事業団が担当した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号は佐野遺跡第1次調査がNE86-0152、三日町I遺跡第2次調査がNE86-0120であり、発掘調査時の遺跡略号はそれぞれSN-98、MKMI-98である。
4. 発掘調査期間、発掘調査面積、調査担当は次のとおりである。
発掘調査期間 平成10年8月1日～10月30日
発掘調査面積 佐野遺跡第1次 1,200㎡
 三日町I遺跡第2次 1,550㎡
調査担当者 朝倉雄大・羽柴直人
5. 室内整理期間と整理担当者は次のとおりである。
室内整理期間 平成10年11月1日～平成11年3月31日
整理担当者 朝倉雄大
6. 本報告書の執筆は、1. 調査に至る経過は中川重紀が担当したが、その他は朝倉雄大が担当した。
7. 分析・鑑定は次の方に依頼した。
石材鑑定 花崗岩研究会（会長：矢内桂三 岩手大学工学部教授）
樹種同定 高橋利彦氏（木工舎「ゆい」）
8. 野外調査・報告書作成では、平泉町教育委員会からご指導・ご協力を得た。
9. 本調査で得られた諸記録・出土遺物等、一切の資料は岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

序

例言

〔本 文〕

I. 調査に至る経過	3	(2) 遺物	43
II. 遺跡の立地と環境	4	(3) 小結	45
1. 遺跡の位置	4	V. 三日町 I 遺跡第 2 次発掘調査の結果	63
2. 地理的環境	4	1. 検出された遺構と遺物	63
3. 地形・地質	7	(1) 竪穴住居跡	63
4. 基本層序	7	(2) 掘立柱建物跡	66
5. 周辺の遺跡	8	(3) 柱列	93
III. 野外調査と整理の方法	11	(4) 陥し穴状遺構	97
1. 野外調査	11	(5) 井戸跡	98
2. 室内整理	12	(6) 土坑	99
IV. 在野遺跡第 1 次発掘調査の結果	19	(7) カマド状遺構	102
1. 検出された遺構と遺物	19	(8) 柱穴	103
(1) 掘立柱建物跡	19	(9) 墓塚	103
(2) 土坑	20	2. 遺構外出土遺物	119
(3) 溝状遺構	27	3. 考察とまとめ	122
(4) 柱穴	29	(1) 遺構	122
(5) 墓塚	30	(2) 遺物	131
2. 遺構外出土遺物	40	(3) 小結	133
3. 考察とまとめ	41	付篇 分析・鑑定	137
(1) 遺構	41		

〔表〕

表 1 周辺の遺跡	9
-----------	---

〔図 版〕

第 1 図 遺跡位置図 (1)	1	第 5 図 周辺の遺跡	10
第 2 図 遺跡位置図 (2)	2	第 6 図 凡例	12
第 3 図 地形図	5	第 7 図 グリッド配置図	13
第 4 図 地形分類図	6		

佐野遺跡第1次調査

〔表〕

表2 調査区北側土坑群一覧表	22	表6 墓壕内出土銭貨計測表(2)	39
表3 柱穴計測表	29	表7 墓壕内出土銭貨の組み合わせ	42
表4 墓壕内出土遺物一覧	35	表8 寛永通寶分類表	44
表5 墓壕内出土銭貨計測表(1)	38		

〔図 版〕

第8図 遺構配置図	17-18	第15図 墓壕	33
第9図 掘立柱建物跡1号	19	第16図 墓壕内出土遺物(1)	34
第10図 調査区北側土坑群	21	第17図 墓壕内出土遺物(2)	35
第11図 土坑1)	24	第18図 墓壕内出土銭貨(1)	36
第12図 土坑2)	26	第19図 墓壕内出土銭貨(2)	37
第13図 溝状遺構	28	第20図 遺構外出土遺物	40
第14図 柱穴出土遺物	29		

〔写真図版〕

写真1 遺跡全景①(上空より)	48	写真6 墓壕(2)・溝状遺構	53
写真2 遺跡全景②(上空より)・ 基本土層断面	49	写真7 遺構内出土遺物・墓壕内出土遺物	54
写真3 土坑1)	50	写真8 墓壕内出土銭貨(1)	55
写真4 土坑2)	51	写真9 墓壕内出土銭貨(2)	56
写真5 墓壕(1)	52	写真10 墓壕内出土銭貨(3)・ 墓壕外出土遺物	57

〔表〕

表9 墓塚内出土銭貨計測表	118	表13 掘立柱建物跡の柱間寸法と軸線方向	126
表10 掘立柱建物跡分類表	123	表14 墓塚内出土銭貨の組み合わせ	130
表11 掘立柱建物跡切り合い関係表	124	表15 墓塚内出土遺物一覧表	131
表12 掘立柱建物跡遺構の新旧関係	125	表16 寛水通竇分類表	132

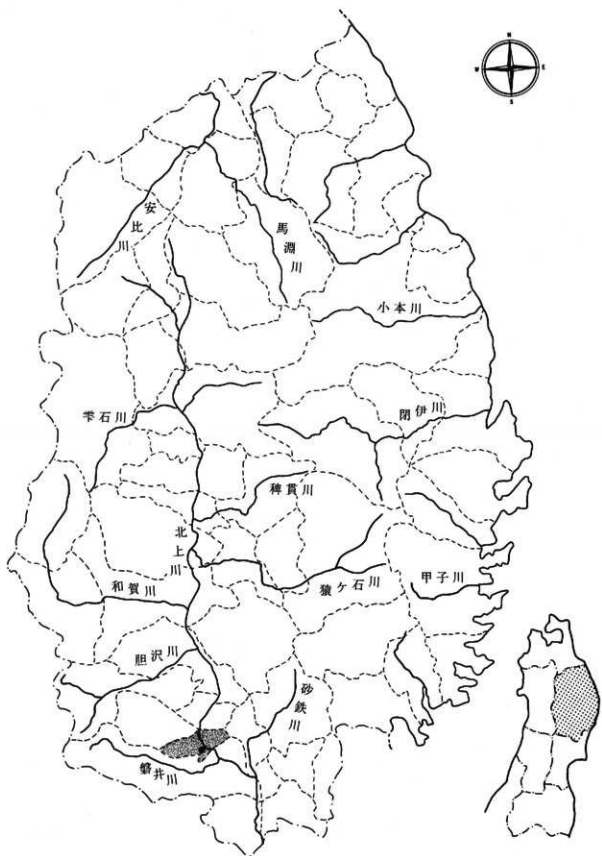
〔図 版〕

第21図 遺構配置図	61・62	第39図 掘立柱建物跡06	92
第22図 S I 1 住居跡	64	第40図 柱列(1)	95
第23図 S I 1 住居跡出土遺物	65	第41図 柱列(2)	96
第24図 掘立柱建物跡(1)	67	第42図 陥し穴状遺構	98
第25図 掘立柱建物跡(2)	68	第43図 井戸・土坑(1)	100
第26図 掘立柱建物跡(3)	70	第44図 土坑(2)	101
第27図 掘立柱建物跡(4)	71	第45図 カマド状遺構	103
第28図 掘立柱建物跡(5)	73	第46図 柱穴出土遺物	104
第29図 掘立柱建物跡(6)	75	第47図 墓塚(1)	106
第30図 掘立柱建物跡(7)	76	第48図 墓塚(2)	107
第31図 掘立柱建物跡(8)	78	第49図 墓塚内出土遺物(1)	113
第32図 掘立柱建物跡(9)	80	第50図 墓塚内出土遺物(2)	114
第33図 掘立柱建物跡09	81	第51図 墓塚内出土遺物(3)	115
第34図 掘立柱建物跡01	83	第52図 墓塚内出土銭貨(1)	116
第35図 掘立柱建物跡02	85	第53図 墓塚内出土銭貨(2)	117
第36図 掘立柱建物跡03	87	第54図 遺構外出土遺物(1)	120
第37図 掘立柱建物跡04	89	第55図 遺構外出土遺物(2)	121
第38図 掘立柱建物跡05	91	第56図 掘立柱建物跡切り合い関係図	127・128

〔写真図版〕

写真11 遺跡全景(上空より)・ 基本土層断面	144	写真16 掘立柱建物跡(4)	149
写真12 S I 1 住居跡	145	写真17 柱列	150
写真13 掘立柱建物跡(1)	146	写真18 陥し穴状遺構・カマド状遺構・ 井戸・土坑(1)	151
写真14 掘立柱建物跡(2)	147	写真19 土坑(2)	152
写真15 掘立柱建物跡(3)	148	写真20 墓塚(1)	153

写真21	墓塚(2)	154	写真26	墓塚内出土銭貨(1)	159
写真22	墓塚(3)	155	写真27	墓塚内出土銭貨(2)	160
写真23	遺構内出土遺物(1)	156	写真28	墓塚内出土銭貨(3)	
写真24	遺構内出土遺物(2)	157		遺構外出土遺物(1)	161
写真25	遺構内出土遺物(3)	158	写真29	遺構外出土遺物(2)	162



第1図 遺跡位置図(1)



第2図 遺跡位置図(2)

I. 調査に至る経過

佐野・三日町 I 遺跡は「一般国道 4 号、平泉バイパス改築工事」の施行に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道 4 号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約 835 km のわが国最長の国道で、東北地方の大動脈となっている主要幹線である。

このうち一般国道 4 号は、藤原文化の発祥地として多くの史跡、名所が点在する平泉町においては、広域観光ルートの一翼を担っている路線でもある。しかしながら市街地の中心部を南北に縦貫する全幅員 9.5 m の 2 車線道路であり、近年の自動車交通の増大と車向の大型化により、交通混雑、沿道環境悪化が顕著になってきている。とりわけ観光シーズンには、平常時の 1.3～1.5 倍の交通量となり、身動きのとれない交通渋滞が繰り返され、地域住民、道路利用者はもとより観光客からも早急な改築が望まれていた。

平泉バイパスは、これら道路交通問題を解消し、円滑な道路交通の確保・交通安全の確保・主要幹線機能の回復並びに広域観光ルート形成を目的に昭和 48 年度に計画調査を開始し、以来多くの歴史的文化遺産や一関遊水池との調和・調整を経て、昭和 56 年度に事業着手し、昭和 59 年度からは工事に着手し、事業を進めている。なお、平泉バイパスは全延長 5.8 km のうち、約 2/3 にあたる区間が一関遊水池堤防と併設する構造となっている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会の分布調査により、かねてから佐野・三日町 I 遺跡も確認されている。又、平成 9 年度に試掘を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は建設省東北地方建設局岩手工事事務所に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は建設省東北地方建設局岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成 10 年度事業について、平成 10 年 3 月 9 日付け「教文第 988 号」により財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。

これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団は、佐野・三日町 I 遺跡について同年 7 月 31 日付けで委託契約を締結し、8 月 1 日から発掘調査に着手した。

なお、同じ事業区域内には平成 9 年 3 月 5 日付けで国指定史跡となった「柳之御所」がある。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

佐野遺跡、三日町I遺跡は、岩手県南部の西磐井郡平泉町に所在し、東日本旅客鉄道株式会社東北本線平泉駅の南約2kmの国道4号東側沿いに位置している。平泉町は、一関市を中央に挟む西磐井郡の北部を占める。周囲の南と西は、岩手県の南玄関である一関市に隣接し、東は標高596mの東楡山を境に東磐井郡東山町と丘陵で接しており、北は胆沢郡前沢町と衣川村に接している。平泉町の中心部を北上川が南流し、北上川を境として東の長島地区と、西側の平泉地区に二分される。本遺跡は平泉町の最南端に位置し、隣接の一関市までは約1.5km程の距離にあり、また約1km東には北上川が南流している。周辺は水田地帯が広がるが、幹線道路である国道4号があるため交通量は多い。近年スーパーマーケット、ガソリンスタンドが建ち並び、宅地化も徐々に進んできている。

本遺跡は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「一関」(N J-54-14-15)及び2万5千分の1地形図「平泉」(N J-54-14-15-3)の図幅に含まれ、北緯38度58分12秒、東経141度7分17秒付近にある。遺跡の標高は22~27mである。

因みに佐野、三日町という地名は、明治初年の地租改正に伴い平泉村の端郷であった高館郷が18区に字限され土地一筆ごとに地番が定められた際、新たに命名された字名に近世以来の小字の名称が多く用いられたことに起因する。すなわち、佐野、三日町という現行字もいくつかの子字の中から選択されたものである。三日町の現行の読み方は、「みっかまち」であるが、「みかのまち」または「みかどまち」とも呼ばれていたらしい。ただし、近世小名が示した場所については不明である。

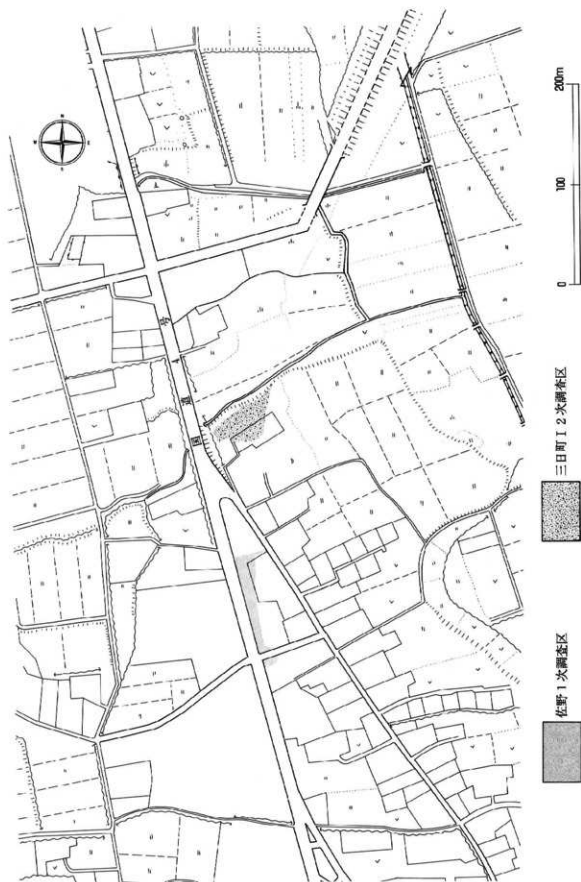
2. 地理的環境

平泉町は総面積63.39㎢で、町の中央を流れる北上川の流域に沿って、耕地がひらけている。土地利用の内訳は田22.5%、畑5.3%、山林32.9%、牧場原野9.0%、宅地3.8%、雑種地1.4%、その他25.1%となっている。

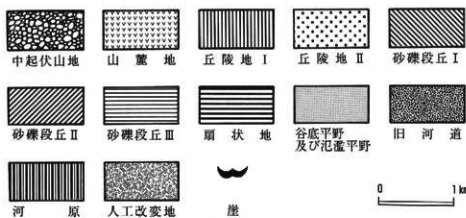
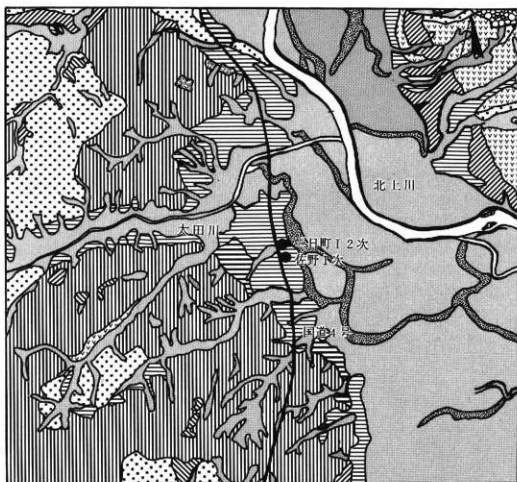
人口は昭和25年には11,124人と1万人の大台を越したが、その後はやや減少に転じ現在は約9,300人である。年齢階層別人口は0~14歳の幼年人口16.5%、15~64歳の生産年齢人口62.3%、65歳以上の老年人口21.2%となっており、徐々に高齢化が進行しつつある。

産業は産業別就業人口でみると第1次産業が19.4%、第2次産業が34.2%、第3次産業が46.4%となっている。第1次産業が比較的多く見受けられ、中でも農業従事者が林業・狩猟従事者に比べ圧倒的に多い。また、第3次産業内では小売業やサービス業が突出している。このように田園都市的性格の一方で、年間250万人もの観光客が訪れる観光都市平泉のもう一つの側面を表している。

気候は表日本気候に属し、平均気温は11.5℃と低いが、4月から気温も上がり、10月まで温暖な気候が続き、年間を通して比較的過ごしやすい。統計によると最暖月の8月は平均気温20.4℃、最寒月の1月は平均気温-3.0℃であり、気温の年較差は23.4℃となる。最寒月年間降水量は約900mmと全国の平均1,728mmをかなり下回る。6月中旬からの入梅と9月の台風時期に降雨量が増し、これまでは北上川や支流河川の氾濫によって農作物に被害をもたらすことも度々であった。



第3図 地形図



第4図 地形分類図

3. 地形・地質

遺跡の所在する平泉町周辺の地形を概観すると、東には北上山地、西には奥羽山脈が広がり、その間を北上川が南流している。北上川は岩手郡岩手町の御堂観音境内にその源を發し、北上・奥羽両山系を東西に二分し南北に縦走する日本第5位の長さを誇る大河である。北上川は一関市の狐塚寺付近の狭窄部を経て宮城県に至り、追波湾に注いでいる。狐塚寺付近の狭窄部はこの地方で大洪水が起こる要因の一つとなっている。平泉町は北上川の中流域にあたり、北上川によって形成された後背湿地及び氾濫平野などの低地が袋小路のように広がり、一段高くなって河岸段丘が形成されている。本遺跡は氾濫平野にほど近い河岸段丘の末端部分に位置する。北上川はこれまで幾度となく流路を変え、現在に至っている。近隣の支流には胆沢川、衣川、太田川、磐井川等がある。

また、低地以外の地形について見ると丘陵山地が低地を取りまくように広がっている。本遺跡周辺において代表的な丘陵は衣川丘陵と東稲西麓丘陵が挙げられる。衣川丘陵は北上川西岸に広がっている丘陵である。侵食は進んでいるが、西部の方ではまだ開析が及んでおらず緩斜面域が残っており、牧場等に利用されている。この丘陵地を開析している太田川には顕著な遷急点があり、北上川の下刻後、まだ平衡河川に成りきっていないことを示している。北上川東岸の東稲西麓丘陵は東稲山の山麓地としての性格を有するが、大部分は侵食性の緩斜面であり、水流による顕著な凹型斜面が形成されている。谷底は平坦でなく、船底型の凹型をしたものが多い。北上川の急激な下谷時期に形成されたものではないかと言われている。

一方、地質について見ると平泉町のほぼ中央部を盛岡-白河線と呼ばれる構造線が南北に縦断している。構造線の東側には古生層および深成岩類が分布し、西側には新生代第三紀以降の堆積岩および火山岩が分布している。衣川丘陵付近では、上位は鮮新世の泥岩、砂岩の多い陸成層、中位は砂岩、礫岩の海成層、下位は火山性岩石である安山岩質岩石となっており、変化に富んだ地層を形成している。東稲西麓丘陵付近では、北上山地南部型と呼ばれる石灰岩と薄衣礫岩と呼ばれる礫岩や泥岩などを中心にして南北方向の走向で褶曲・断層を繰り返している。北上川によって形成された沖積地、沖積段丘、扇状地の堆積物は、砂礫泥からなる。一部で礫の部分もあるが、多くは泥を主体とした細粒の堆積物である。本遺跡付近においても同様の傾向にある。

4. 基本層序

調査区域の現況は、佐野遺跡は宅地及び畑、三日町I遺跡は水田及び畑である。佐野遺跡は調査区が国道4号に接するため調査区西側では国道4号建設時の影響を強く受けており、また、宅地による地盤の改変が相当進んでいることから各地点で基本層序がかなりの変化が見受けられた。ここでは、調査区中央部付近と北側での層序を記載する。

佐野遺跡1次調査

中央部西側 (II A 6 h 西)

- I層 2.5Y4/1黄灰色土。層厚8~20cm。国道4号建設時の盛土。現表土。小石・礫等が混じる。
- II a層 10YR4/1褐灰色土。層厚10~20cm。国道4号建設時の盛土。小石・礫等が多量に混じる。
- III b層 2.5Y6/4にぶい黄色土。層厚30~40cm。国道4号建設時の盛土。小石・礫等が若干混じる。
- IV層 7.5YR3/1黒褐色土。層厚30~40cm。旧耕作土。酸化鉄分の集積がやや見受けられる。炭化物粒が微量混入する。粘性やや有り、締まり無し。
- IV層 2.5Y7/4浅黄色土~10YR6/6明黄褐色土。地山。主たる遺構検出面である。

北側 (ⅢA 4 f 北)

- I 層 10YR3/1黒褐色土。現表土。層厚 8～35cm。粘性無し、締まり有り。
- II 層 7.5Y3/2黒褐色土～10YR6/4にぶい黄橙色土。盛土。層厚30～65cm。粘性無し、締まり有り。
- III 層 7.5Y2/2黒褐色土。旧耕作土。層厚10～20cm。粘性やや有り、締まり無し。
- IV 層 2.5Y7/4浅黄色土～10YR6/6明黄褐色土。地山。主たる遺構検出面である。

三日町 I 遺跡 2 次調査

- I 層 10YR5/1褐灰色土。層厚 5～10cm。現表土。草木・小石など含む。
- II a 層 2.5Y8/4浅黄色土～10YR4/1褐灰色土。層厚 5～10cm。盛土。粘性無し、締まり有り。
- II b 層 2.5Y7/4浅黄色土。層厚20～30cm。盛土。粘性無し、締まり有り。
- II c 層 2.5Y5/1黄灰色土。層厚 5～10cm。盛土。粘性無し、締まり有り。
- II d 層 2.5Y7/4浅黄色土。層厚 3～10cm。盛土。粘性無し、締まり有り。
- III 層 10YR4/2灰黄褐色土。層厚10～18cm。粘性やや有り、締まり有り。旧耕作土。
- IV 層 2.5Y7/4浅黄色土。地山。遺構検出面である。

5. 周辺の遺跡

平泉町内に約100カ所の埋蔵文化財包蔵地がある。分布をみると、北上川西地区（平泉地区）が約60カ所、北上川東地区（長島地区）が約40カ所となっている。北上川西地区では12世紀の奥州藤原氏時代関連の遺跡が多く、北上川東地区では縄文～奈良時代、鎌倉時代～近代の遺跡が目につく。

遺跡の分布を時代的にみていくと、縄文時代では、平成3年度に当センターが調査を実施した長島地区の新山権現社遺跡が代表として挙げられる。遺跡は北上川の東岸、東稻西麓丘陵に立地する。縄文時代後期～晩期の捨て場であり、大量の遺物が出土した他、竪穴住居跡3棟、墓塚1基、配石遺構3基、土壘69基が検出されている。

奥州藤原氏関連の代表的な遺跡は、柳之御所跡である。遺跡は南流する北上川の西岸に接した河岸段丘上の平坦な地形に営まれている。昭和44年～平成4年度にわたって当センター、平泉町教育委員会、岩手県教育委員会などにより計40次の発掘調査が行われた。とりわけ昭和63年から始まった北上川遊水池事業の大堤ルートにかかわる発掘調査は12世紀第3～4半期の遺構・遺物の発見で平泉研究を急速に進展させた。総量15トンにも及ぶかわらけや御数牌残片の出土は、ここが度々宴會が催された迎賓の場であったこと、「吾妻鏡」に記す平泉館（政庁）の跡の可能性を改めて示すこととなった。平成5年にはその重要性から遺跡の保存が決定された。さらに平成10年度には岩手県教育委員会文化課により第49次調査が実施された。

〈引用・参考文献〉

- 岩手県文化振興事業団 (1997) : 『瀬原 I 遺跡第 2 次・第 3 次発掘調査報告書』 岩理文報告書第257集
- 岩手県農政部 (1978) : 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 一関』
- 平泉町役場企画課 (1996) : 『平成 8 年 平泉町 町勢要覧』
- 平泉町役場企画課 (1997) : 『平成 9 年 平泉町 町勢要覧・資料編』

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別
1	中尊寺跡	寺社、経塚、散布地
2	衣岡遺跡	寺社、屋敷地
3	坂下遺跡	寺社、散布地
4	猪間が淵跡	沢跡
5	金鶏山遺跡	経塚
6	花立Ⅰ遺跡	寺社、城館
7	花立Ⅱ遺跡	寺社
8	鈴懸の森遺跡	経塚
9	高館跡	居館
10	柳之御所跡	居館
11	毛越寺跡	寺社
12	観自在王院跡	寺社
13	無量光院跡	寺社
14	伽羅之御所	居館
15	鈴沢の池跡	池跡
16	泉屋遺跡	屋敷地
17	倉町遺跡	屋敷地
18	志羅山遺跡	屋敷地
19	国衛館跡	屋敷地
20	高衛館跡	屋敷地
21	白山社遺跡	寺社
22	大沢遺跡	散布地
23	毛越Ⅰ遺跡	寺社
24	毛越Ⅱ遺跡	寺社
25	毛越Ⅲ遺跡	寺社

番号	遺跡名	種別
26	毛越Ⅳ遺跡	寺社
27	毛越Ⅴ遺跡	寺社、居館
28	毛越Ⅵ遺跡	寺社
29	烏屋崎館跡	城館
30	比久尼寺跡	寺社
31	黒沢館跡	城館
32	片岡Ⅰ遺跡	散布地、城館
33	片岡Ⅱ遺跡	散布地
34	新井田遺跡	散布地
35	上野台Ⅰ遺跡	散布地
36	上野台Ⅱ遺跡	散布地
37	樋渡遺跡	散布地
38	祇園Ⅰ遺跡	散布地
39	祇園Ⅱ遺跡	散布地、寺社
40	三日町Ⅰ遺跡	散布地
41	三日町Ⅱ遺跡	散布地
42	三日町遺跡	散布地、寺社
43	佐野原遺跡	散布地
44	佐野遺跡	散布地
45	高上遺跡	散布地
46	高田遺跡	散布地
47	新城館遺跡	城館
48	宿遺跡	散布地
49	正法遺跡	散布地
50	大仏遺跡	城館



第5図 周辺の遺跡

Ⅲ. 野外調査と整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッドの設定

佐野遺跡第1次、三日町I遺跡第2次の発掘調査においては基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区を設定した。遺跡の基準点、グリッドの設定は次のとおりである。

調査区の設定については、それぞれの調査区がやや離れているため向調査区内に公共座標のX系に基づく基準点を2点ずつ設け、それを基に区割りを行った。基準点1～4の平面直角座標X系による成果値、及び杭高は以下の通りである。

三日町I遺跡第2次調査	基準点1	X=-114,190.000m	Y=25,000.000m	H=22.492m
	基準点2	X=-114,210.000m	Y=25,000.000m	H=23.131m
佐野遺跡第1次調査	基準点3	X=-114,380.000m	Y=24,975.000m	H=26.875m
	基準点4	X=-114,380.000m	Y=25,000.000m	H=26.694m

グリッドは、向調査区が収まるようにX=-114,460.000m、Y=24,960.000mの南西地点を起点とし、一辺50×50mの大グリッドと、さらに大グリッドを5×5mの間隔で100等分した小グリッドに細分した。大グリッドは起点から南から北へI～M、西から東へA～Bを、小グリッドは南から北へ1～0、西から東へa～jを付した。調査区の名前は、大グリッドと小グリッドの組み合わせでIA1a、VB3fのように呼称した。

(2) 遺構の名称

遺構については、以下のように略号を付し、通し番号を付けている。

S I…堅穴住居跡 S B…孤立柱建物跡 S E…井戸跡 S K…土坑 S D…溝跡
S X…墓塚 P…柱穴

(3) 掘掘・精査

検出された遺構は、遺構名を付し、堅穴住居跡、カマド燃焼部及びカマド状遺構は4分法、その他の遺構は2分法で精査した。墓塚、三日町遺跡の土坑群については、最初に行える限りプランを確認し、検出状況を写真撮影後、掘り下げを行った。住居跡及び墓塚内の遺物については、写真撮影及び実測図に記入の後取り上げた。その他の遺物については適宜層位を確認しながら取り上げた。

(4) 実測・写真撮影

実測は主に簡易遣り方測量でを行い、縮尺20分の1を原則とした。佐野遺跡における土坑群の平面図の記録に関しては、時間の都合上平板測量で行い、縮尺は100分の1とした。その他は個々の遺構に応じて縮尺を変更した。遺構のレベルは必要に応じて計測している。

写真撮影は、6×7cm判1台(モノクロ)と35mm判4台(モノクロ・カラーリバーサル)を使用し、検出状況、掘土断面、全景、遺物出土状況、カマド断ち割り等、状況に応じて撮影した。

2. 室内整理

(1) 作業手順

野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は、室内整理の段階で次のように処理し及び整理を行い、報告書を作成するとともに、資料化を計った。各種実測図は遺構毎に分類し、原因点検の上、全ての遺構について第2原因を作成し、トレースを行った。撮影されたフィルムは、ネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。遺物は発掘現場で水洗いしたものを当センターに持ち帰り、出土地点・層位等を注記した。その後、遺構、出土地点毎に仕分けを行い、接合復元作業を実施した。これらの作業終了後に遺物の仕分け・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後、遺物実測、計測、拓本、トレース（遺構・遺物）の順に作業を進め、最後に実測図版と写真図版を作成した。これらの作業と並行して鑑定依頼、原稿作成し、報告書に掲載した。

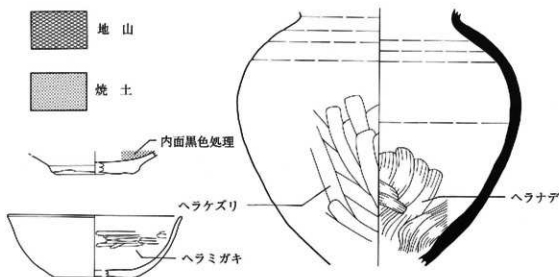
(2) 報告書の掲載写真、図版等について

遺構図面の縮尺は、50分の1を原則としている。それ以外の掲載図面については個々にスケールを付してある。

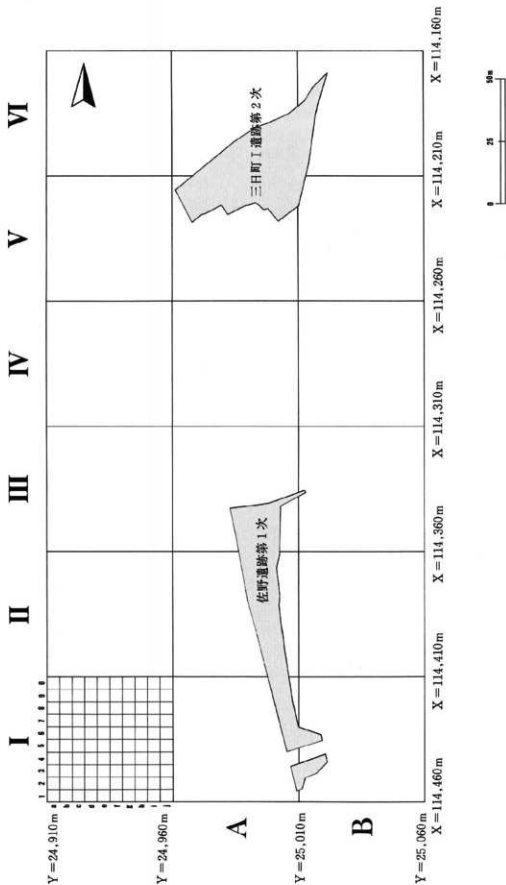
出土した遺物の実測図版の縮尺は、土器類、陶磁器類が3分の1、古銭は基本的に原寸、古銭以外の墓堀内出土遺物は2分の1である。その他については個々にスケールを付してある。写真図版の縮尺については、図本毎に縮尺率を付してある。

拓影は土師器、古銭、播磨鉢について行った。土師器の拓影は回転糸切り痕があるもの他、底部が残存しているものについて行った。

土器・陶磁器の実測は、全周4分の1以上依存していたものを原則として反転実測したが、特徴的なものは4分の1未満のものでも反転実測している。



第6図 凡例

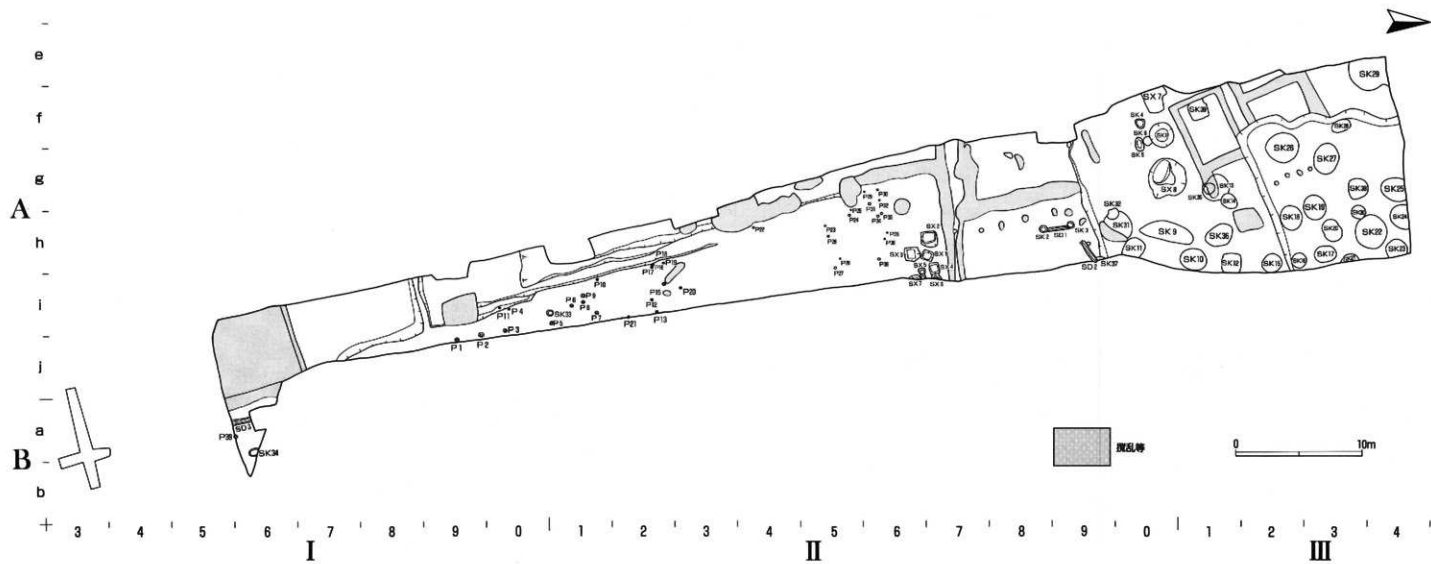


第7図 グリッド配置図



IV. 佐野遺跡第1次発掘調査

所在地	西磐井郡平泉町平泉字佐野20-1ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間	平成10年8月1日～10月31日
調査対象面積	1,200㎡
発掘調査面積	1,200㎡
遺跡番号・略号	ME86-0152・SN-98
調査担当者	朝倉雄大・羽柴直人
協力機関	平泉町教育委員会



第8図 遺構配置図

IV. 佐野遺跡第1次発掘調査の結果

1. 検出された遺構と遺物

本遺跡の調査で確認・調査した遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑39基、溝状遺構3条、柱穴38基、墓塚8基である。

(1) 掘立柱建物跡

・SB1 (第9図)

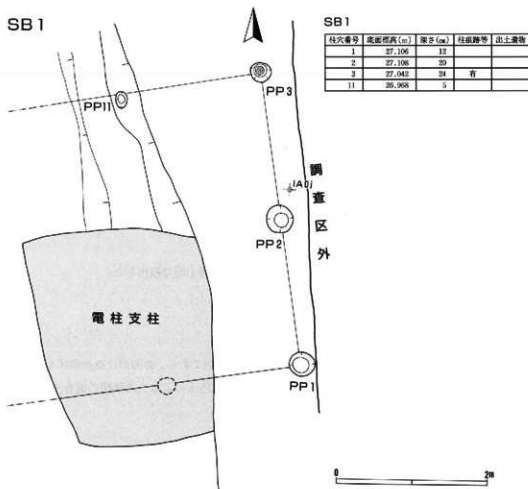
〈位置・検出状況〉 IA9i～IA0iグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 なし。

〈規模〉 桁行1間以上(総長188cm-北)、梁行2間(総長296cm-東)の建物である。面積は検出分で約7.4m²(2.2坪)である。

〈軸線方向〉 N-11°-Wである。

〈平均中間寸法〉 概ね196cm(6.5尺)を基準にしている。



第9図 掘立柱建物跡1号

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 詳細は不明であるが、近世以降に属するものと思われる。

(2) 土坑

調査区全体で39基の土坑が検出された。特に調査区北側において35基が集中して検出されていることを踏まえ、調査区北側と調査区中央・南側に分けて記載することとする。

① 調査区北側土坑

調査区北側から35基検出された。平面形は円形（円形状含む）が19基、方形（方形状・長方形状含む）が4基、楕円形（長楕円形含む）が10基、不整形2基である。

・調査経過

当初の検出段階においては、これらの土坑群が狭い範囲内で検出されたため、遺構の平面プランからは井戸跡に見えるものの果たしてこれだけ集中するのか疑問に思われ、土坑群の性格や時期等の予測が困難であった。手始めに1基を精査したところ、埋土はグライ化もしておらず、埋めてからさほど時間が経過していないと思われるものであった。他の土坑についても検出面における上色の様相が多少の差異はあるものの概ね同じような特徴を持っていることから、これら土坑群の時期差は短いものと推測した。また、昭和初期に調査区より数百m北の祇園地区に煉瓦工場があったということが判り、その土取りの穴ではないかということも考えたが、煉瓦工場が操業していた時期にはすでに屋敷があったと旧地権者の方からお話があり土取りの穴ではないことが分かった。

調査は最初に精査した1基に加え、プランの検出規模から3基のみを抽出し行うこととした。他の土坑についてもプランを再確認するために検出を進めていたところ、SK10及びSK38から塩化ビニール管、土管など井戸施設に付随すると思われる出土物があったため、これら土坑群は近世以降から近代にかけて構築された土坑もしくは井戸跡の可能性が高いと判断した。このため調査は、その性格上抽出した3基のみ行うこととなり、その他は検出面における平面プランの実測と上色の注記についてのみ行った。

・SK1（第11図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 III A 0 f グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SK6と重複関係にあり、本遺構が新しい。

〈平面形〉 ほぼ円形状を呈する。

〈規模〉 開口部径202×190cm、深さ80cmである。

〈壁・底面・断面形〉 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。断面形は逆台形状を呈する。

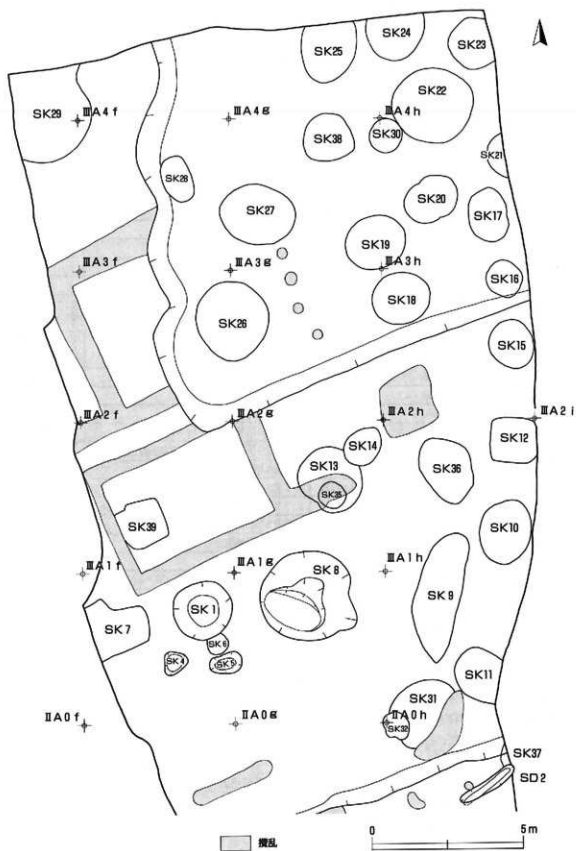
〈埋土〉 大別すると3層に分かれる。1層はオリーブ褐色土と浅黄色土による人為堆積の混合土である。2～3層は緑灰～オリーブ灰色土の粘土シルトである。

〈出土遺物〉 礫石、木片が出土している。

礫石 5面を使用した痕跡のある礫石が1点(1)出土している。

木片 木片や竹片などが少量出土している。図面掲載はしていない。

〈時期〉 詳細は不明だが、埋土の様相などから近世以降に属するものと思われる。



第10圖 調査区北側土坑群

表2 調査区北側土坑群一覧表

遺構名	平面図	規模 cm	検出山 標高 m	検出面における埋土の土色	重複
S K 1	円形	202×190	25.17	2.5Y4/4オリーブ褐色土～2.5Y7/4浅黄色土	S K 6と重複 S K 1が新
S K 4	円形状	82×80	25.28	10Y R3/2黒褐色土～2.5Y6/4にぶい黄色土	
S K 5	長楕円形	112×64	25.29	10Y R3/2黒褐色土～7.5Y6/2灰オリーブ色	
S K 6	円形	73×	25.18	5 Y8/3淡黄色土～2.5Y6/6明黄褐色土	S K 1と重複 S K 6が旧
S K 7	長方形	長軸190以上短軸190	不計測	10Y R3/1黒褐色土	
S K 8	円形状	314×302	25.05	10Y R3/1黒褐色土～10Y R5/6黄褐色土	
S K 9	不整形	最大長430最大幅150	25.18	7.5Y R3/1黒褐色土	
S K 10	楕円形	225×170	25.05	10Y R2/1黒色土	
S K 11	方形状?	×160	25.26	10Y R3/1黒褐色土～10Y R5/6黄褐色土	
S K 12	方形	長軸155短軸150	24.93	10Y R2/1黒色土～7.5Y7/1灰白色土	
S K 13	円形	220×210	24.98	10Y R3/1黒褐色土～10Y R7/6明黄褐色土	S K 14、S K 35と重複 S K 13が旧
S K 14	楕円形	140×115	24.79	2.5Y7/4浅黄色土～10Y R3/1黒褐色土	S K 13と重複 S K 14が新
S K 15	円形状	160×145	24.43	7.5Y7/1灰白色土	
S K 16	円形	120×110	24.49	10Y R3/1黒褐色土	
S K 17	楕円形	180×130	24.48	10Y R3/1黒褐色土	
S K 18	楕円形	195×170	不計測	10Y R3/1黒褐色土	
S K 19	楕円形	200×170	不計測	10Y R3/1黒褐色土～2.5Y8/3淡黄色土	
S K 20	楕円形	180×150	24.46	10Y R3/1黒褐色土	
S K 21	円形	不明	24.31	10Y R3/1黒褐色土	
S K 22	円形	180×140	24.34	10Y R3/1黒褐色土～2.5Y7/6明黄褐色土	
S K 23	円形	170×	24.31	10Y R3/1黒褐色土	
S K 24	円形	190×	24.39	10Y R3/1黒褐色土	
S K 25	楕円形	190以上×185	24.33	10Y R3/1黒褐色土	
S K 26	円形	260×240	24.36	10Y R2/1黒色土	
S K 27	楕円形	245×200	24.38	不明	
S K 28	楕円形	155×95	24.42	10Y R2/1黒色土～2.5Y7/4浅黄色土	
S K 29	円形状	径300以上	24.99	10Y R2/1黒色土	
S K 30	円形	115×110	24.47	10Y R3/1黒褐色土～5 Y8/1灰白色土	
S K 31	円形状	245×	25.21	2.5Y7/4浅黄色土～10Y R3/1黒褐色土	S K 32と重複 S K 31が旧
S K 32	円形状	95×85	25.26	5 Y8/1灰白色土	S K 31と重複 S K 32が新
S K 35	円形	95×90	25.02	10Y R3/1黒褐色土	S K 13と重複 S K 35が新
S K 36	不整形	最大長240最大幅170	24.66	7.5Y7/1灰白色土	
S K 37	円形?	不明	不計測	10Y R3/1黒褐色土	S D 2と重複 S K 37が旧
S K 38	円形状	165×155	24.42	2.5Y7/4浅黄色土～7.5Y7/2灰白色土～2.5Y4/2暗灰黄色土	
S K 39	方形	長軸155短軸150	不計測	2.5Y7/4浅黄色土～5 Y8/3淡黄色土	

・SK4 (第12図、写真図版3)

〈位置・検出状況〉 II A 0 f グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 不整形円形状を呈する。

〈規模〉 開口部径82×80cm、深さ14cmである。

〈壁・底面・断面形〉 壁は東壁では底面から緩やかに外傾して立ち上がるが、西壁では直立気味に立ち上がる。底面はやや起伏はあるが概ね平坦である。断面形は浅皿状を呈する。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とする単層である。

〈出土遺物〉 鉄片が出土した。

鉄片 錆化著しい鉄の細片が1片出土した。錆化の著しい細片のため図面掲載はしていない。

〈時期〉 詳細は不明だが、埋土の様相などから近世以降に属するものと思われる。

・SK5 (第12図、写真図版4)

〈位置・検出状況〉 II A 0 f ~ II A 0 g グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 不整形円形状を呈する。

〈規模〉 開口部長軸112cm、短軸64cm、深さ22cmである。

〈壁・底面・断面形〉 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であり、断面形は浅鉢状を呈する。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とする単層である。

〈出土遺物〉 土器片、鉄片が出土した。

土器片 土器器と思われる土器の細片が2点出土した。小破片のため図面掲載していない。

鉄片 錆化著しい鉄の細片が微量出土した。錆化の著しい細片のため図面掲載はしていない。

〈時期〉 詳細は不明だが、埋土の様相などから近世以降に属するものと思われる。

・SK8 (第11図、写真図版4)

〈位置・検出状況〉 III A 0 g ~ III A 1 g グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 北東方向及び南東方向にやや張り出した不整形円形を呈する。

〈規模〉 開口部径314×302cmである。安全のため完掘しておらず深さは不明である。掘り下げは130cmまで行った。

〈壁・底面・断面形〉 壁は深さ約1m付近から外傾して立ち上がるが、北東壁では緩やかに外傾して立ち上がる。深さ1m以下の壁は直立気味になるものと思われる。

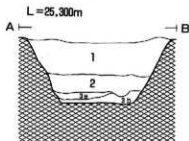
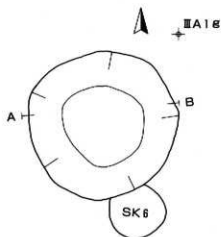
〈埋土〉 大別すると2層に分かれる。1層は自然堆積の様相の黒褐色シルト、2層は黄褐色土と黒褐色土の混合土であり、人為堆積の様相を呈する。

〈出土遺物〉 かわらけが出土している。

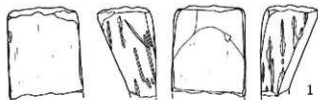
かわらけ 細片が微量出土している。細片のため図面掲載はしていない。

〈時期〉 詳細は不明だが、埋土の様相などから近世以降に属するものと思われる。

SK1



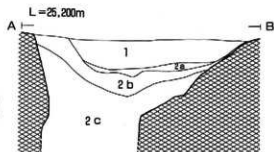
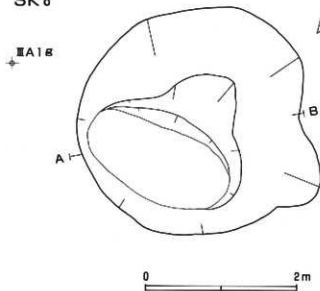
1. 2.5Y4/4オリーブ層と2.5Y7/4残炭の混合土 木片・竹片少量
粘性有り・締まり無し
2. 10GY6/6緑泥 砂質粘土シルト 締まり無し
- 3 a. 10Y R3/1黒褐 粘土シルト 粘性大・締まり有り
- 3 b. 5GY6/1オリーブ泥 粘土シルト 粘性大・締まり有り



0 10cm

番号	遺構名	形種	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石質	産地	備考
1	SK1	底石	(7.4)	6.0	4.3	298.57	砂岩	奥羽山脈	

SK8



1. 10Y R3/1黒褐 シルト 土器片微量 粘性有り・締まりやや軟
自然堆積の標相
- 2 a. 10Y R5/6黄褐 10Y R3/1黒褐40% 粘性有り・締まりやや軟
人為堆積の標相
- 2 b. 10Y R5/6黄褐 10Y R3/1黒褐10% 粘性有り・締まりやや軟
人為堆積の標相
- 2 c. 10Y R5/6黄褐 10Y R3/1黒褐10% 10GY7/7明緑泥10%
粘性有り・締まりやや軟 人為堆積の標相

第11図 土坑 (1)

② 調査区中央・南側土坑

調査区中央付近で2基、南側で2基の合計4基を検出した。

・SK2 (第12図)

〈位置・検出状況〉 II A 8 h グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SD1と重複関係にあり、SD1より新しい。

〈平面形〉 円形状を呈する。

〈規模〉 開口部径60×58cm、深さ11cmである。

〈壁・底面・断面形〉 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は東側で一部窪む。断面形は浅皿状である。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とする単層である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

・SK3 (第12図)

〈位置・検出状況〉 II A 9 h グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SD1と重複関係にあり、SD1より新しい。

〈平面形〉 楕円形状を呈する。

〈規模〉 開口部長軸58cm、短軸44cm、深さ4cmである。

〈壁・底面・断面形〉 壁の立ち上がりは不明瞭である。底面は平坦であり、全体的に北東側に傾斜する。断面形は浅皿状を呈する。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とする単層である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

・SK33 (第12図)

〈位置・検出状況〉 II A 0 i ~ II A 1 i グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 円形状を呈する。

〈規模〉 開口部径52×51cm、深さ20cmを呈する。

〈壁・底面・断面形〉 壁は底面から外傾して立ち上がっている。底面はやや丸底気味である。

〈埋土〉 黒褐色土上にぶい黄色土の3層からなる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

・SK34 (第12図)

〈位置・検出状況〉 I B 6 a グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 北側調査区外へ遺構が延びるため、全体形は不明である。

SK 2  ⅡA 9 h 2 m 東



L=26,000m
A  B



1. 10Y R3/2黒糖 2.5Y5/4黄糖5% 炭化物
鉄鋼量低入 粘性無し・締まり有り

SK 3 



ⅡA 9 h の北 1 m 東 1 m

L=26,000m
A  B



1. 10Y R3/2黒糖 2.5Y5/4黄糖2-3%
炭化物微量 粘性無し・締まり有り

SK 4 



ⅡA 0 Ⅱの北 2 m 西 1 m

L=25,400m
A  B



1. 10Y R3/2黒糖 2.5Y6/4にふい黄地山ブ
ロック5% 糖化成分・炭化物微量 粘
性無し・締まりやや有り 人為堆積

SK 5 



L=25,400m
A  B



ⅡA 0 Ⅱの北 1 m

1. 10Y R3/2黒糖 7.5Y6/2灰シリブ地山ブ
ロック5% 糖化成分・炭化物微量 糖
化著しい鉄片(鉄屑?) 粘性やや有り・締
まりやや無し 人為堆積か

SK 34 



ⅡA 6 b の北 1 m

L=27,400m
A  B



1. 10Y R3/2黒糖と10Y R6/0明炭糖の混合堆
積性有り・締まりやや軟 人為堆積

SK 33 



ⅡA 1 j の西
1 m

L=27,300m
A  B



1. 10Y R3/2黒糖 2.5Y6/4にふい黄5% 粘性無し・締まりやや軟
2. 2.5Y6/4にふい黄 10Y R3/2黒糖10% 粘性無し・締まり有り
3. 10Y R3/2黒糖 2.5Y6/4にふい黄30% 粘性無し・締まりやや軟

0  2m

第12図 土坑 (2)

〈規模〉 検出分の長軸70cm、短軸60cm。深さ23cmである。

〈壁・底面・断面形〉 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。断面形は逆台形状を呈する。

〈埋土〉 黒褐色土と明黄褐色土の混合層からなる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

(3) 溝状遺構

・SD1 (第13図、写真図版6)

〈位置・検出状況〉 II A 8 h～9 h グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SK 2、SK 3と重複関係にあり、ともに本遺構が古い。

〈平面形〉 平面形はほぼ真っ直ぐである。軸線方向はN-8°-Wである。

〈規模〉 検出長206cm、上端幅28～30cm、深さ7～9cmである。底面は北側に傾斜している。

〈断面形・底面〉 断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒色土を基調とする単層からなる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

・SD2 (第13図)

〈位置・検出状況〉 IA 9 i グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SK 37と重複関係にあり、本遺構が新しい。

〈平面形〉 平面形はほぼ真っ直ぐである。軸線方向はN-56°-Eである。

〈規模〉 検出長212cm、上端幅32～40cm、深さ28～40cmである。

〈断面形・底面〉 断面形はU字状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 4層からなる。黒褐色土を主体に、明黄褐色地山ブロックが混入する埋土である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

・SD3 (第13図、写真図版6)

〈位置・検出状況〉 IB 5 a～6 a グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 平面形はほぼ真っ直ぐである。軸線方向はN-15°-Wである。

〈規模〉 検出長154cm、上端幅40cm、深さ3～4cmである。

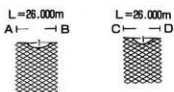
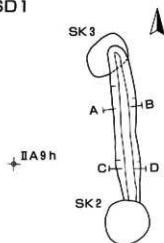
〈断面形・底面〉 断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土に明黄褐色土が混入する単層からなる。

〈出土遺物〉 遺物は出土していない。

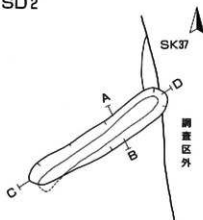
〈時期〉 不明である。

SD1

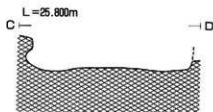
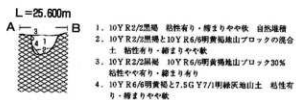


A-B 1. 10Y R2/2黒 2.5Y5/4黄緑30% 粘性無し・締まり有り
 C-D 1. 10Y R2/2黒 2.5Y5/4黄緑25% 粘性無し・締まり有り

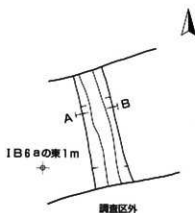
SD2



IIA0i



SD3



1. 10Y R3/2黒粘 10Y R7/6明黄緑40% 粘性有り・締まり有り



第13図 溝状遺構

(4) 柱穴

調査区全体で柱穴が38基検出された。そのうち7基から遺物が出土した。P30から出土した2はてづくねかわらけで口径12.0cm、器高2.2cmである。松本建速氏の種類によるとC5類に該当する。その他の出土遺物については細片のため図面掲載していない。個々の柱穴の詳細については表2のとおりである。

表3 柱穴計測表

柱穴No.	平面形	掘り方規模(cm)	底面標高(m)	深さ(cm)	柱痕跡等	出土遺物	備考
1	円形	33×33	27.106	12			SB1
2	円形	38×34	27.108	20			SB1
3	円形	26×26	27.042	24	有		SB1
4	楕円形	18×14	27.078	17			
5	楕円形	26×22	27.098	11			
6	円形	24×22	27.029	14			
7	円形	30×29	26.944	24	有	かわらけ細片	
8	円形	24×23	26.982	19			
9	円形	35×32	26.920	27	有		
10	円形	20×20	26.906	22	有		
11	楕円形	22×16	26.968	5			SB1
12	楕円形	22×16	26.806	21	有		
13	円形	17×17	27.846	16			
14							登録抹消
15	不整円形	26×23	26.806	21	有	かわらけ細片	
16	円形	22×21	26.655	37	有		P17と重複 P16が新
17	楕円形	26×(20)	26.876	20	有	かわらけ細片	P16と重複 P17が旧
18	円形	14×14	26.799	19			
19	円形	20×20	26.765	28	有		
20	円形	22×22	26.766	15			
21	楕円形	24×20	26.904	18	有		
22	円形	20×20	26.609	26			
23	円形	21×20	26.526	29	有		
24	円形	20×20	26.582	18	有		
25	円形	13×13	26.480	28			
26	円形	20×20	26.586	20			
27	円形	21×20	26.501	25			
28	円形	17×16	26.570	21			
29	円形	18×16	26.575	11			
30	円形	22×20	26.415	25		かわらけ	
31	円形	26×24	26.350	36	有	かわらけ細片	
32	楕円形	16×12	26.452	24			
33	楕円形	22×18	26.461	23			
34	円形	22×20	26.458	26			
35	円形	16×15	26.580	10			
36	円形	14×14	26.570	8			
37	楕円形	18×16	26.338	23			
38	円形	20×20	26.500	21	有		
39	円形	28×26	27.229	20		鉄釘	

※ ()内は推定値



番号	遺跡名	遺物名	計測値	備考
2	P30	かわらけ	口径(12.0cm) 器高2.2cm	C5類

第14図 柱穴出土遺物

(5) 墓塚

調査区中央で8基検出した。調査区外にかかるため全体形が不明なものもあるが、概ね方形状を基調とするようである。遺構は重機による表土除去後にⅣ層で検出されたが、調査区外にかかる墓塚の断面形を観察したところⅢ層から掘り込まれていることが確認できた。したがって、他の墓塚もⅢ層から掘り込まれているものと思われる。

・SX1 (第15図、写真図版5)

〈位置・検出状況〉 ⅡA6h～ⅡA7hグリッドに位置する。Ⅳ層中で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は方形状を呈し、規模は長軸84cm、短軸74cm、深さ30cmである。木棺の検出はないものの、釘が検出されていることから墓の形態は方形木棺墓の可能性もある。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管、土人形、釘が出土した。

銭貨 銅銭29枚、鉄銭1枚の合計30枚が出土した。そのうち銅銭1枚と鉄銭1枚は銭名不詳である。残りの銅銭28枚は銹化による癒着で判読不可能なものがあるものの、その形態から寛永通寶(古寛永3、新寛永25枚)と思われる。

煙管 雁首部が1点(5)出土した。

土人形 型作りされた人形が2点(3、4)出土した。

釘 釘片が1点出土した。細片のため図面掲載していない。

〈時期〉 出土した銭貨に鉄寛永銭が含まれることから江戸時代18世紀中頃以降に埋葬されたと思われる。

・SX2 (第15図、写真図版5)

〈位置・検出状況〉 ⅡA6h～ⅡA7hグリッドに位置する。Ⅳ層中で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は方形状を呈し、規模は長軸・短軸とも128cm、深さ30cmである。底面形は長方形を呈し、長軸95cm、短軸72cmである。木棺の検出がなく、埋土からも火葬墓と思われる様子がないことから、墓の形態は直葬墓の可能性もある。

〈出土遺物〉 鉄片が出土している。

鉄片 銹化の進行した用途不明の鉄片が2点出土している。図面掲載はしていない。

〈時期〉 銭貨等の出土がなく断定はできないが、周囲の同種遺構との関連から江戸時代に属すると思われる。

・SX3 (第15図、写真図版5)

〈位置・検出状況〉 ⅡA6hグリッドに位置する。Ⅳ層中で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は方形状を呈し、長軸116cm、短軸112cm、深さ73cmである。底面形は長方形を呈し、長軸77cm、短軸60cmである。木棺の検出がなく、埋土からも火葬墓と思われる様子がないことから、墓の形態は直葬墓の可能性もある。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管、陶器、かわらけ、種子が出土した。

銭貨 銅銭1枚、鉄銭24枚の合計25枚が出土した。そのうちの鉄銭2枚は銭名不詳である。残りの鉄銭22枚は錆化による癒着で銭文の判読が不可能なものがあるものの、その形態から仙台通寶と思われる。銅銭は寛永通寶(新寛永)である。

煙管 吸口部と雁首部の2点(6、7)が出土した。それぞれに残存した雁字の一部が付随する。元は同一個体であったと思われる。

陶器 碗と思われる陶器片1点(8)が出土した。細片のため図面掲載していない。

かわらけ かわらけと思われる細片が1点出土した。細片のため図面掲載していない。

種子 クルミの種が1点出土した。図面掲載はしていない。

〈時期〉 出土した銭貨に仙台通寶が多く含まれることから、江戸時代後半頃(18世紀末以降)の埋葬と思われる。

・SX4(第15図、写真図版5)

〈位置・検出状況〉 II A 7 h グリッドに位置する。IV層中で検出した。

〈重複〉 SX6と重複関係にあり、本遺構が新しい。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は方形を呈し、長軸90cm、短軸88cm、深さ36cmである。木棺の検出がなく、埋土からも火葬墓と思われる様子がないことから、墓の形態は直葬墓の可能性もある。

〈出土遺物〉 かわらけ、鉄片が出土した。

かわらけ 摩滅したかわらけの細片が1点出土した。摩滅した細片のため図面掲載していない。

鉄片 錆化の進行した用途不明の鉄片が出土した。錆化著しい細片のため図面掲載していない。

〈時期〉 銭貨等の出土がなく断定はできないが、重複関係から江戸時代中頃以降の埋葬(18世紀中～)と思われる。

・SX5(第15図、写真図版6)

〈位置・検出状況〉 II A 6 h - 6 i グリッドに位置する。IV層中で検出した。

〈重複〉 SX8と重複関係にあり、本遺構が古い。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は、一部がSX8に壊されていることから全体形は不明であるが、方形を呈するものと思われる。確認できる規模は軸線52cm、深さは24cmである。木棺の検出はないものの、釘片が出土しており木棺墓の可能性もある。

〈出土遺物〉 銭貨、土人形、釘、鉄片が出土した。

銭貨 銅銭7枚、鉄銭3枚の合計10枚が出土した。洪武通寶(銅銭)1枚の他は、すべて寛永通寶(新寛永)である。

土人形 型作りされた人形が1点(9)出土した。

釘 釘片が2点出土した。小破片のため図面掲載していない。

鉄片 錆化の進行した用途不明の鉄片が微量出土した。

〈時期〉 出土銭貨に鉄寛永銭が含まれることから、江戸時代中頃以降(18世紀中～)の埋葬と思われる。

・SX6(第15図、写真図版6)

〈位置・検出状況〉 II A 7 h グリッドに位置する。IV層中で検出した。

〈重複〉 SX4と重複関係にあるが、本遺構が古い。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は、SX4に重複し、また調査区外にかかるため全体形は不明である。確認できる規模は軸線76cm、深さは24cmである。木棺の検出がなく、埋土からも火葬墓と思われる様子がないことから、墓の形態は直葬墓の可能性もある。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管が出土した。

銭貨 鉄銭の寛永通寶（新寛永）が1枚出土した。

煙管 残存した羅字の一部が付随する吸口が1点（10）出土した。

〈時期〉 出土銭貨が鉄寛永銭であることから江戸時代中頃以降（18世紀中～）の埋葬と思われる。

・SX7（第15図、写真図版6）

〈位置・検出状況〉 IIA6hグリッドに位置する。IV層中で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は、遺構の大部分が調査区外にかかるため不明である。確認できる規模は深さのみで54cmある。木棺の検出がなく、埋土からも火葬墓と思われる様子がないことから、墓の形態は直葬墓の可能性もある。

〈出土遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がなく断定はできないが、周囲の同種遺構との関連から江戸時代に属すると思われる。

・SX8（第15図）

〈位置・検出状況〉 IIA6h～6iグリッドに位置する。IV層中で検出した。

〈重複〉 SX5と重複関係にあるが、本遺構が新しい。

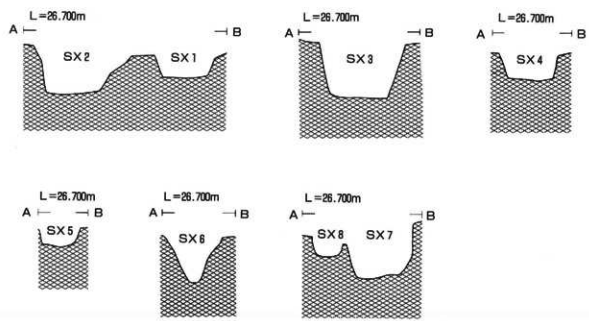
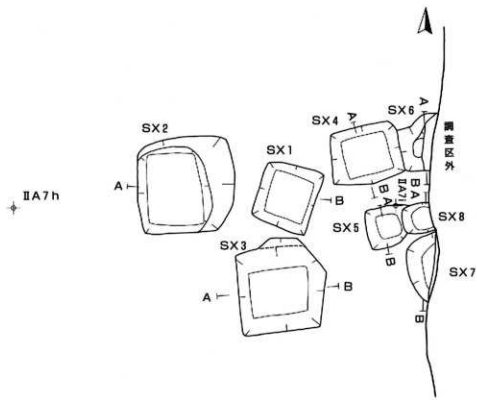
〈形態・規模〉 掘り方の平面形は、遺構が調査区外にかかるため全体形は不明である。確認できる規模は軸線36cm、深さは24cmである。木棺の検出がなく、埋土からも火葬墓と思われる様子がないことから、墓の形態は直葬墓の可能性もある。

〈出土遺物〉 銭貨、土人形が出土した。

銭貨 鉄銭が70枚出土した。錆化による癒着で銭文の判読が不可能なものがあるものの、その形態からすべて寛永通寶（新寛永）と思われる。

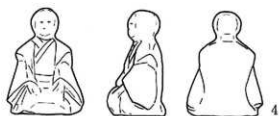
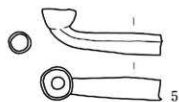
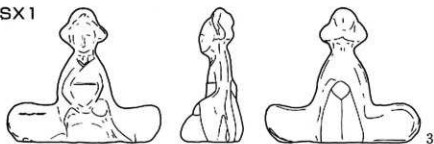
土人形 型作りされた人形が1点（11）出土した。

〈時期〉 出土銭貨がすべて鉄寛永銭であり鉄四文銭が含まれることから、江戸時代後半幕末頃の埋葬と思われる。

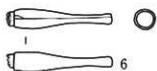


第15図 墓 墳

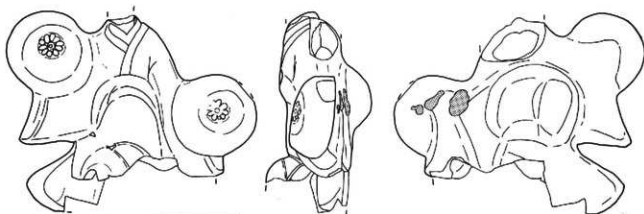
SX1



SX3



SX5

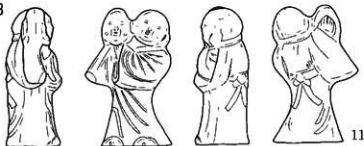


黒色付層物



第16図 墓壙内出土遺物(1)

SX8



0 10cm

土人形

番号	遺構名	遺物名	計 測 値	備 考
3	SX1	土人形	高さ7.1cm 幅2.1cm 厚2.3cm	製作中
4	SX1	土人形	高さ5.4cm 幅4.0cm 厚2.9cm	製作中
9	SX5	土人形	高さ10.6cm 幅12.0cm 厚4.8cm	製作中
11	SX8	土人形	高さ7.4cm 幅1.6cm 厚2.9cm	製作中

煙 管

番号	遺構名	遺物名	部 位	計 測 値	備 考
5	SX1	煙管	煙口	煙口径5.4cm 火眼径1.8cm 煙字径合部径1.0cm	5編
6	SX3	煙管	煙口・煙字	煙口径5.2cm 煙字径合部径0.9cm 煙口径0.4cm	
7	SX5	煙管	煙口・煙字	煙口径5.9cm	4編以降
10	SX6	煙管	煙口・煙字	煙口径12.1cm	

陶 器

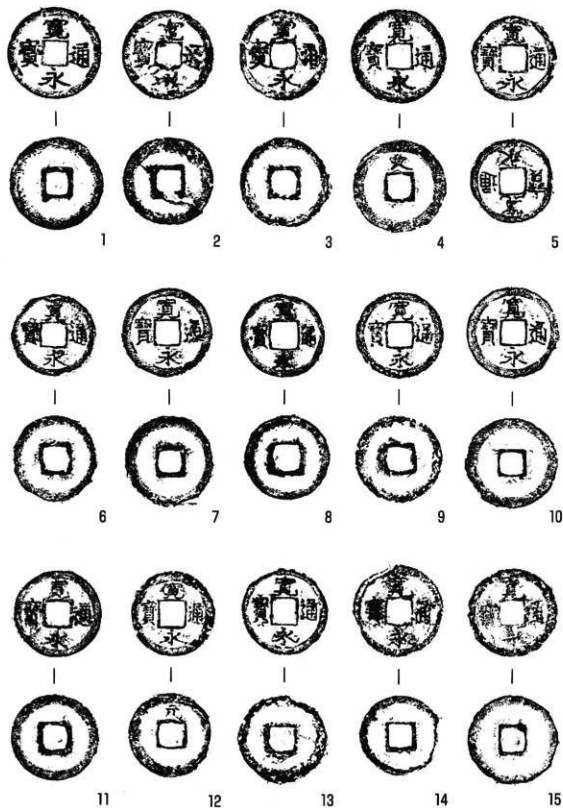
番号	遺構名	遺物名	部 位	計 測 値	備 考
8	SX3	陶器	小碗	口径— 底径— 器高— 厚20.4cm	

第17図 墓墳内出土遺物(2)

表4 墓墳内出土遺物一覽表

遺構名	形状	棺材	銭貨		煙管		和鏡	柄鏡	毛抜	櫛	土人形	陶磁器	その他
			銅	鉄	煙首	煙口							
SX1	方形状		29	1	1						2		釘片1
SX2	方形状												鉄片2
SX3	方形状		1	24	1	1						陶器碗1	かわらけ1、種子
SX4	方形状												かわらけ1、鉄片
SX5	方形状?		7	3							1		鉄片2
SX6	不明			1		1							
SX7	不明												
SX8	不明			70									

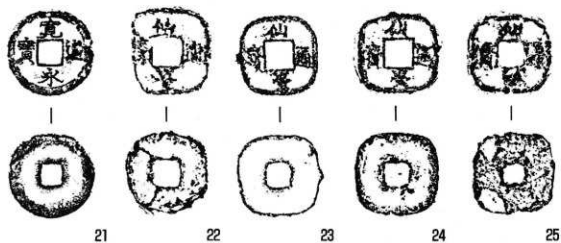
SX1



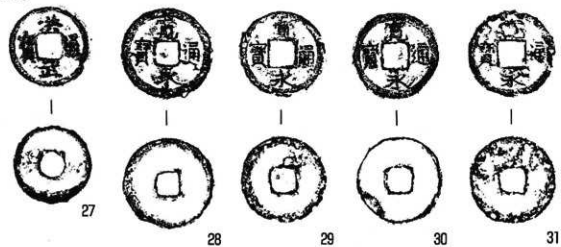
S=原寸

第18圖 墓壙內出土錢貨(1)

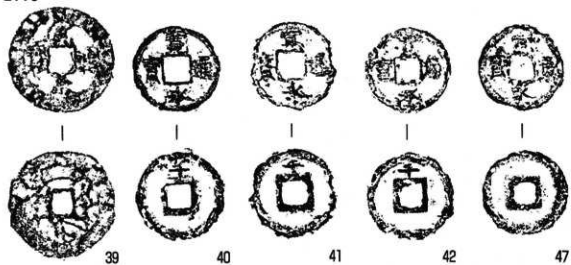
SX 3



SX 5



SX 8



S=原寸

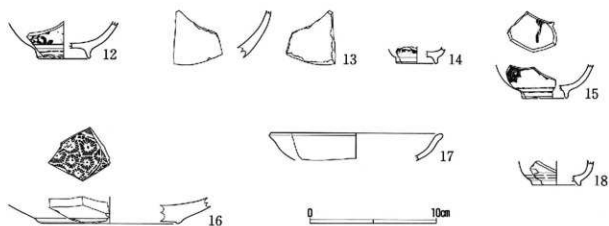
第19図 墓壙内出土銭貨(2)

表5 墓壙内出土銭貨計測表(1)

番号	銭名	分類	素材	遺構名	铸造年代ほか	直径 _{mm}	量目 _g	備考
1	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 1	1636~1659	2.5	2.78	
2	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 1	1636~1659	2.4	2.43	
3	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 1	1636~1659	2.4	2.56	
4	寛永通寶	文銭	b	銅 SX 1	1668~1683	2.4	2.43	
5	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.3	20.78	8枚
6	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.3	5.38	3枚
7	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.4	3.67	
8	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.2	2.02	
9	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.3	2.66	
10	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.4	2.88	
11	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.3	2.30	
12	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	摂津国大阪高津新地鑄 初鑄1741	2.3	1.82	
13	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.3	1.51	
14	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.4	3.96	2枚
15	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.4	2.10	
16	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.4	1.90	
17	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~	2.4	1.51	
18	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 1	1697~		0.87	
19	不詳			銅 SX 1			2.09	
20	不詳			鉄 SX 1			2.29	
21	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 3	1697~	2.3	2.75	
22	仙台通寶			鉄 SX 3	初鑄1784	2.3	51.68	19枚
23	仙台通寶			鉄 SX 3	初鑄1784	2.1	2.69	
24	仙台通寶			鉄 SX 3	初鑄1784	2.2	2.53	
25	仙台通寶			鉄 SX 3	初鑄1784	2.4	2.15	
26	不詳			鉄 SX 3		2.7	8.13	2枚
27	洪武通寶			銅 SX 5	初鑄1368	2.1	1.63	
28	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 5	1697~	2.4	3.46	
29	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 5	1697~	2.3	2.35	
30	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 5	1697~	2.3	2.37	
31	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 5	1697~	2.3	2.06	
32	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 5	1697~		1.81	
33	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 5	1697~		1.49	
34	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 5	1739~	2.3	4.77	
35	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 5	1739~		1.21	
36	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 5	1739~		3.60	
37	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 6	1739~		1.34	
38	寛永通寶	新寛永	f	鉄 SX 8	武蔵国江戸深川千田新田鑄 初鑄1860	2.8	7.02	當四銭 2枚
39	寛永通寶	新寛永	f	鉄 SX 8	武蔵国江戸深川千田新田鑄 初鑄1860	2.8	3.93	當四銭
40	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	仙台石巻鑄 初鑄1768~	2.3	2.02	
41	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	仙台石巻鑄 初鑄1768~	2.3	2.52	
42	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	仙台石巻鑄 初鑄1768~	2.3	10.23	4枚
43	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	仙台石巻鑄 初鑄1768~	2.3	2.19	
44	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	仙台石巻鑄 初鑄1768~	2.3	3.84	2枚
45	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	仙台石巻鑄 初鑄1768~		2.37	
46	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	仙台石巻鑄 初鑄1768~	2.3	1.63	
47	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739~	2.3	2.53	
48	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739~		22.53	10枚
49	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739~	2.2	9.15	4枚
50	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739~		10.57	4枚

表6 墓境内出土銭貨計測表(2)

番号	銭名	分類	素材	遺構名	製造年代はか	直径cm	重量g	備考
51	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-		9.35	4枚
52	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.4	8.02	3枚
53	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	8.32	3枚
54	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.4	5.26	2枚
55	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	6.41	2枚
56	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.4	7.31	2枚
57	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	4.78	2枚
58	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.2	1.75	
59	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-		2.26	
60	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	1.62	
61	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	2.29	
62	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	2.34	
63	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.2	2.15	
64	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	2.11	
65	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	2.59	
66	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.4	2.60	
67	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-		2.02	
68	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-		4.37	2枚
69	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	1.88	
70	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-		1.83	
71	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	2.48	
72	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.3	1.68	
73	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-		1.66	
74	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-	2.2	2.02	
75	寛永通寶	新寛永	d	鉄 SX 8	1739-		1.44	



番号	出土地点	器種	口徑(cm)	器高(cm)	器径(cm)	胎土	釉薬・絵付	製作地	製作年代	備考
12	遺構外 灰土	磁器碗	—	(3.0)	(4.0)	白色	染付(青)	不明	19c 以降	
13	遺構外 灰土	陶器碗	—	(3.8)	—	黄褐色	不明	不明	19c 以降	
14	遺構外 灰土	磁器碗	—	(1.3)	(3.2)	白色	染付(黄色)	不明	19c 以降	
15	遺構外 灰土	磁器碗	—	(3.7)	(3.4)	白色	染付(紫)	不明	19c 以降	
16	遺構外 灰土	磁器皿	—	(2.1)	(11.0)	白色	染付(青)	不明	19c 以降	底の目割製高台
17	遺構外 灰土	陶器碗	(13.6)	(2.2)	—	灰白	不明	不明	19c 以降	
18	遺構外 灰土	陶器碗	—	(2.0)	(3.8)	灰	不明	不明	19c 以降	

第20図 遺構外出土遺物

2. 遺構外出土遺物

遺構外からの出土遺物は、土師器と陶磁器が小コンテナ4分の1箱程とごく僅かである。その理由としては国道4号建設時の地山面の削平、それ以前の水田造成時の地山面の削平及び家屋の建て替えなどにより調査区全体における地形の改変が進んだためと思われる。

(1) 土師器

土師器の細片が小コンテナ1/4箱以下の極少量出土した。甕の体部と思われるが、小破片のため図面掲載をしていない。

(2) 陶磁器

7点の出土である。12、14～15は染付の磁器碗で、16は染付の磁器皿で型紙摺りによるものである。13、17～18は陶器碗である。いずれも製作地は不明であるが、釉薬の特徴等から19世紀以降に製作されたものと思われる。

3. 考察とまとめ

(1) 遺構

① 掘立柱建物跡

調査区南側で1棟検出された。地山面が国道4号建設以前にあった水田の影響で削平されており、また電柱の支柱により調査不能部分もあったため、全体形は不明である。検出規模は桁行1間以上、梁行2間である。軸線方向は、N-11°-Wである。PP11は上半部を削平により消失しており、PP11を除いた柱穴の規模は、直径26-34cm、深さ12-24cmである。柱穴の底面標高は26.968-27.108mである。

建物の時期は、出土遺物がなく詳細は不明であるが、調査区内に12世紀に属する遺構がないことや他の検出遺構の時期から併せてみて、近世に属する可能性がある。

② 土坑

調査区全体で39基の検出され、特に北側低地部分の約300㎡ほどの狭い範囲に35基が集中して検出された。その35基についてみると、平面形状は円形・円形状が19基、楕円形・長楕円形が10基、方形・長方形が4基、不整形が2基である。規模は開口部長径(長軸・最大長含む)が100cm未満4基、100-200cmが17基、200-300cmが8基、300cm以上が3基、不明が3基である。

遺構の性格については、全ての土坑について完掘を行っていないため断定はできないが、平面形状及び規模、また検出面における土色などからSK1、8、10-13、15-27、29、31、36-38の計24基については民家に伴う井戸跡と推定される。ある一定の範囲内で多くの井戸跡が検出されるということは、民家の限られた敷地内において井戸を構築しなくてはならないことを物語っている。ただし、民家の柱穴等がこれら井戸跡と思われる土坑群付近において検出されなかったため、民家の位置等は不明である。

また、これだけの井戸跡が狭い範囲内に集中していたことについては、確証はないがこの土地は地下の帯水層が豊富でないこと、あるいは何らかの要因により地下水位が変動しやすく、井戸を掘り当てて水が湧いたとしてもそれはある期間のみですぐに枯渇してしまう井戸であることが推察される。調査した井戸跡と思われる土坑2基についても精査中に水が湧くことはなかった。さらに、井戸跡と推定した土坑同士の間には関係はなく、このことは以前掘った場所を避けて掘っている、すなわち水が湧かないあるいは湧かなくなった井戸であるから、その場所を避けて新たな場所に意識的に作り替えを行ったと推察することができる。

井戸跡の時期については、埋土の様相だけで遺構の上限を論ずるのは非常に困難を伴うが、近世以降ということにしておきたい。年代の下限は戦後以前で長年この地に住んできた旧地権者の記憶に無いことを考えてみると明治末あたりとなるであろう。

今回の調査においては、時間的な制約及び推測される遺構の時期が近世以降であることから、限られた土坑しか完掘をしていないため得られた情報量も比例して僅かである。その中で推測はしてみたものの無理があると云わざるを得ない状況である。今後、本調査区近隣遺跡の調査事例の増加を待ちたい。

ちなみに近隣遺跡では、高田遺跡第1次発掘調査において近世の井戸跡が1基検出されている。報告書によると、開口部径4.00m、最小径3.75mの楕円形を呈する。覆土は上層の灰黄褐色シルト質土主体の自然堆積層と地山ブロックが混じる人為堆積層に分けられる。出土遺物はかわらけ、常滑、掻器、剃片、砥石破片、近世-近代陶磁器、炉壁が多数出土している。本遺跡の例と比較すると、出土遺物が多いものの、平面形プラン、覆土の様相など共通項を見出すことはできる。

③ 墓塚

・墓の形態

今回の調査で検出された墓はすべて土葬墓である。平面形は調査区外にかかるため不明なものもあるが、概ね方形を基調としている。掘り込みは共通してあまり明瞭ではない。墓の形態は直葬墓と方形木棺墓の可能性もある。SX1とSX5は木棺の検出はされていないものの、釘が出土していることから方形木棺墓の可能性も考えられる。

・墓の年代

今回検出された8基の墓塚群には4基の墓に重複が見られ、次のような新旧関係を確認することができた。

SX6→SX4 (SX4が新) SX5→SX8 (SX8が新)

また、出土遺物からはすべての墓塚が江戸時代に属するものと推測できるが、墓石など年代を知る上で手がかりとなるものはなく、墓塚の規模や配列などから時期決定関する共通項あるいは規則性を見出すよう努めたが困難であった。このため主として出土貨幣により時期を推定することとした。

今回の調査では5基から銭貨が出土している。したがって、ここでは銭貨の組み合わせをもとに銭貨が出土した墓塚を区分し、新旧関係を踏まえながら遺構の年代について検討してみることにした。年代決定に際しては、銭貨の組み合わせの中に必ず寛永通寶が共伴していることから、その鑄造年代をもとに行うことにした。その結果、表7に見られるように墓塚の銭貨の組み合わせとともに、出土銭貨内で最も新しく鑄造されている銭貨を基準銭貨とし、上限年代を提示することができた。

表7 墓塚内出土銭貨の組み合わせ

遺構名	出土した銭貨	上限年代
SX1	古寛永銭3枚(銅)、文銭1枚(銅) 新寛永銭24枚(銅) 文明2枚(銅1、鉄1)	新寛永銭の鑄造年代より1741(寛保1)年以降の可能性有り (摂津国大阪高津新地鑄 初鑄1741年より)
SX3	新寛永銭1枚(銅)、仙台通寶22枚(鉄) 不明2枚(鉄)	仙台通寶の鑄造年代より1784(天明4)年以降の可能性有り
SX5	新寛永銭9枚(銅6、鉄3) 洪武通寶1枚(銅)	新寛永銭の鑄造年代より1739(元文4)年以降
SX6	新寛永銭1枚(鉄)	新寛永銭の鑄造年代より1739(元文4)年以降
SX8	新寛永銭70枚(鉄)	新寛永銭の鑄造年代より1860(万延1)年以降 (武蔵国江戸深川千田新出鑄 初鑄1860年より)

個別に見ていくと、SX1は銭種不明の銭貨があるため断定はできないが、18世紀中頃以降の埋葬の可能性はある。SX3はやはり銭種不明の銭貨があるため断定はできないが、仙台通寶の初鑄年代から18世紀後半以降の可能性はある。SX5、6は18世紀中頃以降の埋葬と思われる。SX8は1860年初鑄の武蔵国江戸深川千田新田鑄造と思われる新寛永銭を含むことから、江戸時代後半の幕末期に近い時期の可能性はある。これは、SX8がSX5より新しいという遺構の切り合い関係とも合致する。また、出土銭貨はないものの新旧関係からSX6より新しいSX4は18世紀中頃以降の埋葬と推測される。

ここで、隣接の三日町I遺跡で検出された墓塚と比較してみたい。三日町I遺跡の墓塚の詳細は後述しているが、三日町I遺跡における墓塚の掘り方は、墓の形状が円形なのか、方形なのか、あるいは長方形なのか明瞭であるものがほとんどであるのに対し、佐野遺跡の方は今述べたようにやや曖昧ではっきりとしない。三日町I遺跡の墓塚の掘り方は、木棺や早桶の形や大きさに合わせて丁寧に掘られており意識的な作業

の様子が伺える。埋葬の時期についても出土貨幣からともに江戸時代であることが分かるが、ただ単に墓塚を掘った人間の掘り方の違いでここまで様相が異なるものなのか疑問である。平泉町内で近世墓が検出された湘原Ⅰ遺跡第3次調査や柳之御所跡第24次調査においてもその掘り方は明瞭なものが多い。したがって佐野遺跡の墓の掘り方が明瞭でないのは、かつて墓の移転が行われたことに起因する可能性がある。墓塚群が検出された地点は、調査前まで旧地権者宅の門口にあたる部分であり国道4号に面している。国道4号の敷設がきっかけとなったかどうかは定かではないが、何らかの理由により墓の移転が必要となり、そのため掘り起こされたのではないだろうか。旧地権者によるかつての墓の移転は勿論のこと墓の存在すら聞いた覚えはないということである。この点を考慮すると、墓の移転が行われていたとすれば昭和20年以前のことと推察される。したがって、直葬墓と推測した墓塚の形態については木棺墓の可能性もあるものと言えよう。

④ 溝状遺構

今回検出された溝状遺構については、時期およびその性格は不明である。SD2は当初、平面形や規模から上面が削平された陥し穴状遺構とみていたが、土坑37号と重複関係にありSD2が新しいことが分かったため溝状遺構とした。SD3は深さが3～4cm程度と浅く、削平をかなり受けている。道路を挟んだ南側の飛び地の調査区ではSD3の続きと思われる溝跡は検出されていない。

(2) 遺物

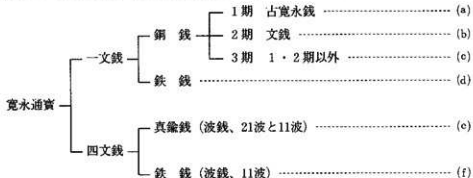
今回の調査で出土した遺物は、墓塚を除くとかわらけ、土師器、陶磁器、石器、鉄片で量的には小コンテナ4分の1箱程で、復元できたもの、実測可能なものがほとんどなかったため、細かく分類することができなかった。主立った遺物に関する詳細は本文中に記載している。一方、埋葬時に墓塚内に副葬された遺物として銭貨、煙管、土人形等が出土しており、ここではそれらについて若干見ていきたい。

① 銭貨

今回の調査では、5基の墓塚から合計136枚の銭貨が出土しており、以下のような方法で分類を行った。

(本邦銭) …国内で铸造された銭貨のこと。

今回の調査で確認できたものは全て寛永通寶と仙台通寶である。寛永通寶の選別については、初铸年代がほぼ確定している古寛永銭と新寛永銭の大分類を基本に以下のとおりで分類を行った。



a : 1638 (寛永13) 年～1659 (万治2) 年頃まで铸造された、いわゆる「ス宝銭」のこと。

b : 1668 (寛文8) 年～1683年 (天和3) 年まで江戸亀戸村で铸造された、背面に「文」字を配する通称「文銭」のこと。一般に文銭を含め2期以降を「新寛永」と称するが、本報告書では便宜上(b)を「文

銭」、(e)以降を「新寛永」と区分している。

c：1期・2期以外のもので、1697（元禄10）～1747（延享4）年、1767（明和4）年～1781（天明元）年に鑄造された銭貨のこと。

d：1739（元文4）年以降に鑄造された鉄一文銭のこと。

e：1768（明和5）年以降に鑄造された四文銭のこと。1769年からは11波に変更。

f：1860（万延元）年以降鑄造された鉄四文銭のこと。

〈渡米銭〉 …輸入銭のこと。

国内で鑄造された模鑄銭（私鑄銭）の可能性もあるが、厳密な区分が困難であることから渡米銭として扱う。今回の調査では洪武通寶1枚が出土している。

この大分類を当てはめると本邦銭131枚、渡米銭1枚、錆化あるいは錆化による癒着が著しく判別できなかったものは4枚である。本邦銭の内訳は寛永通寶109枚、仙台通寶22枚である。さらに寛永通寶は下の表8のとおりに細分される。また、個々の銭貨の分類は表4・5に提示しており、泉貨学の提示する細分類については、活用可能な限り選別を行った。

表8 寛永通寶分類表

遺構名	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	合計
SX 1	3	1	24	0	0	0	28
SX 3	0	0	1	0	0	0	1
SX 5	0	0	6	3	0	0	9
SX 6	0	0	0	1	0	0	1
SX 8	0	0	0	67	0	3	70
合計	3	1	31	71	0	3	109

※寛永通寶と確認できたものに限って分類している。

② 煙管

煙管の分類については、すでに古泉弘氏や小川望氏によって各部の形態の違いから下記の6段階に区分がされており、それに従った。

1類…煙管の初現形態で、火皿下の脂返しが一皿下方へ大きく湾曲し、羅字にとりつく部分が一段太く巻かれた「肩付」となる。火皿と首部の接合部には補強帯が巡る。16世紀末～17世紀初頭。

2類…脂返しが大きく湾曲する。「河骨形」という形態をとる。肩付きで、補強帯が巡る。17世紀前半。

3類…河骨形で、補強帯が巡るが、首部には火皿の下から羅字接合部まで1枚の銅板を巻いて製作される。17世紀後半。

4類…河骨形で、補強帯は消失。18世紀前半。

5類…脂返しの湾曲が小さくなる。18世紀後半。

6類…火皿は小型化し、脂返しの湾曲はほとんどなくなり、火皿の下に直角に取り付く。19世紀。

本遺跡においては、3基の墓塚から雁首2点、吸口2点の計4点が出土した。5は脂返しの湾曲が小さくなる5類の特徴を持つ。7は遺存状態が悪いが、雁首に補強帯がないことから4類以降と思われる。6は7と同じくSX3からの出土であるから同一製品であろう。10は吸口のみ出土で段階は不明である。

③ 土人形

型作りされた土（泥）人形である。花巻人形のように中空作りであるが、詳細は不明である。

(3) 小結

佐野遺跡第1次調査区は、概ね近世及び近世以降の遺跡であることが確認された。当初予想された12世紀に該当する遺構は検出されなかった。検出された遺構については共伴遺物が少ないこともあり、時期不明な遺構も多い。また調査区は、最近まで使用されていた防火用水槽の他、国道4号建設以前の水田耕作による地山面の削平や民家等の建物による地盤の改変の影響を強く受けていた。

調査区北側低地部分で集中的に検出された土坑群の多くは、井戸跡であるものと思われる。おそらく民家に伴うものであろうと予測されるが、土坑群の周辺で建物跡を構成する柱穴等は検出されなかった。調査の性格上、精査は抽出した4基のみを限定して行ったため、遺構の時期を具体的に特定することは困難であり、また変遷過程も追うことができなかった。

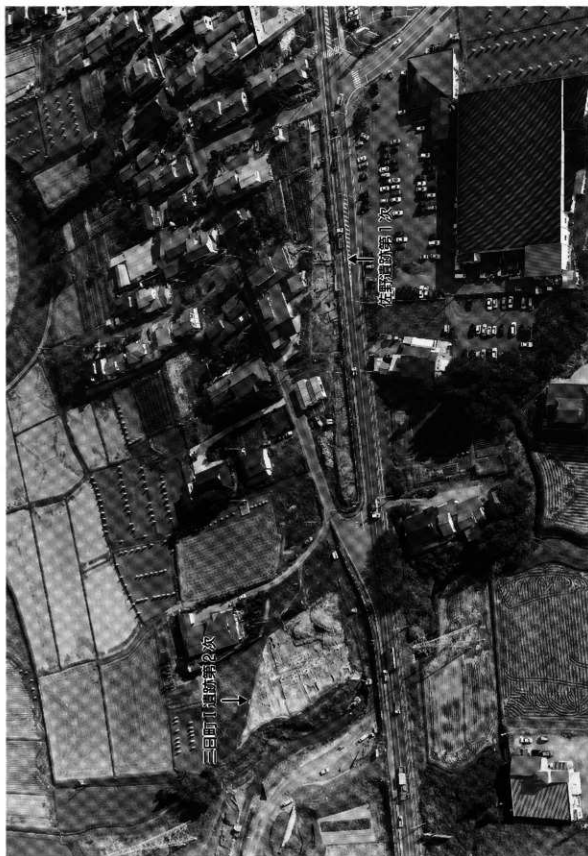
墓塚については、時期は出土遺物から江戸時代に属するものと推測できるが、墓石など年代を知る上で手がかりとなるものが残っていなかった。具体的な時期に関しては、主に古銭などの出土遺物に頼らざるを得ず、またその古銭についても近世遺構の調査例が増加するに伴い、年代的に泉貨学の成果と矛盾する出土状況を示すものも確認されている。したがって、初鋳年代がほぼ確定している占寛永銭、新寛永銭の大分類を基本に、細分類については活用可能とされているものに限って選別を行い、埋葬された年代を推測した。

本遺跡においては、土坑群の時期の特定をはじめ推測の域を出ない点多々あり、遺跡周辺における調査事例の増加が待たれるところである。本遺跡周辺では佐野原遺跡第1次～2次、三日町Ⅰ遺跡第1次、三日町Ⅱ遺跡第1次、高田遺跡第1次～2次が発掘調査されているが、高田遺跡第1次～2次以外では遺構が検出されていない。高田遺跡第1次では、縄文時代の陥し穴状遺構、平安時代の掘立柱建物跡、近世～近代の厩跡、井戸跡、溝跡が検出されており、高田遺跡第2次では、縄文時代の土坑、中世の溝跡、掘立柱建物跡、カマド状遺構、近世近代の壑穴状施設等が検出されている。しかしながら、平泉町中心部地域に比べると調査事例が圧倒的にまだまだ少ないのは事実である。今後さらに周辺地域の調査事例が増加するに従い、本遺跡及び遺跡周辺の様相が明らかになっていくものと思われる。

④ 利用・参考文献

三日町Ⅰ遺跡第2次調査分とまとめて134頁に掲載している。

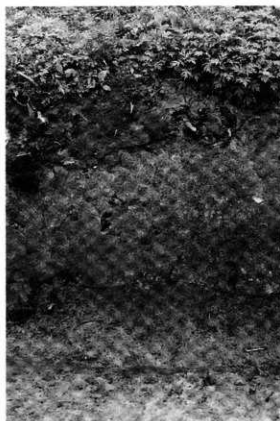
佐野遺跡第1次調査
写 真 図 版



写真図版1 遺跡全景①(上空より)



遺跡全景② (E→)



基本土層 (ⅢA4f北側)

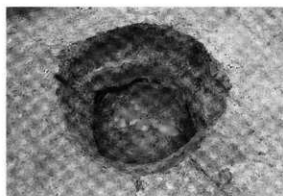


基本土層 (ⅡA6h西側)

写真図版2 遺跡全景(上空より)・基本土層断面



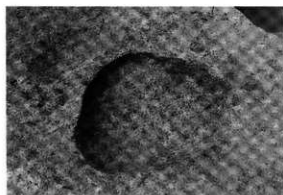
調査区北側土坑群 (S→)



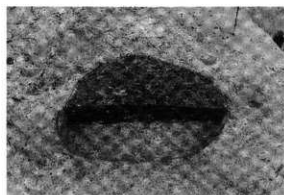
SK1平面 (S→)



SK1断面 (S→)

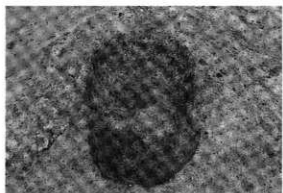


SK4平面 (S→)



SK4平面 (S→)

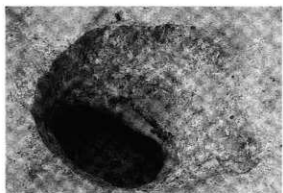
写真図版3 土坑 (1)



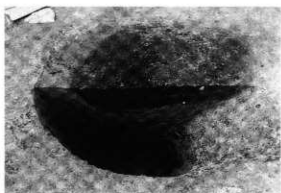
SK5 平面 (S→)



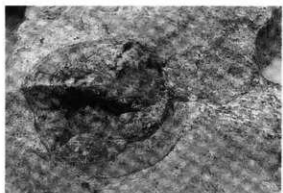
SK5 断面 (S→)



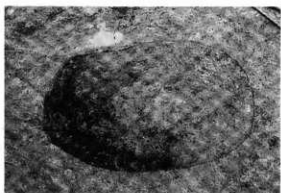
SK8 平面 (S→)



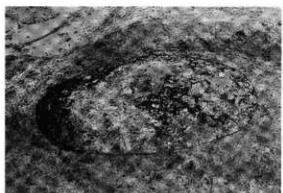
SK8 断面 (S→)



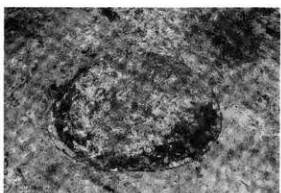
SK13, SK14, SK35 検出 (S→)



SK19 検出 (N→)



SK28 検出 (E→)

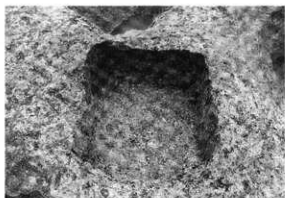


SK30 検出 (S→)

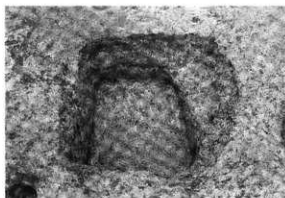
写真図版 4 土 坑 (2)



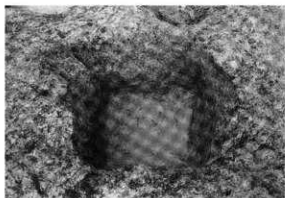
墓 墳 群 (S→)



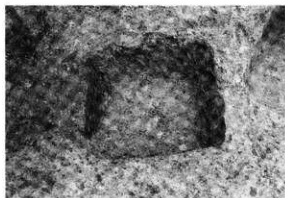
SX1平面 (N→)



SX2平面 (S→)

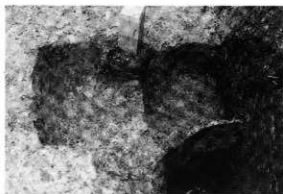


SX3平面 (S→)



SX4平面 (N→)

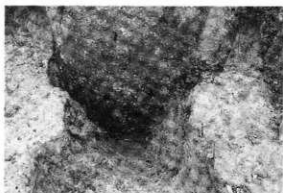
写真図版5 墓 墳 (1)



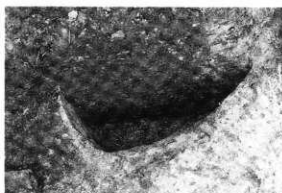
SK 5, SX 8 平面 (S→)



SX 5 遺物出土状況



SX 6 平面



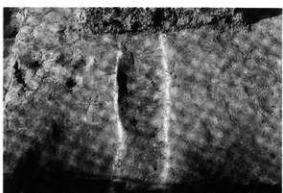
SX 7 平面 (W→)



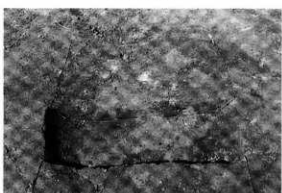
SD 1 平面



SD 1 断面

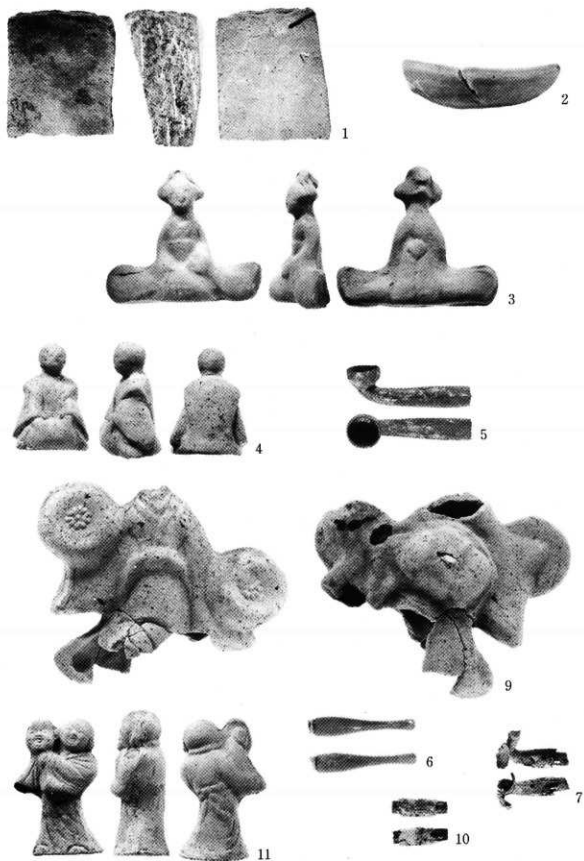


SD 4 平面



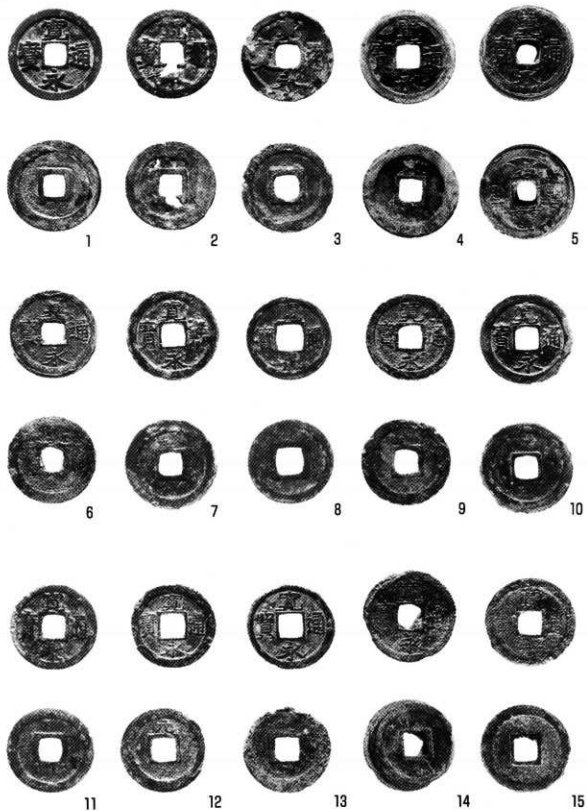
SD 4 断面

写真図版 6 墓域(2)・溝状遺構



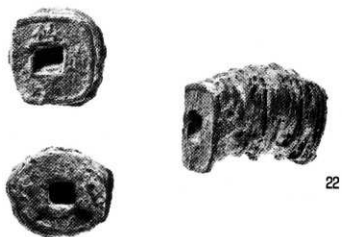
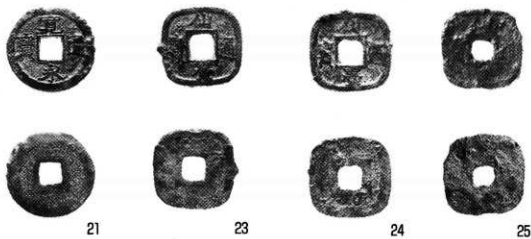
写真図版7 遺構内出土遺物・墓壙内出土遺物

SX1

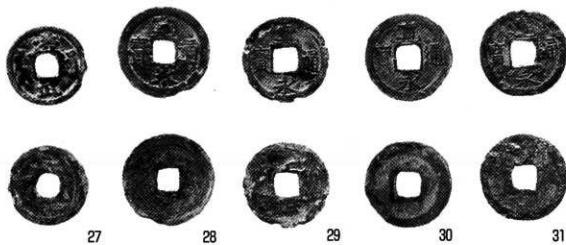


写真図版 8 墓墳内出土銭貨(1)

SX3

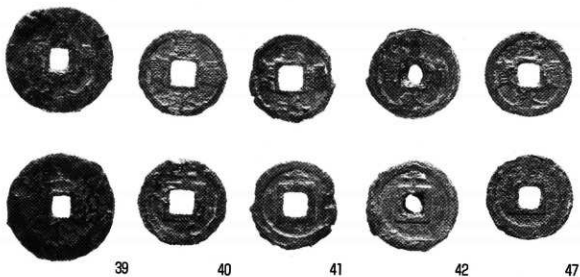


SX5

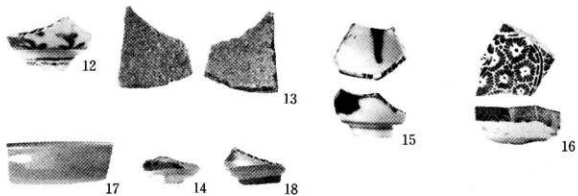


写真図版9 墓境内出土銭貨(2)

SX8



遺構外

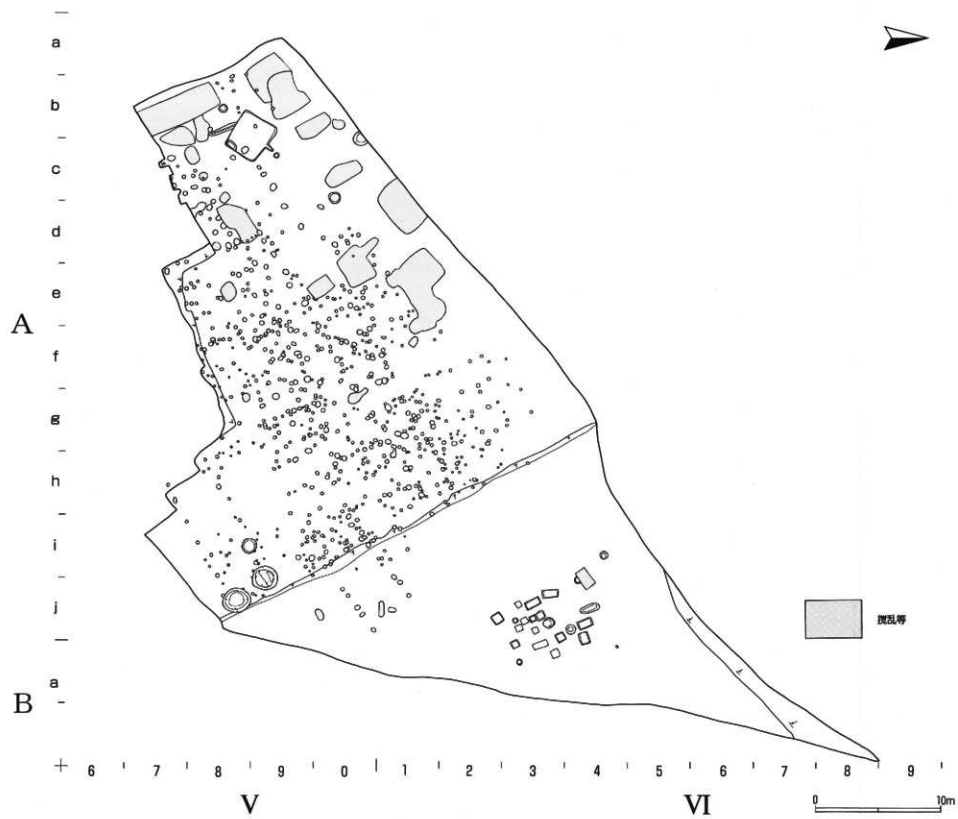


写真図版10 墓墳内出土銭貨(3)・遺構外出土遺物



V. 三日町 I 遺跡第 2 次発掘調査

所在地	西磐井郡平泉町平泉字三日町143-1ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間	平成10年8月1日～10月31日
調査対象面積	1,400㎡
発掘調査面積	1,550㎡
遺跡番号・略号	NE86-0120・MKMI-98
調査担当者	朝倉雄大・羽柴直人
協力機関	平泉町教育委員会



第21図遺構配置図

V. 三日町 I 遺跡第 2 次発掘調査の結果

1. 検出された遺構と遺物

本遺跡の調査で確認・調査した遺構は、竪穴住居跡 1 棟、掘立柱建物跡 33 棟、柱列 8 条、陥し穴状遺構 1 基、井戸跡 1 基、土坑 5 基、墓墳 22 基、カマド状遺構 1 基、柱穴 731 基である。

(1) 竪穴住居跡

・S11 (第 22 図、写真図版 12)

〈位置・検出状況〉 調査区西側 VA8b~8c、VA9b~9c グリッドに位置する。表土除去後の IV 層上面で検出した。粗掘り後の遺構検出作業の際、黒色の埋土の広がりや土師器片・須恵器片が出土したことから竪穴住居として精査を進めた。全体のプランは把握できるものの上部は削平されており、残存状態はあまり良くない。

〈重複〉 TP1、SB10、SB32 と重複関係にあり、TP1 は本遺構より古く、SB10、SB32 は本遺構より新しい。

〈平面形〉 隅丸方形を呈する。

〈規模〉 336cm×292cm で、床面積は 9.81m² である。

〈埋土〉 上部がかなり削平されているため、床面までの埋土の層厚は約 10cm 前後しか残存していない。埋土は 4 層で構成されており、1 層は黒褐色土、2 層は明黄褐色土と黒褐色土の混合土層からなる。3~4 層にはぶい黄色土を主体とし堅く締まっている。

〈床面〉 目立った凸凹はなく、ほぼ平坦である。明瞭ではないが、全体的に貼り床が施されている。

〈壁〉 壁はいくぶん外傾して立ち上がる。

〈炭化材・焼土〉 焼土が 2 基存在する。焼成範囲は北東隅が 62×42cm、南東隅寄りが 68×62cm である。

〈柱穴〉 本遺構に伴う柱穴は検出されていない。検出された 3 基は、他遺構の重複によるもので北東側 2 基が SB10 を構成し、中央やや西寄り 1 基が SB32 を構成する。

〈土坑〉 南東隅で 1 基検出された。不整な楕円形を呈し、102×48cm、深さ約 10cm である。

〈カマド〉 (位置) 北壁中央 (主軸) N-39°-E

(本体) 燃焼部焼土が残存する。焼成範囲は 72×52cm、層厚は 5~8cm 程である。

(煙道部・煙出し部) 煙道部は焼成部から 84cm 程延びたところで消滅している。煙出し部は 41×40cm の範囲に広がり、深さは 8cm である。

〈出土遺物〉 縄文土器、土師器、須恵器、石器・石製品が出土した。

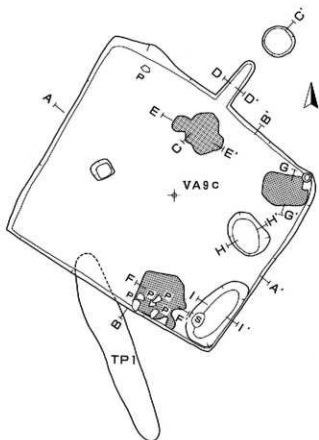
縄文土器 縄文土器片が 1 点 (6) 出土した。本遺構との直接の関連性は認められない。

土師器 土師器の坏が 2 点 (1、2) 出土した。1 は北西隅寄りに位置しており、ロクロ使用で内面はヘラミガキ調整である。2 は南東隅寄りの焼土の埋土直上に位置し、ロクロ使用による成型であるが内面調整は残存状態が悪く不明である。

須恵器 同・個体と思われる須恵器の壺の破片が 3 点 (3、4、5) 出土した。南東隅寄りの焼土の埋土直上に位置し、色調は暗灰色、器面調整は体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整を施している。

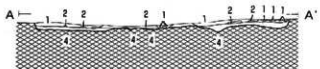
石器・石製品 石鏃が 1 点 (7)、剃片が 1 点 (8) 出土した。7 は凸基有茎鏃で石質は頁岩である。本

SI 1



1. 10Y R2/2層 礫石混入・炭化物混入 粘性やや有り・締まりやや軟
2. 10Y R2/2層 礫石混入・炭化物混入の粘土土 粘性無し・締まり有り
3. 5Y R2/2層 礫石混入・炭化物混入 粘性有り・締まり有り
4. 2.5Y R2/2層 礫石混入・炭化物混入 粘性有り・締まり有り

L=23.500m



L=23.500m



1. 10Y R2/2層 礫石混入・炭化物混入 粘性やや有り・締まりやや軟 礫山し屋上
2. 10Y R2/2層 2.5Y R2/2層 礫山ブロック40% 粘性やや有り・締まりやや軟 礫山し屋上
3. 10Y R2/2層 粘性やや有り・締まりやや軟
4. 10Y R2/2層 2.5Y R2/2層 礫山ブロック30% 粘性やや有り・締まりやや軟
5. 5Y R2/2層 礫土 礫土層(10-20cm)少量 粘性やや有り・締まりやや軟
6. 2.5Y R2/2層 礫土 礫土層(10-20cm)少量 粘性やや有り・締まりやや軟
7. 5Y R2/2層 礫土 粘性やや有り・締まりやや軟
8. 2.5Y R2/2層 礫土 礫土ブロック(1-2.3cm)少量 粘性無し・締まりやや軟
9. 5Y R2/2層 礫土 2.5Y R2/2層 礫山土10% 粘性有り・締まりやや軟

L=23.500m



L=23.500m



1. 5Y R2/2層 礫土 礫土層(5-15cm)少量 炭化物少量 粘性無し・締まり有り
2. 5Y R2/2層 礫土 礫土層(5-15cm)少量 粘性有り
3. 2.5Y R2/2層 礫山土 10Y R2/2層 粘性無し・締まり有り

L=23.500m



1. 10Y R2/2層 2.5Y R2/2層 礫山ブロック20% 礫土炭化物混入 粘性無し・締まり有り

L=23.500m



1. 5Y R2/2層 礫土 2.5Y R2/2層 礫山ブロック10% 礫土層(5-15cm)少量 炭化物少量 粘性有り・締まり有り
2. 2.5Y R2/2層 礫山土 10Y R2/2層 礫山土30% 粘性有り・締まりやや軟

L=23.500m



1. 10Y R2/2層 2.5Y R2/2層 礫山土30% 土層が粘性 粘性無し・締まり有り

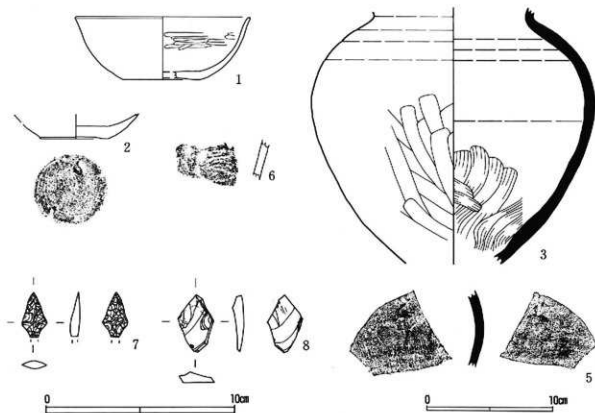
L=23.500m



1. 5Y R2/2層 2.5Y R2/2層 礫山ブロック10% 礫土層・礫土層(10cm)少量 粘性無し・締まり有り
2. 2.5Y R2/2層 礫土 礫土ブロック(1-2.3cm)少量 粘性無し・締まり有り
3. 5Y R2/2層 礫土 粘性有り・締まりやや軟
4. 5Y R2/2層 礫土 2.5Y R2/2層 礫山土20% 粘性やや有り・締まりやや軟

0 2m

第22図 SI 1住居跡



土器類・灰皿類

番号	出土地点	器種	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外周厚さ	内周厚さ	色調	備考		
1	S1-1住居跡 VA9bグリップ	土師器	鉢	(14.0)	5.0	(6.2)	ロクロ	ヘラミガキ	青	図録未収		
2	S1-1住居跡 VA8bグリップ	土師器	鉢	—	(2.0)	5.4	ロクロ	不明	浅黄褐色	図録未収		
3	S1-1住居跡 VA8bグリップ	須恵器	甕	—	(20.8)	—	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	ヘラナデ	緑灰	3と同一體
4	S1-1住居跡 VA8bグリップ	須恵器	甕	—	(13.8)	—	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	ヘラナデ	緑灰	3と同一體
5	S1-1住居跡 VA8bグリップ	須恵器	甕	—	(6.0)	—	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ	ヘラナデ	緑灰	3と同一體

陶文土器

番号	出土地点	器種	器位	絵線の特徴	色調	備考
6	S1-1住居跡 VA8bグリップ	須恵器?	割腹	単減、L.R織文?	にぶい黄褐色	

石器

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	産地	備考
7	S1-1住居跡 VA8bグリップ	石鏃	2.3	1.3	0.3	1.02	頁岩		
8	S1-1住居跡 VA9cグリップ	フレイク	3.1	1.9	0.6	2.47	頁岩		

第23図 S11住居跡出土遺物

遺構との関連性は不明である。

〈時期〉 出土遺物から9世紀後半～10世紀と思われる。

(2) 掘立柱建物跡

・SB1 (第24図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 VA9g-VIA1j グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB2、SB3、SB4、SB5、SB6、SB7、SB8、SB9、SB24、SB25、SB26、SB27、SB28、SB29、柱列1号、柱列5号、柱列6号と本遺構のプランが重複し、柱穴の切り合いから本遺構はSB27より古い。

〈規模〉 桁行7間以上(検出長1393cm-北)、梁行4間(総長648cm-西)の建物である。建物の東側が地山面の削平により柱穴が検出されておらず全体形は不明である。面積は推定部分を含め建物全体で約92.7㎡(28.1)坪である。

〈平面形式〉 桁行7間、梁行2間の身舎であり、南側と北側に張り出しが付く。身舎内で検出された柱穴が少ないため、間取りの想定は困難であるが、P318とP259により身舎内の空間がは大きく分割されていたものと思われる。

〈軸線方向〉 N-32°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は209cm(6.9尺)と221cm(7.3尺)を使用しており、梁行は221cm(7.3尺)である。

〈建物の性格〉 大きさから母屋的な性格が推察される。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 中世に属するものと思われる。

・SB2 (第25図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 VA9g-VIA1j グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB3、SB4、SB5、SB6、SB7、SB8、SB9、SB16、SB17、SB18、SB19、SB22、SB24、SB25、SB26、SB27、SB28、SB29、柱列1号、柱列5号、柱列6号と本遺構のプランが重複し、柱穴の切り合いから本遺構はSB3、SB4、SB5、SB7、SB19より古く、柱列5号より新しい。

〈規模〉 桁行7間(総長1553cm-南)、梁行4間(総長880cm-西)の建物である。面積は推定部分を含め建物全体で約139.2㎡(42.2坪)である。

〈平面形式〉 桁行7間、梁行2間の身舎に、南北に張り出しが付く。さらに南側東寄りに255cm(8.4尺)四方の空間が張り出すことから、ここが出入り口であった可能性が高い。これを一つの仮定とすると、東側が下手で土間などの空間で、西側が上手の空間となる。詳細な間取りの想定は、検出された柱穴が少ないため困難であるが、P526が空間の大きな一つの境をなしていたと思われる。

〈軸線方向〉 N-32°-Wである。

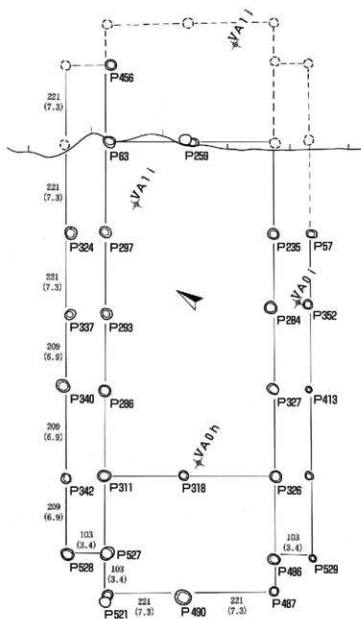
〈柱間寸法〉 桁行は255cm(8.4尺)を基調とする。梁行は282cm(9.3尺)を使用している。

〈建物の性格〉 大きさから母屋的な性格が推察される。

〈出土遺物〉 かわらけ、土師器、中国産磁器、銭貨が出土した。

かわらけ P325よりかわらけの細片が1点(22)出土した。細片のため図面掲載していない。

SB1

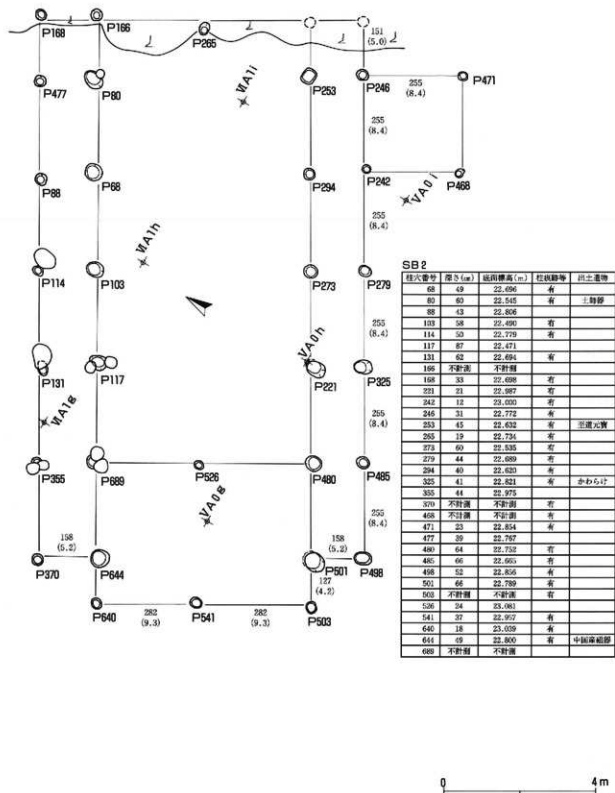


SB1

柱次番号	径径 (mm)	底面标高 (m)	柱状番号	出土産物
57	18	23.000		
63	20	22.981	有	
235	41	22.744	有	
259	不計測	不計測		
281	35	22.705	有	
296	62	22.609	有	
293	56	22.600	有	
297	45	22.650	有	
311	57	22.685	有	
318	14	23.147	有	
324	21	22.902	有	
326	46	22.746	有	
327	39	22.710	有	
337	10	22.896	有	
340	38	22.720	有	
342	20	22.960	有	
352	33	22.660	有	
413	7	22.948	有	
456	16	22.514	有	
466	48	22.813	有	
467	38	22.913	有	
490	32	23.064	有	
521	35	22.995	有	
527	52	22.797	有	
528	28	23.029	有	
529	23	22.886	有	

第24図 掘立柱建物跡(1)

SB 2



第25図 掘立柱建物跡(2)

土師器 P80より土師器臺の細片が1点(14)出土した。細片のため図面掲載していない。

中国産磁器 P644より中国産磁器が1点(28)出土した。器種は白磁四耳壺である。

銭貨 P253より至道元寶が1枚(17)出土した。

〈時期〉 出土遺物から中世に属するとしておきたい。

・SB3 (第26図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 VA9e~VIA1hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB4、SB5、SB7、SB8、SB9、SB11、SB14、SB15、SB16、SB17、SB18、SB22、柱列1号、柱列3号、柱列6号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB4、SB7、SB9、柱列1号より古く、SB2より新しい。

〈規模〉 桁行7間(総長1323cm-南)、梁行5間(総長746cm-北)の建物である。面積は推定部分を含め建物全体で約102㎡(30.9坪)である。

〈平面形式〉 桁行7間、梁行3間の身舎であり、南北に張り出しが付く。さらに南側中央やや東寄りに約1.5坪の方形空間が張り出すことから、ここが出入口であった可能性が高い。詳細な関取りの想定は、建物内部で検出された柱穴が少ないため困難であるが、P374、P652により空間の一つの大きな境界をなしていたと思われる。

〈軸線方向〉 N-22°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は概ね215cm(7.1尺)を基調としている。梁行は260cm(8.6尺)を使用している。

〈建物の性格〉 大きさから母屋的な性格が推察される。

〈出土遺物〉 なし。

〈備考〉 P276に柱材が残存しており、樹種はクリである。

〈時期〉 中世に属するものと思われる。

・SB4 (第27図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 VA9e~VIA1gグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB3、SB5、SB6、SB7、SB8、SB9、SB11、SB16、SB17、SB18、SB22、柱列1号、柱列3号、柱列6号が本遺構のプランと重複しており、本遺構はSB5、SB7より古く、SB2、SB3、SB9より新しい。

〈規模〉 桁行5間(総長1186cm-北)、梁行3間(総長549cm-西)の建物である。面積は約65.1㎡(19.7坪)である。

〈平面形式〉 桁行5間、梁行2間の身舎の北西側に張り出しが付くものと思われる。

〈軸線方向〉 N-28°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は251cm(8.3尺)を基調とする。梁行は194cm(6.4尺)を使用している。

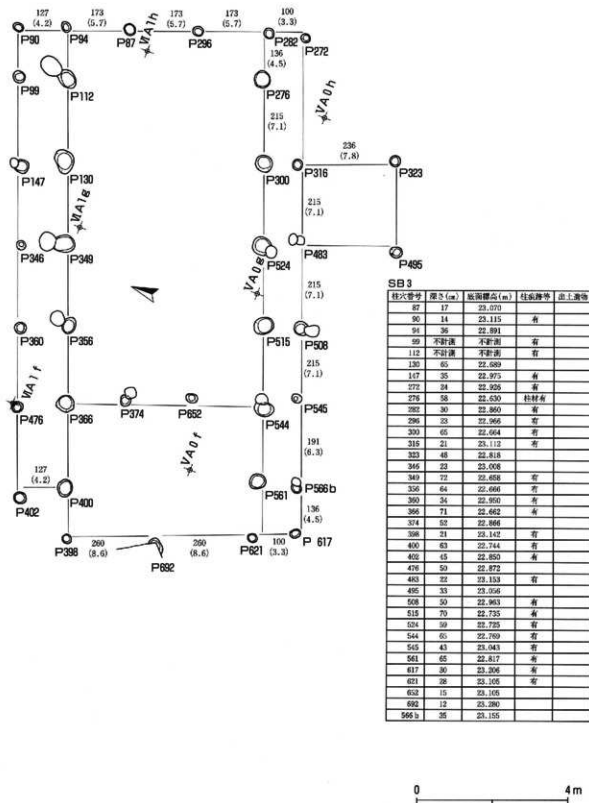
〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 かわらけが出土した。

かわらけ P289、P315からかわらけ(19、21)の細片が出土した。P289は12世紀の手づくねかわらけ、P315はロクロかわらけで中世代のかわらけに似るが、詳細は不明である。細片のため図面掲載していない。

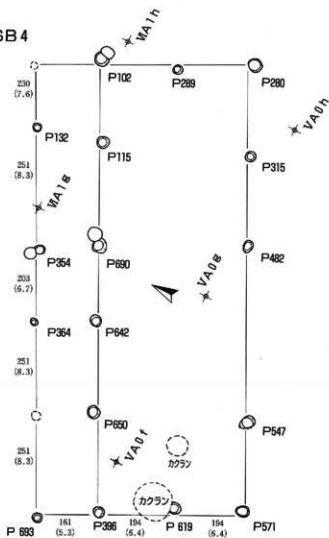
〈時期〉 出土遺物と切り合い関係から中世に属するものと思われる。

SB 3



第26図 堀立柱建物跡(3)

SB4



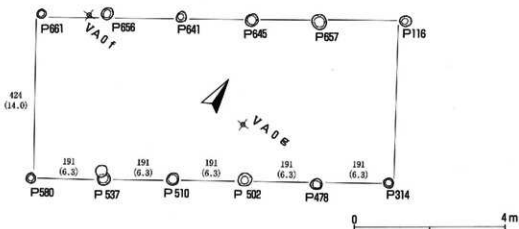
SB4

柱穴番号	深さ(m)	底面径高(m)	柱礎跡等	出土遺物
102	15	23.134	有	
115	48	22.851		
132	22	23.108		
280	44	22.740	有	
289	34	22.885		かわらけ
315	21	23.094		かわらけ
334	09	22.930	有	
364	不計測	不計測		
396	54	22.860		
482	26	23.099		
547	50	22.984	有	
571	55	22.972	有	
619	27	23.048		
642	46	22.969	有	
650	7	23.284	有	
693	53	22.882	有	
693	29	22.030		

SB5

柱穴番号	深さ(m)	底面径高(m)	柱礎跡等	出土遺物
116	42	22.881		
314	48	22.810		
478	58	22.808	有	
502	62	22.800	有	
510	52	22.945	有	
537	57	22.920	有	
580	36	23.124		
641	27	22.991	有	
645	47	22.899	有	
656	47	22.883	有	
657	48	22.898	有	
661	35	22.950	有	

SB5



第27図 堀立柱建物跡(4)

・SB5 (第27図、写真図版13)

- 〈位置・検出状況〉 VA9e~VA0gグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。
- 〈重複〉 SB1、SB2、SB3、SB4、SB7、SB8、SB9、SB11、SB31、柱列1号、柱列6号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB11より古く、SB2、SB4より新しい。
- 〈規模〉 桁行5間(総長955cm-南)、梁行1間(総長424cm-西)の建物である。面積は約40.5㎡(12.3坪)である。
- 〈軸線方向〉 建物の軸線方向はN-34°-Wである。
- 〈柱間寸法〉 桁行は191cm(6.3尺)を使用している。梁行は424cm(14.0尺)である。
- 〈建物の性格〉 大きさから付属小屋と思われる。
- 〈出土遺物〉 なし。
- 〈時期〉 切り合い関係から近世以降と思われる。

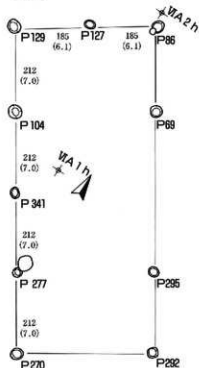
・SB6 (第28図、写真図版13)

- 〈位置・検出状況〉 VA0g~VA1hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。
- 〈重複〉 SB1、SB2、SB3、SB4、SB7、SB14、SB15、SB16、SB17、SB18、SB19、SB28、SB29、柱列1号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB19より古く、SB16より新しい。
- 〈規模〉 桁行4間(総長848cm-西)、梁行2間(総長370cm-北)の建物である。面積は約31.4㎡(9.5坪)である。
- 〈軸線方向〉 N-34°-Wである。
- 〈柱間寸法〉 桁行は212cm(7.0尺)、梁行は185cm(6.1尺)を使用している。
- 〈建物の性格〉 不明である。
- 〈出土遺物〉 かわらけが出土した。
- かわらけ P292からロクロかわらけ(20)が出土している。小型で糸切り痕は明瞭である。中世代のかわらけの様相を呈する。
- 〈時期〉 12世紀ないし中世に属する可能性をもつ。

・SB7 (第28図、写真図版13)

- 〈位置・検出状況〉 VA9e~VA1ghグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。
- 〈重複〉 SB1、SB2、SB3、SB4、SB5、SB6、SB8、SB9、SB11、SB16、SB17、SB18、SB22、柱列1号、柱列3号、柱列6号と本遺構のプランが重複し、本遺構は、SB2、SB3、SB4より新しい。
- 〈規模〉 桁行6間以上(総長1199cm-南)、梁行4間(総長738cm-西)の建物である。面積は推定を含め建物全体で約97.6㎡(29.6坪)である。
- 〈平面形式〉 桁行5間、梁行2間の身舎に、四面に廂をめくらしていたと思われる。P373、P648によって身舎は2×1間が2つ、3×2間の計3つの空間に分割されていたものと思われる。
- 〈軸線方向〉 建物の軸線方向はN-21°-Wである。
- 〈柱間寸法〉 桁行は215cm(7.1尺)、梁行は245cm(8.1尺)を使用している。
- 〈建物の性格〉 大きさから母屋的な性格が推察される。

SB 6



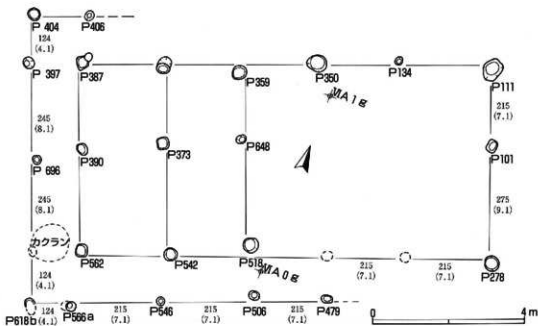
SB 6

柱穴番号	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱面跡等	出土遺物
49	57	22.625	有	
86	40	22.794	有	
104	41	22.889	有	
127	15	23.111	有	
129	48	22.845	有	
220	40	22.715	有	
277	34	22.875	有	
292	不計測	不計測	有	かわらけ
295	33	22.738	有	
341	20	22.840	有	

SB 7

柱穴番号	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱面跡等	出土遺物
101	46	22.809		
111	66	22.610	有	
134	22	23.123	有	
278	70	22.519	有	
350	71	22.690	有	
359	15	23.124	有	
373	38	23.020	有	
387	65	22.720	有	
390	35	23.100	有	
397	32	23.016		
404	49	22.760		
406	21	23.146		
475	13	23.220	有	
506	22	23.313		
518	62	22.762	有	
542	45	22.873	有	
546	16	23.314		
562	52	22.933	有	
648	25	23.129	有	
696	19	23.194		
666 a	35	23.155		
618 b	48	23.018		

SB 7



第28図 掘立柱建物跡(5)

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 中世に属すると思われる。

・SB8 (第29図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 VA7e～VA9gグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB3、SB4、SB5、SB7、SB9、SB10、SB11、SB12、SB23、SB30、SB31、柱列6号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB30より古い。

〈規模〉 桁行6間(総長1389cm—北)、梁行3間(総長690cm—西)の建物である。面積は推定も含め建物全体で約95.8㎡(29.0坪)である。

〈平面形式〉 桁行6間、梁行2間の身舎であり、南北に張り出しが付く。詳細な間取りは、検出された柱穴が少ないため不明であるが、P573が空間一つの大きな境界をなしていたと思われる。

〈軸線方向〉 建物の軸線方向はN-19°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は224cm(7.4尺)、251cm(8.3尺)を使用している。梁行は209cm(6.9尺)である。

〈建物の性格〉 大きさから母屋的な性格が推察される。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 中世に属するものと思われる。

・SB9 (第30図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 VA7e～VA9gグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB3、SB4、SB5、SB8、SB10、SB11、SB12、SB23、SB30、SB31、柱列6号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB4、柱列6号より古く、SB3より新しい。

〈規模〉 桁行7間(総長1616cm—北)、梁行3間(総長576cm—西)の建物である。規模は約93.1㎡(28.2坪)である。

〈平面形式〉 桁行7間、梁行3間の建物である。張り出しとなる柱穴は検出されなかった。詳細な間取りは建物内部で検出された柱穴が少ないため不明であるが、柱穴P568、P576により大きく2つの空間に分割され、さらにいくつかの空間に細分されていたものと思われる。

〈軸線方向〉 建物の軸線方向はN-18°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は真ん中3間が248cm(8.2尺)を使用する他は218cm(7.2尺)を使用する。梁行は179cm(5.9尺)である。

〈建物の性格〉 大きさから母屋的な性格が推察される。

〈出土遺物〉 国産陶器片が出土した。

国産陶器 P600から瀬美産陶器が1点(25)出土した。

〈時期〉 中世に属するものと思われる。

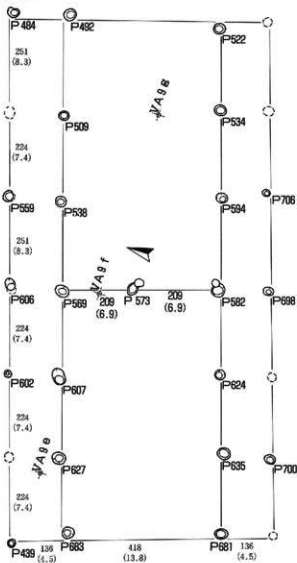
・SB10 (第31図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 VA7c～VA0dグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB8、SB9、SB12と本遺構のプランが重複し、本遺構は、SB12より新しい。

〈規模〉 下屋柱の柱穴がすべて検出されていないため、建物の全体形は不明であるが、桁行8間(総長12

SB 8



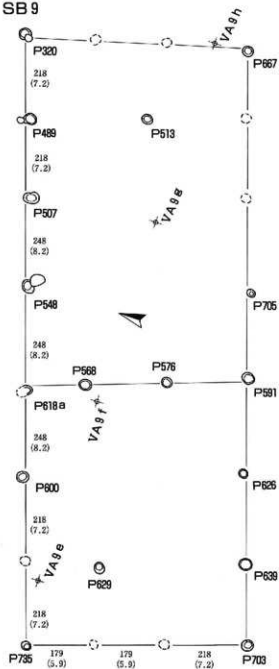
SB 8

柱穴番号	深さ (m)	底面標高 (m)	柱筋埋め	土壌層
439	31	23.150		
484	18	23.205		
492	41	22.985		
509	47	23.098		
522	47	22.865		
534	22	23.060	有	
538	48	23.024		
559	36	23.117		
569	65	22.866		
573	69	22.815		
582	40	23.035	有	
594	27	23.020		
602	19	23.312		
606	26	23.256		
607	60	22.918	有	
624	51	22.890		
627	47	22.788	有	
635	53	23.000		
681	44	22.844	有	
683	66	22.830		
698	11	23.350		
700	27	23.076	有	
706	21	23.100		



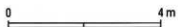
第29図 掘立柱建物跡(6)

SB 9



SB 9

柱状番号	長さ (m)	底面標高 (m)	柱状跡等	出土遺物
350	41	22.910	有	
489	79	22.597	有	
507	66	22.809	有	
513	29	23.027		
548	41	23.060		
568	60	23.026	有	
576	26	22.966	有	
591	35	23.002	有	
600	49	23.038		鹿角鹿角節
618a	48	23.018		
626	25	23.100	有	
629	45	23.029	有	
639	33	23.030	有	
667	41	22.944	有	
705	15	23.184	有	
705	29	22.960	有	
735	27	23.212		



第30図 掘立柱建物跡(7)

26cm-南)、梁行5間(総長667cm-西)の建物が推定される。面積は推定部分も含め建物全体で約81.8㎡(24.8坪)である。

〈平面形式〉 桁行5間、梁行3間の直屋の四面に下屋が付く可能性がある。間取りの詳細は不明であるが、身舎内において検出された柱穴によりいくつかの空間に分割されていたと思われる。

〈軸線方向〉 建物の軸線方向はN-38°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は197cm(6.5尺)、221(7.3尺)など様々な寸法を使用している。梁行は185cm(6.1尺)前後を基調とする。

〈建物の性格〉 大きさから母屋と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 近世に属するものと思われる。

・SB11(第32図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 VA9e~VA1eグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB3、SB4、SB5、SB7、SB8、SB9、SB22、SB31、柱列1号、柱列3号、柱列8号と本遺構のプランが重複し、本遺構は、SB5より新しい。

〈規模〉 桁行5間(総長1135cm-東)、梁行2間(総長394cm-南)の建物である。面積は約44.7㎡(13.6坪)である。

〈平面形式〉 桁行5間、梁行2間の直屋である。詳細な間取りは不明であるがP663が空間の一つの境界をなしていたと思われる。

〈軸線方向〉 建物の軸線方向はN-38°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は221cm(7.3尺)、236cm(7.8尺)を使用している。梁行は197cm(6.5尺)である。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 陶器が出土した。

陶器 P579より陶器碗の小破片が1点(24)出土した。

〈備考〉 P392、P403の柱材の樹種はクリである。

〈時期〉 切り合い関係から近世以降と思われる。

・SB12(第32図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 VA7c~VA8eグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB8、SB9、SB10、柱列4号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB10より古い。

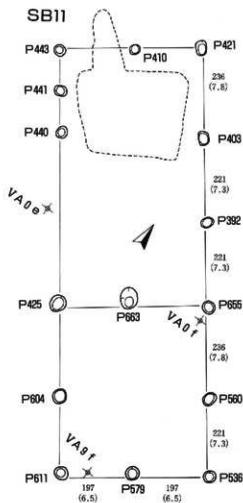
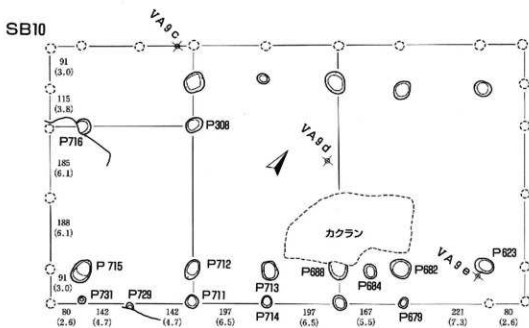
〈規模〉 桁行5間(総長938cm-北)、梁行3間以上(検出長631cm-東)の建物である。南側が調査区外に延びるため、全体形は不明である。面積は推定部分を含め建物全体で約56.9㎡(17.2坪)である。

〈平面形式〉 桁行5間、梁行2間の身舎に、北側に張り出しが付く。南側にも張り出しが付いていた可能性がある。間取りは身舎内において柱穴が検出されていないため不明である。

〈軸線方向〉 建物の軸線方向はN-19°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は242cm(8.0尺)を使用している。梁行は213cm(7.0尺)や312cm(10.3尺)等を使用している。

〈建物の性格〉 大きさから母屋的な性格が推察される。



SB10

柱穴番号	径さ(m)	最深部高(m)	柱礎跡等	出土遺物
308	19	23.236		
621	25	23.162	有	
679	17	23.340	有	
682	59	22.910		
684	27	23.278		
688	26	23.262	有	
713	39	22.691	有	
711	28	23.300	有	
712	44	23.152		
713	30	23.254	有	
714	小径盤	不可測	有	
715	70	22.868	有	
716	36	23.034		
729	30	23.314		
731	20	23.371		

SB11

柱穴番号	径さ(m)	最深部高(m)	柱礎跡等	出土遺物
302	72	22.677	柱礎有	
403	60	22.684	柱礎有	
410	17	23.150	有	
421	63	22.438		
425	57	22.944	有	
440	49	22.960	有	
441	25	23.164	有	
443	62	22.746	有	
506	52	22.963		
560	46	23.002	有	
579	28	23.232	有	海苔硯
604	54	22.970	有	
611	66	22.880	有	
655	63	22.790	有	
663	43	22.880		

0 4 m

第31図 堀立柱建物跡(B)

〈出土遺物〉 陶器が出土した。

陶器 P628より陶器の微細片が1点(26)出土した。細片のため図面掲載していない。

〈時期〉 中世に属するものと思われる。

・SB13 (第32図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 VIA 1 f～VIA 2 g グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB14、SB15、SB16、SB19、柱列2号と本遺構のプランが重複する。

〈規模〉 桁行3間(総長591cm-北)、梁行3間(総長635cm-東)の建物である。面積は建物全体で約37.5㎡(11.4坪)である。

〈軸線方向〉 N-20°-Wである。

〈平面形式〉 桁行3間、梁行1間の身舎の南側と北側に張り出しが付くものと思われる。

〈柱間寸法〉 桁行は197cm(6.5尺)を使用している。梁行は339cm(11.2尺)である。桁の幅は148cm(4.9尺)である。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 中世末～近世に属するものと思われる。

・SB14 (第33図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 VIA 1 f～VIA 2 h グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB3、SB13、SB15、SB16、SB17、SB18、SB19、柱列2号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB15、SB17より新しい。

〈規模〉 桁行4間(総長940cm-南)、梁行1間(総長426cm-東)の建物である。面積は約40.0㎡(12.1坪)である。

〈軸線方向〉 N-28°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は194cm(6.4尺)と276cm(9.1尺)を使用している。梁行は426cm(14.0尺)である。

〈建物の性格〉 大きさから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 確証はないが、切り合い関係から近世に属するとしたい。

・SB15 (33図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 VIA 1 f～VIA 2 h グリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB3、SB6、SB13、SB14、SB16、SB17、SB18、SB19、柱列2号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB14より古い。

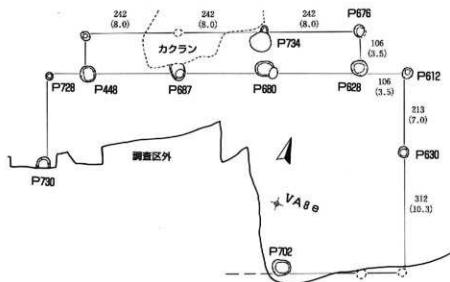
〈規模〉 桁行4間(総長896cm-南)、梁行1間(総長394cm-西)の建物である。面積は約35.3㎡(10.7坪)である。

〈軸線方向〉 N-33°-Wである。

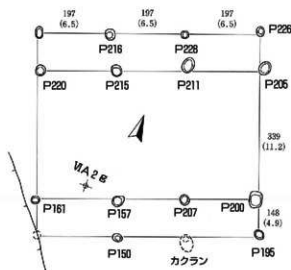
〈柱間寸法〉 桁行は224cm(7.4尺)を使用している。梁行は394cm(13.0尺)である。

〈建物の性格〉 不明である。

SB12



SB13



SB12

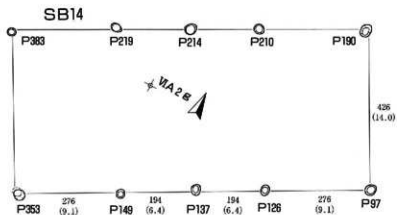
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱状番号	土壌性状
448	55	22,950	有	
449	27	23,174	有	
612	9	23,420		
628	66	22,808		腐部
630	52	22,990	有	
676	26	23,110		
680	43	23,071	有	
687	42	22,900	有	
702	53	22,770	有	
728	27	23,108	有	
730	42	23,200		
734	29	23,200		

SB13

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱状番号	土壌性状
150	12	23,180		
157	45	22,842	有	
161	30	23,045	有	
195	12	23,085	有	
200	35	22,875	有	
206	34	22,828	有	
207	45	22,829	有	
211	31	22,868		
215	46	22,765	有	
216	19	23,013		
220	16	23,050	有	
226	16	22,961	有	
228	15	22,985	有	



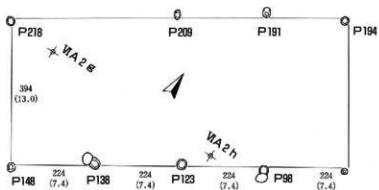
第32図 掘立柱建物跡(9)



SB14

柱次番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱基礎等	出土遺物
97	46	22.725	有	
136	50	22.749		
137	31	22.976		
149	52	22.819		
190	不計測	不計測		
210	34	22.895		
214	49	22.778	有	
219	52	22.774	有	
383	45	22.934		
383	40	22.920	有	

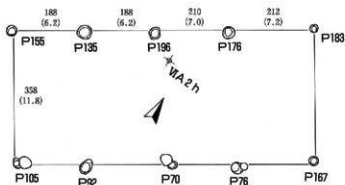
SB15



SB15

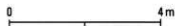
柱次番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱基礎等	出土遺物
98	33	22.870	有	
123	35	22.889	有	
138	26	23.008	有	
148	31	23.034		
191	23	22.956		
194	29	22.843		
209	22	23.024	有	
218	25	23.073		

SB16



SB16

柱次番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱基礎等	出土遺物
70	10	23.084	有	
76	28	22.891	有	
92	40	22.833	有	
106	27	23.035	有	
135	31	22.974	有	
155	43	22.917	有	
167	19	22.909	有	
176	51	22.681	有	
183	20	22.898	有	
196	31	22.902	有	



第33図 掘立柱建物跡(0)

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 12世紀ないし中世の可能性のあるものと思われる。

・SB16 (第33図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉 VA1g～VA2hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB2、SB3、SB4、SB6、SB7、SB13、SB14、SB15、SB17、SB18、SB19、SB29と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB6より古い。

〈規模〉 桁行4間(総長790cm-北)、梁行1間(総長358cm-西)の建物である。面積は約28.3㎡(8.6坪)である。

〈軸線方向〉 N-32°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は188cm(6.2尺)、210cm(7.0尺)等を使用する。梁行は358cm(11.8尺)である。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 12世紀ないし中世に属する可能性をもつ。

・SB17 (第34図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 VA1g～VA2hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB2、SB3、SB4、SB6、SB7、SB14、SB15、SB16、SB18、SB19、SB29と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB14より古い。

〈規模〉 桁行3間(総長591cm-北)、梁行2間(総長461cm-東)の建物である。面積は約25.6㎡(7.7坪)である。

〈平面形式〉 桁行3間、梁行1間の建物であり、南に張り出しが付くものと思われる。

〈軸線方向〉 N-28°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は197cm(6.5尺)を使用している。梁行は376cm(12.4尺)である。

〈建物の性格〉 大きさから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 近世に属するものと思われる。

・SB18 (第34図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 VA0g～VA1hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB2、SB3、SB4、SB5、SB6、SB7、SB14、SB15、SB16、SB17、SB19、SB29と本遺構のプランが重複する。

〈規模〉 桁行3間(総長603cm-北)、梁行2間(総長376cm-東)の建物である。面積は建物全体で約22.7㎡(6.9坪)である。

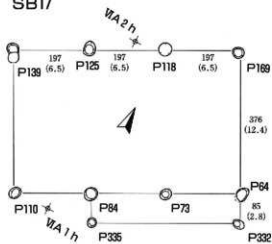
〈軸線方向〉 N-36°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は209cm(6.9尺)と185cm(6.1尺)を使用している。梁行は188cm(6.2尺)である。

〈建物の性格〉 大きさから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

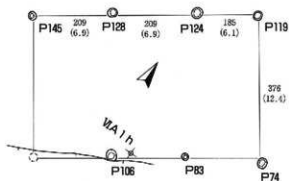
SB17



SB17

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱痕跡等	出土遺物
84	46	22.671	有	
73	39	22.779	有	
84	42	22.808	有	
110	不計測	不計測	有	
118	55	55.632	有	
125	60	22.656	有	
139	51	22.790	有	
169	50	22.688	有	
332	29	22.770	有	
335	不計測	不計測	有	

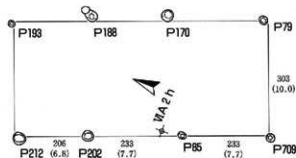
SB18



SB18

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱痕跡等	出土遺物
74	10	23.069		
83	22	23.969	有	
106	36	23.969	有	
119	38	23.008	有	
124	27	22.980	有	
128	14	23.157	有	
145	28	23.056	有	

SB19



SB19

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱痕跡等	出土遺物
79	22	22.927		
85	18	23.044		
170	43	22.724		縄文土器
188	44	22.730	有	
193	15	22.997		
202	32	22.915	有	
212	43	22.765	有	
709	31	22.906		

0 4 m

第34図 堀立柱建物跡(1)

〈時期〉 近世に属するものと思われる。

・SB19 (第34図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 VA1g～VA2hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB2、SB6、SB13、SB14、SB15、SB16、SB17、SB18、SB19、柱列2号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB2、SB6より古く、柱列2号より新しい。

〈規模〉 桁行3間(総長672cm-東)、梁行1間(総長303cm-南)の建物である。面積は約20.0㎡(6.2坪)である。

〈軸線方向〉 N-21°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は233cm(7.4尺)と206(6.8尺)を使用する。梁行は303cm(10.0尺)である。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 縄文土器が出土した。

縄文土器 P170より縄文土器片(15)が出土した。

〈時期〉 縄文土器片は流れ込みによるものと思われ、本建物跡は中世に属するものと思われる。

・SB20 (第35図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 VA7h～VA8iグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB21、SE1と本遺構のプランが重複し、本遺構はSE1より古い。

〈規模〉 桁行3間(総長585cm-南)、梁行1間(総長388cm-西)の建物である。面積は約22.7㎡(6.9坪)である。

〈軸線方向〉 N-28°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は188cm(6.2尺)と209cm(6.9尺)を使用している。梁行388cm(12.8尺)である。

〈建物の性格〉 大ききから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 石製品が出土した。

石製品 P6より水晶(10)が出土した。加工等の痕跡はない。

〈時期〉 近世に属するものと思われる。

・SB21 (第35図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 VA8i～VA9jグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB20、SE1、SK1、SK2と本遺構のプランが重複し、本遺構はSE1、SK、SK2より古い。

〈規模〉 桁行2間以上(検出長334cm)、梁行1間(総長315cm)の建物である。東側は地山面の削平により柱穴が消失しているため全体形は不明である。面積は検出分で約10.5㎡(3.2坪)である。

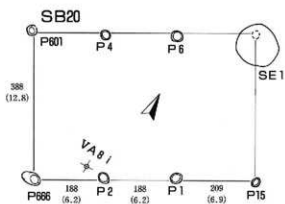
〈軸線方向〉 N-16°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は167cm(5.5尺)を使用している。梁行は315cm(10.4尺)である。

〈建物の性格〉 大ききから付属小屋と思われる。

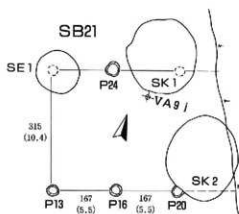
〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 近世に属するものと思われる。



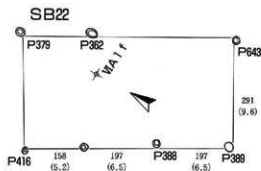
SB20

柱穴番号	径さ(m)	底面標高(m)	柱形跡等	出土遺物
1	不明	不明	有	
2	36	22,970	有	
4	50	22,926	有	
6	43	22,945	有	フレイク
15	19	23,015	有	
601	26	23,252		
666	49	22,930	有	



SB21

柱穴番号	径さ(m)	底面標高(m)	柱形跡等	出土遺物
13	22	22,912	有	
16	31	22,932	有	
20	30	22,895	有	
24	32	22,925	有	



SB22

柱穴番号	径さ(m)	底面標高(m)	柱形跡等	出土遺物
362	36	23,700		
379	51	22,852		
388	19	23,220	有	
389	24	23,220	有	
416	35	23,602		
643	40	22,945	有	

0 4 m

第35図 掘立柱建物跡(2)

・SB22 (第35図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 VA0e-V A1fグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB2、SB3、SB7と本遺構のプランが重複する。

〈規模〉 桁行3間(総長334cm-東)、梁行1間(総長291cm-南)の建物である。面積は16.1㎡(4.9坪)である。

〈軸線方向〉 N-29°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は197cm(6.5尺)と158cm(5.2尺)を使用する。梁行は291cm(9.6尺)である。

〈建物の性格〉 大ききから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 近世に属するものと思われる。

・SB23 (第36図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 VA8f-V A9gグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB2、SB8、SB9、SB30、SB31と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB30より古い。

〈規模〉 桁行3間(総長645cm-北)、梁行1間(総長371cm-西)の建物である。面積は23.9㎡(7.3坪)である。

〈軸線方向〉 N-13°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は215cm(7.1尺)を使用している。梁行は371cm(12.2尺)である。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 12世紀ないし中世に属するものと思われる。

・SB24 (第36図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 VA9i-V A1jグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB25、SB26、SB27、SB28、柱列5号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB26より古い。

〈規模〉 桁行3間(総長618cm-南)、梁行2間(総長376cm-西)の建物である。面積は約23.2㎡(7.0坪)である。

〈軸線方向〉 N-39°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は206cm(6.8尺)を使用している。梁行は北東棟で188cm(6.2尺)を基調とする。

〈建物の性格〉 大ききから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

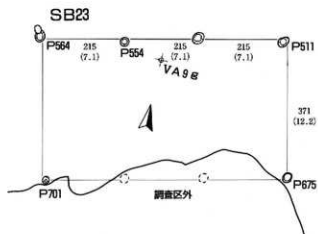
〈時期〉 近世に属するものと思われる。

・SB25 (第36図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 VA0i-V A1jグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

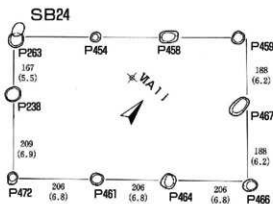
〈重複〉 SB1、SB2、SB24、SB26、SB27、SB28、柱列5号と本遺構のプランが重複する。

〈規模〉 桁行3間(総長609cm-北)、梁行2間(総長406cm-西)の建物である。面積は約24.7㎡(7.5



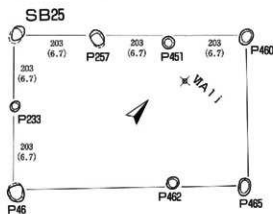
SB23

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱礎跡等	出土遺物
511	38	22,901	有	
554	19	23,210		
564	47	23,031		
675	47	22,964	有	
701	15	23,216		



SB24

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱礎跡等	出土遺物
238	41	22,685	有	
253	26	22,690	有	
454	4	22,597	有	
458	15	22,571		
459	13	22,568	有	
461	4	22,577	有	
464	17	22,517	有	
466	6	22,530	石炭入	
467	60	22,089		
472	不詳	不詳		



SB25

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱礎跡等	出土遺物
46	60	22,504	有	分付611
233	16	22,986		
257	17	23,000	有	
451	17	22,488		
460	22	22,486	有	
462	15	22,509	有	
465	17	22,522	有	

0 4m

第36図 堀立柱建物跡(13)

坪)である。

〈軸線方向〉 N-40°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行、梁行とも203cm(6.7尺)を使用している。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 かわらけが出土した。

かわらけ P46よりかわらけの微細片が2片出土した。細片のため図面掲載していない。

〈時期〉 12世紀ないし中世に属する可能性をもつと思われる。

・SB26 (第37図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 VA9i-V A1jグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB25、SB27、SB28、柱列5号と本遺構のプランが重複し、SB24より新しい。

〈規模〉 桁行2間以上(検出長424cm-北)、梁行2間(総長510cm-西)の建物である。東側が地山面の削平により柱穴が消失しているため、全体形は不明である。面積は検出分で約21.6㎡(6.6坪)である。

〈軸線方向〉 N-38°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は212cm(7.0尺)、梁行は255cm(8.4尺)を使用している。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 石製品が出土した。

石製品 P58より砥石(13)が出土した。丸みを帯びた薄手のもので、表裏の二面の他縁回りに使用痕がみられる。

〈備考〉 P245の柱材の樹種はクリである。

〈時期〉 中世に属するものと思われる。

・SB27 (第37図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 VA0i-V A1jグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB24、SB25、SB26、SB28、柱列5号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB28より古く、SB1より新しい。

〈規模〉 桁行3間以上(検出長530cm-北)、梁行1間(総長348cm-西)の建物である。北側が地山面の削平により柱穴が検出されていないため、全体形は不明である。面積は検出分で約18.4㎡(5.6坪)である。

〈軸線方向〉 N-39°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は212cm(7.0尺)と106cm(3.5尺)を使用している。梁行は348cm(11.5尺)である。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 なし。

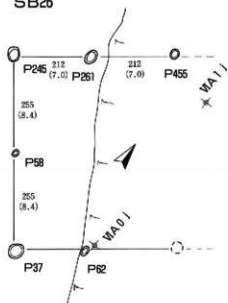
〈時期〉 中世に属すると思われる。

・SB28 (第37図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 VA9h-V A0iグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB24、SB25、SB27、柱列5号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB

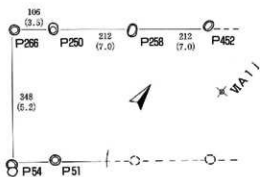
SB26



SB26

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱穴形状	出土遺物
37	45	22.742	有	
58	29	22.894		磁石
62	29	22.772		
245	62	22.503	特殊者	
261	47	22.899	有	
455	14	22.529	有	

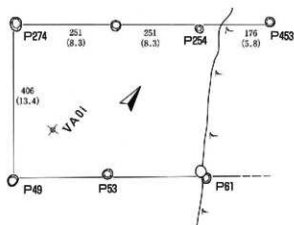
SB27



SB27

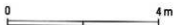
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱穴形状	出土遺物
51	44	22.697	有	
54	36	22.876	有	
250	30	22.745	有	
258	29	22.853	有	
266	31	22.823	有	
452	14	22.529	有	

SB28



SB28

柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱穴形状	出土遺物
48	17	22.938	有	
53	13	23.070	有	
61	4	22.860	有	
254	9	22.960		
274	25	22.860	有	
453	15	22.499	有	



第37図 堀立柱建物跡(4)

27より新しい。

〈規模〉 桁行3間以上(検出長678cm-北)、梁行1間(総長406cm-西)の建物である。東側が地山面の削平により柱穴が消失しているため、全体形は不明である。面積は検出分で約27.5㎡(8.3坪)である。

〈軸線方向〉 N-37°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は251cm(8.3尺)と176cm(5.8尺)を使用している。梁行は406cm(13.5尺)である。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 中世に属すると思われる。

・SB29(第38図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 VA1h~VA2hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB6、SB16、SB17、SB18、SB19と本遺構のプランが重複する。

〈規模〉 桁行3間以上(検出長555cm-南)、梁行1間(総長400cm-西)の建物である。東側が地山面の削平により柱穴が消失しているため、全体形は不明である。面積は検出分で約22.2㎡(6.7坪)である。

〈軸線方向〉 N-28°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は185cm(6.1尺)を使用している。梁行は400cm(13.2尺)である。

〈建物の性格〉 大きさから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 近世に属するものと思われる。

・SB30(第38図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 VA8f~VA9fグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB9、SB31と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB8、SB23より新しい。

〈規模〉 桁行2間以上(検出長400cm-東)、梁行1間(総長436cm-北)の建物である。南側が地山面の削平により柱穴が消失しているため、全体形は不明である。面積は検出分で約17.4㎡(5.3坪)である。

〈軸線方向〉 N-34°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は200cm(6.6尺)、梁行は218cm(7.2尺)を使用している。

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 中世もしくは近世に属するものと思われる。

・SB31(第38図、写真図版16)

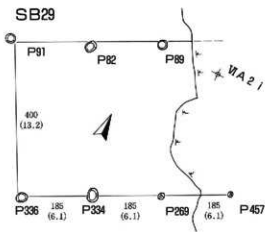
〈位置・検出状況〉 VA8f~VA9fグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB8、SB9、SB11、SB23、SB30と本遺構のプランが重複する。

〈規模〉 桁行2間(総長460cm-南)、梁行1間(総長351cm-西)の建物である。面積は約16.1㎡(4.9坪)である。

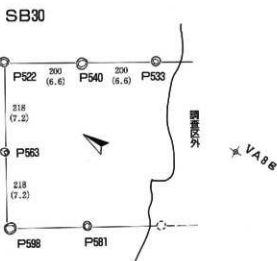
〈軸線方向〉 N-28°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は230cm(7.6尺)を使用している。梁行は351cm(11.6尺)である。



SB29

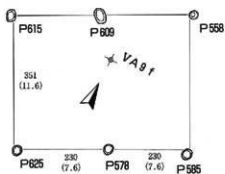
柱穴番号	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱痕跡等	出土遺物
82	33	22.868	有	
89	22	22.918	有	
91	17	23.065	有	
269	15	22.850		
334	28	22.966	有	
336	26	22.770	有	
457	14	22.539		



SB30

柱穴番号	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱痕跡等	出土遺物
533	33	22.856		
540	48	22.894		
552	不計測	不計測		
563	27	23.244		
581	28	23.096		
598	不計測	不計測		

SB31



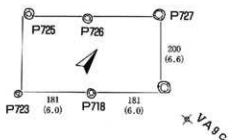
SB31

柱穴番号	深さ (cm)	底面標高 (m)	柱痕跡等	出土遺物
558	30	23.211		
578	不計測	不計測	有	
585	22	23.080	有	
609	46	23.060		
615	21	23.316	有	
625	24	23.196	有	



第38図 堀立柱建物跡(15)

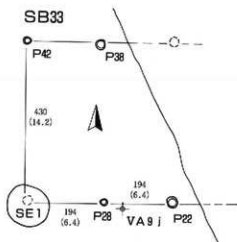
SB32



SB32

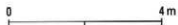
柱穴番号	間口 (m)	底面埋高 (m)	柱頭筋等	土上造物
718	45	22.976		
723	30	22.882		
725	20	23.092		
726	19	23.250		
727	51	22.892	有	

SB33



SB33

柱穴番号	間口 (m)	底面埋高 (m)	柱頭筋等	土上造物
22	19	23.005	有	
38	24	22.998	有	宇瓦
39	17	22.957	有	
42	不計測	不計測	有	



第39圖 掘立柱建物(16)

〈建物の性格〉 不明である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 12世紀ないし中世に属する可能性もつと思われる。

・SB32 (第39図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 VA7c～VA8cグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 S11 堅穴住居と本遺構のプランが重複し、本遺構が新しい。

〈規模〉 桁行2間(総長362cm-南)、梁行1間(総長200cm-東)の建物である。面積は約7.2㎡(2.2坪)である。

〈軸線方向〉 N-38°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は181cm(6.0尺)を使用している。梁行は200cm(6.6尺)である。

〈建物の性格〉 大ききから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 近世に属するものと思われる。

・SB33 (第39図)

〈位置・検出状況〉 VA9i～VA9jグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB20、SB21、SB26、SE1と本遺構のプランが重複し、本遺構がSE1より古い。

〈規模〉 桁行2間以上(検出長388cm-南)、梁行1間(総長430cm-西)の建物である。面積は約16.7㎡(5.1坪)である。

〈軸線方向〉 N-2°-Wである。

〈柱間寸法〉 桁行は194cm(6.4尺)を使用している。梁行は430cm(14.2尺)である。

〈建物の性格〉 大ききから付属小屋と思われる。

〈出土遺物〉 瓦が出土した。

瓦 P28より平瓦(11)が出土した。

〈時期〉 近世に属するものと思われる。

(2) 柱穴列

・柱列1号(第40図、写真図版17)

〈位置・検出状況〉 VA9f～VA0hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB3、SB4、SB5、SB6、SB7、SB11、柱列6号と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB3より新しい。

〈規模〉 柱穴6基、5間(総長1291cm)の検出である。

〈軸線方向〉 N-71°-Eである。

〈平均柱間寸法〉 概ね212cm(7.0尺)を基調とする。P569-P543間が267cm(8.8尺)、P543-P524間が388cm(12.8尺)である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 切り合い関係から中世に属する可能性をもつが、詳細は不明である。

・柱列2号(第40図、写真図版17)

- 〈位置・検出状況〉 VA1g~VA2hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。
〈重複〉 SB13、SB14、SB15、SB19と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB19より新しい。
〈規模〉 柱穴5基、4間(総長800cm)の検出である。
〈軸線方向〉 N-57°-Eである。
〈平均柱間寸法〉 内側2間がともに179cm(5.9尺)、その外側2間が221cm(7.3尺)である。
〈出土遺物〉 なし。
〈時期〉 切り合い関係から中世以降と思われるが、詳細は不明である。

・柱列3号(第40図、写真図版17)

- 〈位置・検出状況〉 VA0eグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。
〈重複〉 SB3、SB7、SB11と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB11より古い。
〈規模〉 柱穴4基、3間(総長555cm)の検出である。
〈軸線方向〉 N-32°-Wである。
〈平均柱間寸法〉 185cm(6.1尺)である。
〈出土遺物〉 なし。
〈時期〉 切り合い関係から近世に属するものと思われる。

・柱列4号(第40図、写真図版17)

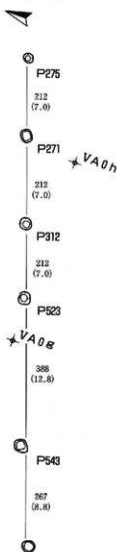
- 〈位置・検出状況〉 VA9d~VA9eグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。
〈規模〉 柱穴5基、4間(総長555cm)の検出である。
〈軸線方向〉 N-57°-Eである。
〈平均柱間寸法〉 121cm(4.0尺)である。
〈出土遺物〉 土師器が出土した。
土師器 P431より土師器臺の細片(23)が出土した。細片のため図面掲載していない。
〈時期〉 不明である。

・柱列5号(第41図、写真図版17)

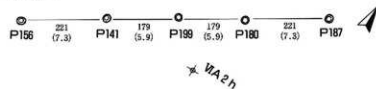
- 〈位置・検出状況〉 VA0h~VA0iグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。
〈重複〉 SB1、SB2、SB24、SB25、SB26、SB27、SB28と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB2より古い。
〈規模〉 柱穴4基、3間(総長654cm)の検出である。
〈軸線方向〉 N-66°-Eである。
〈平均柱間寸法〉 218cm(7.2尺)である。
〈出土遺物〉 なし。
〈時期〉 切り合い関係から中世に属するものと思われる。

・柱列6号(第41図、写真図版17)

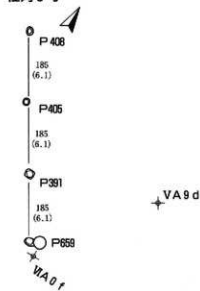
柱列 1号



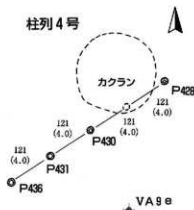
柱列 2号



柱列 3号



柱列 4号



柱列 1号

柱次番号	径さ (mm)	底面標高 (m)	柱底跡等	出土遺物
271	20	22.900	有	かわらけ
275	18	22.952		
312	29	23.028		
523	60	22.758		
543	60	22.792		

柱列 2号

柱次番号	径さ (mm)	底面標高 (m)	柱底跡等	出土遺物
141	19	23.079		
156	27	23.054	有	
180	12	23.094	有	
187	15	23.013	有	
199	28	22.978		

柱列 3号

柱次番号	径さ (mm)	底面標高 (m)	柱底跡等	出土遺物
391	40	23.008	有	
405	29	23.014		
408	32	22.986		
659	33	23.053	有	

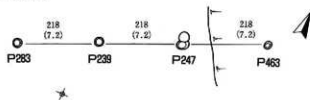
柱列 4号

柱次番号	径さ (mm)	底面標高 (m)	柱底跡等	出土遺物
423	39	23.144		
430	46	23.000		
431	26	23.228	有	かわらけ
436	39	23.086	有	

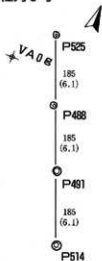


第40図 柱列(1)

柱列 5 号



柱列 6 号



柱列 7 号



柱列 8 号



柱列 5 号

柱次番号	間隔 (m)	底面標高 (m)	柱状跡等	出土遺物
280	35	22.748	有	
247	45	22.710	有	
283	13	22.985	有	
463	11	22.528		

柱列 6 号

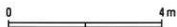
柱次番号	間隔 (m)	底面標高 (m)	柱状跡等	出土遺物
488	44	22.940		
491	50	22.916		
514	7	23.124		
525	17	23.150		

柱列 7 号

柱次番号	間隔 (m)	底面標高 (m)	柱状跡等	出土遺物
412	3	23.030	有	
474	19	22.880	有	
530	21	22.830	有	

柱列 8 号

柱次番号	間隔 (m)	底面標高 (m)	柱状跡等	出土遺物
399	不計測	不計測	有	
422	43	22.980	有	
803	48	23.027	有	



第41圖 柱列(2)

〈位置・検出状況〉 VA9g~VA0gグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB1、SB2、SB3、SB4、SB5、SB7、SB8、SB9、SB23と本遺構のプランが重複し、本遺構はSB9より新しい。

〈規模〉 柱穴4基、3間（総長555cm）の検出である。

〈軸線方向〉 N-21°-Wである。

〈平均柱間寸法〉 185cm（6.1尺）である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 切り合い関係から中世以降と思われる。

・柱列7号（第41図、写真図版17）

〈位置・検出状況〉 VA1g~VA1hグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB9と本遺構のプランが重複する。

〈規模〉 柱穴3基、2間（総長436cm）の検出である。

〈軸線方向〉 N-59°-Eである。

〈平均柱間寸法〉 218cm（7.2尺）である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

・柱列8号（第41図）

〈位置・検出状況〉 VA9e~VA0eグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB11と本遺構のプランが重複する。

〈規模〉 柱穴3基、2間（総長528cm）の検出である。

〈軸線方向〉 N-18°-Wである。

〈平均柱間寸法〉 264cm（8.7尺）である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

（4）陥し穴状遺構

・TP1（第42図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉 調査区西側VA8bグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 S11と重複関係にあり、本遺構が古い。

〈平面形〉 細長い溝型の形状である。

〈断面形〉 U字状を呈する。

〈規模〉 開口部264cm×40cm、底部240cm×10cm、深さは57cmである。長軸の軸線方向はN-21°-Wである。

〈埋土〉 5層に分けられる。黒~褐灰等を主体とし、灰黄~浅黄の地山土を5~30%混入する。

〈底面〉 底面は南側が若干上がり気味でやや起伏がある他は、ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 遺物の出土がなく詳細は不明であるが、縄文時代と思われる。

(5) 井戸跡

・SE1 (第43図、写真図版18)

〈位置・検出状況〉 調査区南側VA8i～VA9iグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB20、SB21、SB33と本遺構が重複しており、本遺構が古い。

〈平面形〉 円形を呈する。

〈規模〉 開口部径118cmである。底面まで掘り下げを行っていないため、底部径・深さとも不明である。

地表面から212cmの地点までの掘り下げで精査を終了した。

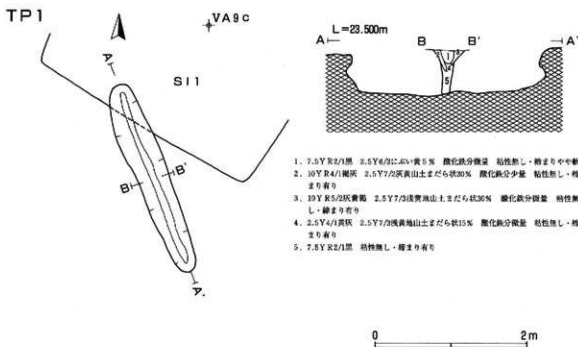
〈壁・底面・断面形〉 壁はほぼ直立気味に立ち上がり、地表面からの深さ約30cmから上位でやや外傾する。

断面形は円筒形になるものと推測される。

〈埋土〉 5層まで確認している。主として黒褐色土や明黄褐～浅黄色土ブロックによる人為堆積の様相を呈する。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 重複する遺構はあるが、詳細な時期は不明である。



1. 2.5Y R2/1黒 2.5Y6/3L赤黄5% 酸化鉄分微量 粘性無し・粘まりやや軟
2. 10Y R4/1褐灰 2.5Y7/2灰黄土まだら状30% 酸化鉄分少量 粘性無し・粘まり有り
3. 10Y R5/2灰黄褐 2.5Y7/3灰黄土まだら状30% 酸化鉄分微量 粘性無し・粘まり有り
4. 2.5Y4/1黄灰 2.5Y7/3灰黄土まだら状15% 酸化鉄分微量 粘性無し・粘まり有り
5. 2.5Y R2/1黒 粘性無し・粘まり有り

第42図 陥し穴状遺構

(6) 土坑

・SK1 (第43図、写真図版18)

〈位置・検出状況〉 調査区南側VA9i～VA9jグリッドに位置する。表土耕作土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB21と重複し、本遺構が新しい。

〈平面形〉 ほぼ円形を呈する。

〈規模〉 開口部径206×191cmである。深さは最大で125cmを測る。

〈壁・底面・断面形〉 壁は底面からやや内湾ないし直立ぎみに立ち上がる。底面は南側から北側に向かって傾斜する。

〈埋土〉 灰白粘土～黒褐色土主体の4層からなる。小石・礫等が多量に混じる。人為堆積の様相を呈する。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 重複する遺構との新旧関係から、近世以降と思われる。

・SK2 (第44図、写真図版19)

〈位置・検出状況〉 調査区南側VA8jグリッドに位置し、SK1に近接する。表土耕作土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 SB21と重複し、本遺構が新しい。

〈平面形〉 ほぼ円形を呈する。

〈規模〉 開口部長径214cm、短径190cm、深さは底面まで掘り下げを行っていないため、不明である。地表面から深さ170cmの地点で精査を終了した。

〈壁・断面形・底面〉 壁は概ねやや外傾して立ち上がる。断面形は円筒状を呈するものと推測される。

〈埋土〉 9層まで確認している。埋め戻しによる人為堆積の様相を呈する。

〈出土遺物〉 かわらけ、石製品が出土した。

かわらけ かわらけの細片が1点出土した。

石製品 砥石が1点(9)出土した。表側と側面左右の3面の使用痕が認められ、表側はさらに十字の使用痕がやや深目に刻まれている。

〈時期〉 重複する遺構との新旧関係から、近世以降と思われる。

・SK3 (第44図、写真図版19)

〈位置・検出状況〉 調査区西側VA8bグリッドに位置する。表土・旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 円形を呈する。

〈規模〉 開口部長径71cm、短径63cm、深さは11cmである。

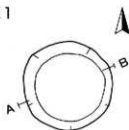
〈壁・底面・断面形〉 壁は至極緩やかに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。断面形は浅皿状を呈する。

〈埋土〉 黒褐色土及び黄色地山土による2層からなる。

〈出土遺物〉 かわらけ?が出土した。

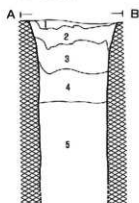
かわらけ かわらけと思われる細片が1点出土した。細片のため図面掲載していない。

SE1



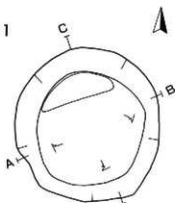
VA9 jの西1m

L=23.400m

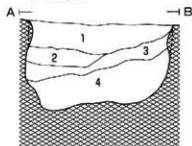


1. 10Y R3/1黒褐色 粘性なし・粘まり有り 自然堆積の埴輪
2. 7.5Y 8/2R白 粘土 10Y R3/2黒褐色まじり状30% 粘性有り・粘まりやや軟 人為堆積の埴輪
3. 10Y R6/9明黄褐色 砂質粘土 10Y R3/2黒褐色2-3% 粘性有り・粘まりやや軟 人為的堆積の埴輪
4. 2.5Y 3/1黒褐色 10Y R6/9明黄褐色ブロック状30% 粘性有り・粘まりやや軟 人為的堆積の埴輪
5. 5Y 7/2浅黄 粘土 粘性大・粘まりやや軟

SK1

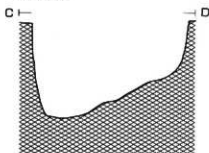


L=23.300m



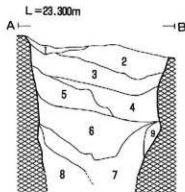
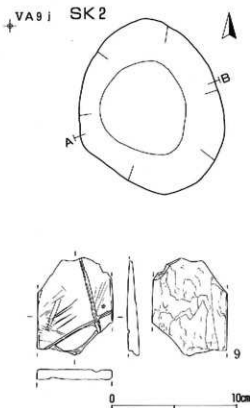
1. 5 Y 7/2R白粘土 10Y R3/2黒褐色ブロック状10% 炭化成分多量 粘性有り・粘まりやや軟 人為堆積の埴輪
2. 10Y R3/2黒褐色 5 Y 7/2灰白粘土40% 炭化成分多量 小石・細砂心 粘性有り・粘まりやや軟 人為堆積の埴輪
3. 5 Y R3/3暗赤褐色 砂質 小石・堆多量 粘性なし・粘まり有り 人為堆積の埴輪
4. 10Y R4/2灰褐色 砂質 小石・堆多量 粘性なし・粘まり有り 人為堆積の埴輪

L=23.300m



0 2m

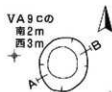
第43図 井戸・土坑(1)



1. 10R3/2暗赤褐色 砂質 小石を含む 粘性無し・締まり無し 人為堆積の母相
2. 5Y8/2淡黄 砂土 酸化鉄分少量 粘性大・締まり軟 人為堆積の母相
3. 10YR6/6明黄褐色 砂質粘土 10YR3/1黒褐色ブロック10% 酸化鉄分少量 粘性大・締まりやや軟
4. 10YR3/1黒褐色 5Y8/2淡黄粘土ブロック30% 全体やや砂質 酸化鉄分少量 粘性大・締まりやや有り
5. 5Y8/4淡黄 10YR3/1黒褐色2-3% 全体やや砂質 酸化鉄分少量 粘性大・締まりやや有り
6. 2.5Y7/6明黄褐色 2.5Y3/1黒褐色5% 酸化鉄分少量 粘性大・締まり有り 人為堆積の母相
7. 2.5Y3/1黒褐色 5Y7/6黄ブロック20% 粘性大・締まり有り 人為堆積の母相
8. 2.5Y6/3オリーブ黄 2.5Y3/1黒褐色20% 粘性大・締まり有り 人為堆積の母相
9. 10Y7/2灰口 自然木炭干混入 粘性大・締まり有り

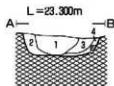
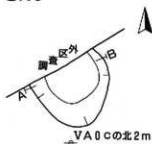
番号	出土地点	材料	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石膏	産地	備考
9	SK2	砥石	17.6	6.0	0.6	49.7	粘灰岩		

SK3



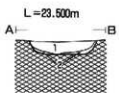
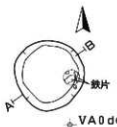
1. 7.5YR3/1黒褐色 粘性無し・締まりやや軟
2. 5Y7/6黄地山土 7.5YR3/1黒褐色 粘性やや有り・締まり有り

SK5



1. 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性無し・締まりやや軟 自然堆積
2. 2.5Y7/6淡黄地山土 10YR3/2黒褐色10% 粘性無し・締まり有り 自然堆積
3. 10YR3/2黒褐色 シルト 2.5Y7/4淡黄地山土20% 粘性無し・締まり有り 自然堆積
4. 2.5Y7/6淡黄地山土 10YR3/2黒褐色 粘性無し・締まり有り 自然堆積
5. 10YR3/2黒褐色 2.5Y6/4いぼいぼ黄地山土 粘性無し・締まり有り 自然堆積

SK4



1. 10YR3/1黒褐色 2.5Y8/4淡黄地山土ブロック10% 酸化鉄多い破片(鉄鏝?)含む 粘性なし・締まりやや軟
2. 10YR6/6明黄地山土 10YR3/1黒褐色10% 粘性なし・締まり有り

第44図 土坑(2)

〈時期〉 かわらけが出土しているが、詳細は不明である。

・SK4 (第44図、写真図版19)

〈位置・検出状況〉 調査区西側VA0dグリッドに位置する。表土・旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 円形を呈する。

〈規模〉 開口部長径92cm、短径90cm、深さ18cmである。

〈壁・底面・断面形〉 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐及び浅黄～黄橙地山ブロックの2層からなる。

〈出土遺物〉 鉄片が出土した。

鉄片 銹化の著しい鉄片が少量出土した。銹化が進行した細片のため図面掲載していない。

〈時期〉 不明である。

・SK5 (第44図、写真図版19)

〈位置・検出状況〉 調査区西側VA0b～VA0cグリッドに位置する。表土・旧耕作土除去後のIV層中で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 調査区外にかかるため全体形は不明であるが、円形状か楕円形状を呈するものと思われる。

〈規模〉 開口部確認できる開口部径で103cm、深さ26cmである。

〈壁・底面・断面形〉 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土及び浅黄地山土の2層からなる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 不明である。

(7) カマド状遺構

・カマド状遺構 (第45図、写真図版18)

〈位置・検出状況〉 調査区西側VA8dグリッドに位置する。表土除去後のIV層上面で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形〉 調査区外にかかるため全体形は不明であるが、検出分の平面形は壁穴条を呈する。遺構は焚き口部と単室の燃焼室、煙道からなる。

〈規模〉 検出された開口部の検出長は138cm、それに直交する燃焼室の最大幅は64cm、深さは23cmである。煙道部の検出長は12cmである。

〈埋土〉 全部で8層に区分した。燃焼室の周囲は赤褐色の焼土からなり、その他は黄褐～黒褐色土の埋土からなる。

〈出土遺物〉 かわらけが出土した。

かわらけ かわらけの細片が微量出土した。細片のため図面掲載していない。

〈時期〉 中世の可能性もあるが詳細は不明である。

(8) 柱穴

調査区全体で731基が検出された。水田造成による地山面の削平を受けている調査区西側からの検出は少なく、大部分は調査区東側で検出された。そのうち19基から遺物が出土した。出土遺物についてはそれぞれ該当する掘立柱建物跡で記述している。

(9) 墓墳

・SX1 (第47・48図、写真図版20)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VA3jグリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

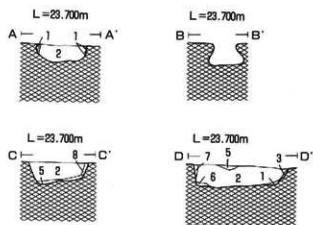
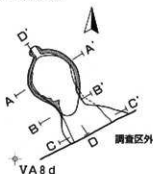
〈形態・規模〉 掘り方の平面形は長方形を呈し、規模は長辺128cm、短辺64cm、深さ15cmである。木棺は検出されていないが、他の長方形の墓墳すべてが木棺墓であることから、墓の形態は長方形木棺墓の可能性はある。

〈出土遺物〉 鉄片が出土した。

鉄片 銹化の著しい鉄片が微量出土した。銹化が進行した細片のため図面掲載していない。

〈時期〉 周囲の同種遺構との関係から江戸時代と思われる。

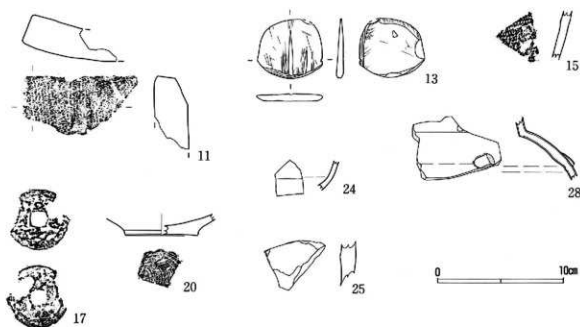
カマド状遺構



1. 10R4/赤埴 粘土 固く締まる
2. 10YR3/2黒埴 2.5Y6/4明黄緑ブロック状70% 炭化物粒微量 粘性やや有り・締まり有り
3. 2.5Y6/5明黄緑 10YR3/2黒緑色10% 粘性やや有り・締まり有り
4. 2.5Y5/6黄緑 やや砂質 粘性無し・締まり有り
5. 10YR3/2黒埴 10R4/4赤埴ブロック状20% 炭化物粒微量 粘性無し・固く締まる
6. 2.5Y7/6明黄緑色土 粘土 10YR3/1黒埴5% 粘性有り・締まり有り
7. 2.5Y4/1灰次 現代の地層か
8. 2.5Y5/4黄緑 10YR3/1黒埴20% 粘性有り・締まり有り

0 2m

第45図 カマド状遺構



番号	遺物名	遺物名	計測値	特徴	該当種別・序列	備考
10	P 6	フレイク	重39.09g	水磨加工痕なし	S B 20	
11	P 28	平底	長さ13.0cm 幅(13.0)cm 厚さ2.4cm	一枚作り?	S B 33	
12	P 45	かわらけ	口径— 底径— 器高—	破片2片	S B 25	
13	P 58	底付	高さ4.8cm 幅約3.7cm 厚さ0.6cm	全周作葉	S B 28	
14	P 80	土師器	厚さ—	口径部 器種不明	S B 7	
15	P 170	縄文土器	厚さ0.5cm	1. 貝組文 器種不明?	S B 19	
16	P 177	かわらけ	口径— 底径— 器高—	破片3片		
17	P 253	鍔首	直径2.5cm 量目1.32g	須達定實(初編年次298) 高首	S B 2	
18	P 271	かわらけ	口径— 底径— 器高—	破片1片	序列1号	
19	P 289	かわらけ	口径— 底径— 器高—	口径部	S B 4	
20	P 292	かわらけ	口径— 底径15.4cm 器高11.7cm	小器口タロ底型 中底	S B 6	
21	P 315	かわらけ	口径— 底径— 器高—	中底?	S B 4	
22	P 325	かわらけ	口径— 底径— 器高—	破片1片	S B 2	
23	P 431	かわらけ	口径— 底径— 器高—	破片2片	序列4号	
24	P 579	陶器	口径— 底径— 器高(2.3)cm	灰物 器種不明 製作年代近末か		
25	P 600	陶器(高脚)	厚さ0.9—2.1cm	赤・白 自然物		
26	P 628	陶器	厚さ—	破片1片 産地不明		
27	P 633	土師器?	厚さ—	破片1片		
28	P 644	中国産陶器	厚さ0.6—0.7cm	頸—前部 内面四耳痕	S B 2	

第46図 柱穴出土遺物

・SX2 (第47・48図、写真図版20)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は円形木棺墓である。掘り方の平面形は楕円形を呈し、掘り方の規模は長径・短径とも90cm、深さは60cmである。木棺が掘り方の南壁寄りで見出された。蓋は棺内部に埋もれていたが、側板及び底板は概ね良好に残存していた。木棺は直径62cm、高さ約40cmである。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管、木櫛、播鉢が出土した。

銭貨 鉄銭が46枚出土した。錆化と癒着が著しく銭名不明な鉄銭が46枚出土した。

煙管 吸口部2点(29、30)と雁首部1点(31)の計3点が出土した。そのうちの2点は、残存した羅字の一部が付随する。

木櫛 木櫛が1点(32)出土した。

播鉢 鉄軸の播鉢の口縁部が1点(33)出土した。

〈時期〉 出土した銭貨の銭名が不明であるため断定はできないが、鉄銭であることから江戸時代中期以降に属する可能性がある。

〈備考〉 木棺側板の樹種はスギである。

・SX3 (第47・48図、写真図版20)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈し、規模は長軸・短軸とも70cm、深さ10cmである。木棺は底板の一部が残存しているのみである。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管が出土した。

銭貨 銅銭が8枚出土した。錆化による癒着で銭文の判読が不可能なものがあるものの、すべて寛永通寶(新寛永)と思われる。

煙管 残存した羅字の一部が付随する雁首部1点(35)と吸口部1点(36)が出土した。

〈時期〉 出土銭貨がすべて銅銭で鉄銭が含まれないことから、江戸時代17世紀後半～18世紀の埋葬と思われる。

・SX4 (第47・48図、写真図版20)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

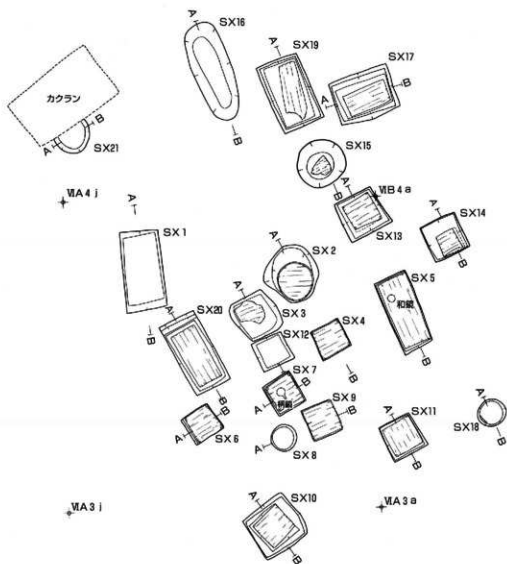
〈形態〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈する。木棺は底板と側板が残存していた。掘り方と木棺の規模はほぼ一致し、掘り方・木棺とも長軸50cm、短軸48cmを測り、深さは52cmである。

〈出土遺物〉 煙管が出土した。

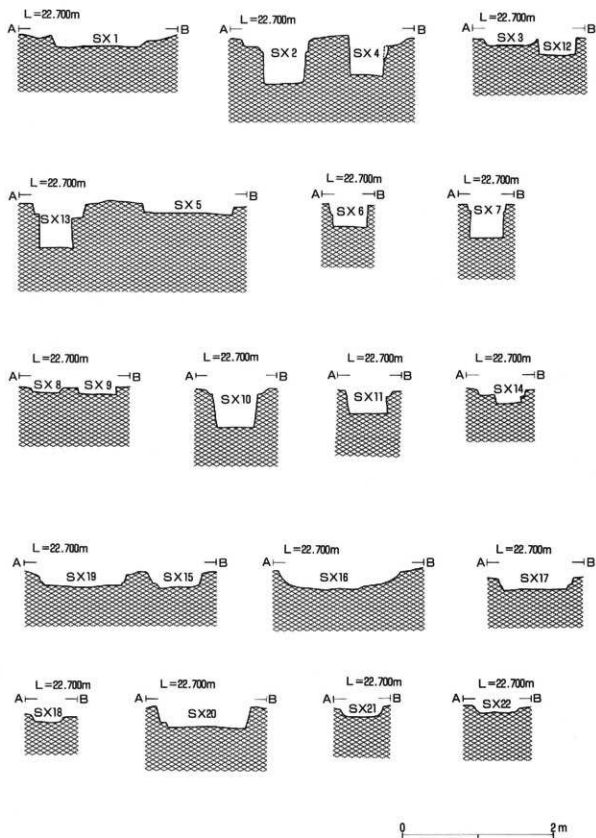
煙管 残存した羅字の一部が付随する吸口部が1点(37)出土した。

〈時期〉 出土銭貨がなく断定はできないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

〈備考〉 木棺側柱の樹種はスギである。



第47図 墓壇(1)



第48图 墓坑(2)

・SX5 (第47・48図、写真図版21)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態〉 墓の形態は長方形木棺墓である。掘り方の平面形は長方形を呈し、規模は長軸122cm、短軸54cm、深さ12cmである。木棺は底板のみ残存しており、蓋板の一部は埋土中に埋もれていた。底板の大きさは長軸112cm、短軸48cmである。

〈出土遺物〉 煙管、和鏡が出土した。

煙管 雁首部2点(39、40)と吸口部1点(38)の計3点出土した。そのうち38と39は、残存した羅字の一部が付随する。

和鏡 和鏡が1点(41)出土した。背面に二重圈界、亀形紐と菊花文を配する。面径11.3cm、縁高1.1cm、厚さ0.3～0.75cmである。

〈時期〉 出土銭貨がなく断定はできないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

・SX6 (第47・48図、写真図版21)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈する。木棺は側板、底板、隅柱が残存していた。掘り方と木棺の規模はほぼ一致し、長軸50cm、短軸48cmを測り、深さは52cmである。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管が出土した。

銭貨 銅銭が5枚出土し、すべて寛永通寶(古寛永4枚、文銭1枚)である。

煙管 雁首部が1点(42)出土した。

〈時期〉 出土した銭貨に鉄銭を含まないことと古寛永通寶と新寛永通寶文銭の組み合わせから、江戸時代17世紀後半～18世紀中頃の埋葬と思われる。

・SX7 (第47・48図、写真図版21)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈する。木棺は側板、底板、隅柱が残存していた。掘り方と木棺の規模はほぼ一致しており、長軸56cm、短軸50cmを測り、深さは45cmである。

〈出土遺物〉 煙管、柄鏡、陶器が出土した。

煙管 残存した羅字の一部が付随する吸口部が1点(43)出土した。

柄鏡 柄鏡が1点(44)出土した。背面は丸に正六角形の亀甲紋を配する。地紋は竹(ササ)か。木棺の底部はほぼ中央、椀殻が2cm程敷かれたその上に置かれていた。面径10.4cm、縁高0.4cm、柄長8.5cm、柄幅1.9～2.0cmである。

陶器 陶器の丸碗が1点(45)出土した。

〈時期〉 出土銭貨がなく断定はできないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

〈備考〉 木棺隅柱の樹種はスギである。

・SX8 (第47・48図、写真図版21)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は円形を呈し、規模は直径42cm、深さ7cmである。木棺は検出されていないが、他の円形状の墓塚の多くが木棺墓であることから、墓の形態は円形木棺墓の可能性はある。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

・SX9 (第47・48図、写真図版21)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈する。木棺は底板のみ残存していた。掘り方と棺の規模は一致しており、長軸52cm、短軸50cm、深さ9cmである。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

・SX10 (第47・48図、写真図版21)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈し、規模は長軸84cm、短軸82cm、深さ53cmである。木棺は掘り方のほぼ中央で検出され、底板のみが残存していた。底板の大きさは長軸50cm、短軸48cmである。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

・SX11 (第47・48図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈し、規模は長軸60cm、短軸58cm、深さ31cmである。木棺は掘り方のほぼ中央で検出され、棺材は側板、底板、隅柱が残存していた。底板の大きさは長軸50cm、短軸49cmである。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

〈備考〉 木棺隅柱の樹種はスギである。

・SX12 (第47・48図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は方形を呈し、規模は長軸52cm、短軸48cm、深さ22cmである。木棺は検出されていないが、他の方形状の墓墳すべてが木棺墓であることから、墓の形態は正方形木棺墓の可能性が
ある。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

・SX13 (第47・48図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 3 j グリッドに位置する。表土のII耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈し、規模は長軸70cm、短軸68cm、深さ58cmである。木棺は掘り方のほぼ中央で検出され、棺材は底板、隅柱が残存していた。底板の大きさは長軸・短軸とも48cmである。

〈出土遺物〉 銭貨が出土した。

銭貨 銅銭が10枚出土しているが、2枚は銭名が不明である。残りの8枚は、錆化による塗着で銭文の判読が不可能なものがあるものの寛永通寶(文銭1枚、古寛永か新寛永か不明4枚)である。

〈時期〉 銭名不明な寛永通寶があるため詳細は不明であるが、鉄銭が含まれず、また新寛永通寶文銭が出土していることから江戸時代17世紀後半～18世紀中頃の埋葬と思われる。

〈備考〉 木棺隅柱の樹種はスギである。

・SX14 (第47・48図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIB 3 a グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は正方形木棺墓である。掘り方の平面形は方形を呈し、規模は長軸・短軸とも62cm、深さ18cmである。木棺は掘り方の南東隅で検出され、底板が残存していた。底板の大きさは長軸33cm、短軸31cmである。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

・SX15 (第47・48図)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 4 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態〉 墓の形態は円形木棺墓である。掘り方の平面形は円形を呈し、規模は直径78×74cm、深さ18cmである。木棺は掘り方のほぼ中央で検出され、底板の一部が残存していた。

〈出土遺物〉 銭貨が出土した。

銭貨 銅銭の寛永通寶(新寛永)が1枚出土した。

〈時期〉 出土銭貨が1枚と時期決定には資料不足の感もあるが、江戸時代17世紀後半～18世紀の埋葬と思われる。

・SX16 (第47・48図)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 4 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸162cm、短軸62cm、深さ25cmである。木棺は検出されていない。墓の形態は直葬墓の可能性もあるが、不明である。

〈出土遺物〉 遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

・SX17 (第47・48図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 4 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は長方形木棺墓である。掘り方の平面形は長方形を呈し、規模は長軸98cm、短軸78cm、深さ14cmである。木棺は掘り方の中央やや南寄りで検出され、底板のみ残存していた。底板の大きさは長軸70cm、短軸37cmである。

〈出土遺物〉 銭貨が出土した。

銭貨 銅銭が5枚出土し、すべて寛永通寶(古寛永2枚、文銭3枚)である。

〈時期〉 古寛永通寶と新寛永通寶文銭の組み合わせであることから、江戸時代17世紀後半～18世紀の埋葬と思われる。

・SX18 (第47・48図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIB 3 a グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態〉 墓の形態は円形木棺墓である。掘り方の平面形は円形を呈し、規模は直径46×42cm、深さ10cmである。木棺は掘り方の南西隅に銅板の一部が残存していたのみである。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

・SX19 (第47・48図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区東側VIA 4 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のIV層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は長方形木棺墓である。掘り方の平面形は長方形を呈し、規模は長軸114cm、短軸70cm、深さ15cmである。木棺は掘り方の軸線方向に対してやや東に傾いた状態で底板の一部が残存していた。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管が出土した。

銭貨 銅銭12枚、鉄銭36枚の合計48枚が出土した。銅銭7枚の銭名が不詳であるが、残りの5枚は寛永通寶(古寛永1、新寛永3、文銭1)である。鉄銭は錆化とそれによる癒着が激しく、銭名は不明である。

煙管 雁首部2点(46、48)、吸口部2点(47、49)、羅字部1点(50)の計5点出土した。雁首と吸口のほとんどには残存した羅字の一部が付随する。

〈時期〉 鉄銭が出土していることから、江戸時代後半の埋葬の可能性がある。

・SX20 (第47・48図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 調査区東側ⅥA 3 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のⅣ層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 墓の形態は長方形木棺墓である。掘り方の平面形は長方形を呈し、規模は長軸126cm、短軸62cm、深さ28cmである。木棺は掘り方のほぼ中央で検出され、底板が残存していた。底板の大きさは長軸92cm、短軸42cmである。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管、毛抜が出土した。

銭貨 銅銭が21枚出土した。その内4枚の銭名は不明であるが、残りの17枚は、錆化による癒着で銭文の判読が不可能なものがあるものの寛永通寶（古寛永1、新寛永16）である。

煙管 雁首部（51）と吸口部（52）が出土した。吸口部には残存した羅字の一部が付随する。元は同一個体であったと思われる。

毛抜 毛抜が1点（53）出土した。

〈時期〉 出土銭に鉄銭が含まれないことから、江戸時代17世紀後半～18世紀の埋葬と思われる。

・SX21 (第47・48図)

〈位置・検出状況〉 調査区東側ⅥA 4 j グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のⅣ層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は、攪乱により全体形が不明であるが円形と思われる。掘り方の規模は直径59cm、深さ12cmと推定される。木棺は検出されていないが、他の円形状の墓壇の多くが木棺墓であることから、墓の形態は円形木棺墓の可能性が高い。

〈出土遺物〉 銭貨、煙管が出土した。

銭貨 銅銭が6枚出土し、すべて寛永通寶（古寛永2、新寛永4）である。

煙管 残存した羅字の一部が付随する吸口部が1点（54）出土した。

〈時期〉 出土銭に鉄銭が含まれないことから、江戸時代17世紀後半～18世紀の埋葬と思われる。

・SX22 (第47・48図)

〈位置・検出状況〉 調査区東側ⅥA 4 i グリッドに位置する。表土の旧耕作土除去後のⅣ層で検出した。

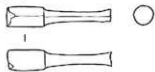
〈重複〉 なし。

〈形態・規模〉 掘り方の平面形は円形を呈し、規模は直径66×62cm、深さ10cmである。木棺は検出されていない。木棺は検出されていないが、他の円形状の墓壇の多くが木棺墓であることから、墓の形態は円形木棺墓の可能性が高い。

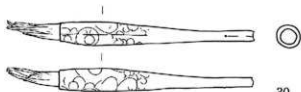
〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 出土遺物はないが、周囲の同種遺構の関連から江戸時代に属するものと思われる。

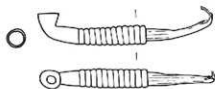
SX2



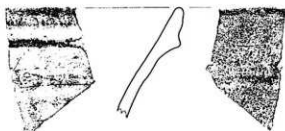
29



30



31



33

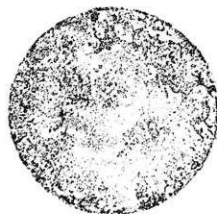


32

SX4



37



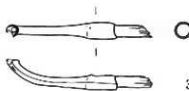
SX5



38



41



39

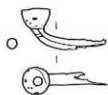


40



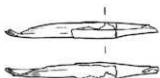
第49圖 墓墳内出土遺物(1)

SX6

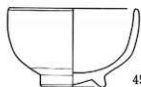


42

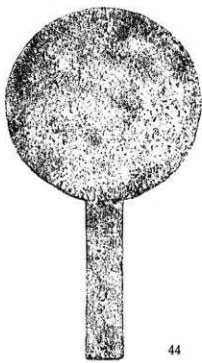
SX7



43



45

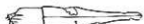


44

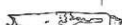
SX19



46



47

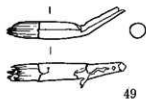


48



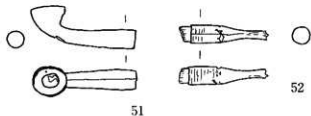
第50圖 墓壙内出土遺物(2)

SX19(2)



49

SX20



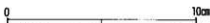
51

52

SX21



54



53

煙管

番号	出土地点	遺物名	部位	計測値	備考
29	SX 2	煙管	吸口	吸口長5.5cm 葎字接合部径1.0cm 吸口径1.1cm	2號
30	SX 2	煙管	吸口・葎字	吸口長10.5cm 葎字接合部径1.0cm 吸口径0.5cm	4號
31	SX 2	煙管	葎管・葎字	葎管長5.7cm 火眼径1.1cm 葎字接合部径0.9cm	4號
32	SX 3	煙管	葎管	葎管長13.9cm 火眼径— 葎字接合部径—	
36	SX 3	煙管	吸口・葎字	吸口長13.1cm 葎字接合部径— 吸口径—	
37	SX 4	煙管	吸口・葎字	吸口長17.8cm 葎字接合部径1.0cm 吸口径0.4cm	3號ないし3號
38	SX 4	煙管	吸口・葎字	吸口長7.2cm 葎字接合部径0.7cm 吸口径0.3cm	3號
39	SX 5	煙管	葎管・葎字	葎管長15.7cm 火眼径— 葎字接合部径0.7cm	3號
40	SX 5	煙管	葎管	葎管長— 火眼径1.6cm 葎字接合部径—	
42	SX 6	煙管	葎管	葎管長14.5cm 火眼径1.5cm 葎字接合部径—	4號
43	SX 7	煙管	吸口・葎字	吸口長14.6cm 葎字接合部径0.8cm 吸口径—	
46	SX 19	煙管	葎管	葎管長— 火眼径1.6cm 葎字接合部径—	
47	SX 19	煙管	吸口・葎字	吸口長15.3cm 葎字接合部径1.2cm 吸口径—	3號
48	SX 19	煙管	葎管・葎字	葎管長15.4cm 火眼径— 葎字接合部径0.8cm	4號
49	SX 19	煙管	吸口・葎字	吸口長14.8cm 葎字接合部径0.9cm 吸口径—	
50	SX 19	煙管	葎管	葎管長11.1cm 葎字径0.7cm	
51	SX 20	煙管	葎管	葎管長3.6cm 火眼径1.8cm 葎字接合部径1.0cm	5號
52	SX 20	煙管	吸口・葎字	吸口長14.2cm 葎字接合部径0.9cm 吸口径—	3號
54	SX 21	煙管	吸口・葎字	吸口長13.7cm 葎字接合部径0.9cm 吸口径—	5號

その他 (錢貨除く)

番号	出土地点	遺物名	計測値	備考
52	SX 2	木鏝	柄長7.6cm 幅3.9cm 歯長3.7cm 高径/cm.72	新巻はナカマツの一種
53	SX 2	煙管	口径— 葎径— 葎長— 葎径0.6—1.1cm	口葎部 痕跡
34	SX 5	種子	長2.6-4.0	
41	SX 5	和紙	直径11.5cm 線高1.1cm 厚0.3—0.75cm	
44	SX 7	納骨	直径10.4cm 径高0.4cm 厚長8.5cm 納骨1.3—2.0cm	
45	SX 7	肉杵丸鉢	口径6.8cm 葎高4.2cm 底径3.5cm	
53	SX 20	毛氈	長27.0cm 幅0.5—0.7cm 厚5.0cm	

第51図 墓壙内出土遺物(3)

SX3



SX6



3

4

5

6

7

SX13



8

9

10

11

12

SX15

SX17



13

14

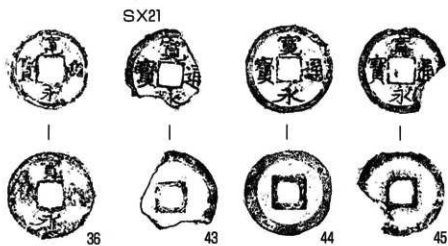
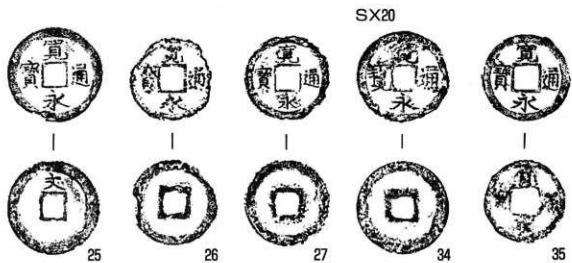
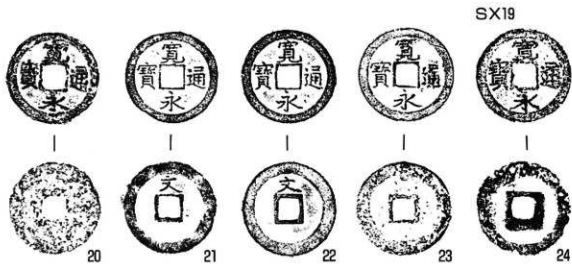
15

18

19

S=原寸

第52圖 墓壙內出土錢貨(1)



S=原寸

第53圖 墓墳内出土銭貨(2)

表9 墓壙内出土銭貨

番号	銭名	分類	素材	遺標名	铸造年代ほか	直径cm	量dg	備考
1	不詳			鉄 SX 2			85.70	33枚
2	不詳			鉄 SX 2			27.83	13枚
3	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 3	1697~		17.66	6枚
4	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 3	1697~	2.4	2.71	
5	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 3	1697~	2.3	2.85	
6	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 6	1636~1659	2.4	2.83	
7	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 6	1639~1659	2.5	2.83	
8	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 6	1636~1659		2.11	
9	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 6	1636~1659	2.4	2.15	
10	寛永通寶	文銭	b	銅 SX 6	武藏国江戸亀戸鑄 1668~1683	2.5	3.17	
11	寛永通寶	文銭	b	銅 SX 13	武藏国江戸亀戸鑄 1668~1683	2.5	2.70	
12	寛永通寶	古・新	a・c	銅 SX 13	古1636~1659、新1697~	2.2	12.23	4枚、中2枚不明
13	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 13	1636~1659	2.4	2.87	
14	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 13	1636~1659	2.3	2.00	
15	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 13	1697~	2.3	1.97	
16	不詳			銅 SX 13			1.04	
17	不詳			銅 SX 13			0.70	
18	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 15	1697~	2.3	1.96	
19	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 17	1636~1659	2.4	2.19	
20	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 17	1636~1659	2.4	3.22	
21	寛永通寶	文銭	b	銅 SX 17	武藏国江戸亀戸鑄 1668~1683	2.5	2.24	
22	寛永通寶	文銭	b	銅 SX 17	武藏国江戸亀戸鑄 1668~1683	2.5	2.77	
23	寛永通寶	文銭	b	銅 SX 17	武藏国江戸亀戸鑄 1668~1683	2.5	3.14	
24	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 19	1636~1659	2.5	2.98	
25	寛永通寶	文銭	b	銅 SX 19	武藏国江戸亀戸鑄 1668~1683	2.5	2.76	
26	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 19	1697~		1.84	
27	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 19	1697~		1.80	
28	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 19	1697~		0.77	
29	不詳			銅 SX 19		2.4	14.92	5枚
30	不詳			銅 SX 19			1.03	
31	不詳			銅 SX 19			0.72	
32	不詳			鉄 SX 19			72.99	34枚
33	不詳			鉄 SX 19			1.37	2枚
34	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 20	1636~1659	2.5	3.58	
35	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 20	1697~	2.4	10.18	4枚
36	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 20	1697~		3.90	
37	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 20	1697~	2.5	3.49	
38	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 20	1697~	2.3	2.80	
39	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 20	1697~	2.4	4.56	
40	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 20	1697~	2.4	13.50	
41	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 20	1697~		2.15	
42	不詳			銅 SX 20		2.3	11.40	4枚
43	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 21	1636~1659		1.59	
44	寛永通寶	古寛永	a	銅 SX 21	1636~1659	2.4	2.81	
45	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 21	1697~	2.4	1.20	
46	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 21	1697~	2.6	1.71	
47	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 21	1697~	2.5	1.16	
48	寛永通寶	新寛永	c	銅 SX 21	1697~	2.5	1.94	

2. 遺構外出土遺物

縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、煙管が小コンテナ1箱分出土した。実測可能な27点を図面掲載している。

(1) 縄文土器

55～56の2点が出土している。ともに器種は深鉢で部位は胴部と思われる。55には沈線文が施される。

(2) 土師器

57～58は土師器甕で体部外面がヘラケズリ調整されている。59は小型の土師器甕の底部破片である。60は土師器坏で内面に黒色処理が施されている。

(3) 須恵器

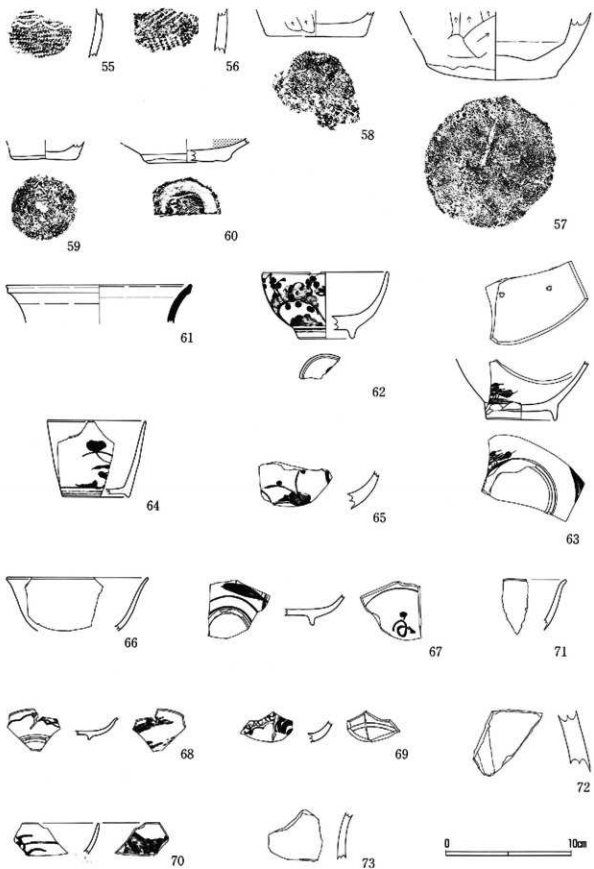
1点のみの出土である。61は甕の口縁部破片で、口径の推定値は14.8cmである。

(4) 陶磁器

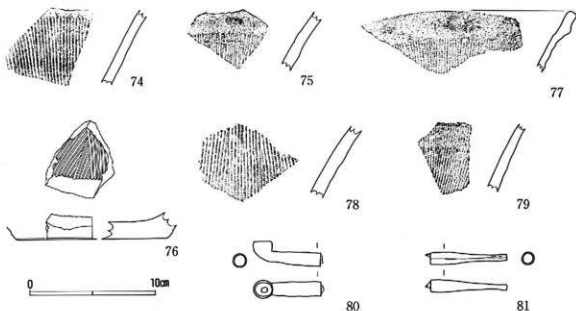
62、64～65、70は肥前産の磁器である。62は染付碗で岩草花文が施される。高台内の銘は不明である。大橋稲年のⅣ期に比定される。64は猪口で岩草文が施されるが、焼成はあまり良くない。Ⅴ期に比定される。65は岩草花文の染付碗でⅣ期に比定される。69は磁器碗で産地は不明であるが、焼成がされている。71は大堀相馬窯と思われる陶器端反碗である。74～79は陶器摺鉢である。胎土は暗赤褐色を呈し、褐色の鉄軸によるものである。

(5) 煙管

80は雁首部、81は吸口部である。古泉弘氏らによる煙管の分類に当てはめると、80は脂返しの湾曲が緩やかで5類の特徴を持つ。81は肩部に段がないことから4類ないしは5類に該当する。



第54圖 遺構外出土遺物(1)



縄文土器

番号	出土地点	器種・部位	部位	文様の特徴	色調	備考
55	遺構外 表土	漆鉢?	柄部	浅い波線文 L&R縄文	赤褐色～灰赤	
56	遺構外 表土	漆鉢?	柄部	L&R縄文 (長方向)	にじい濃褐色	

土師器・須恵器

番号	出土地点	器種	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外面装飾	内面装飾	色調	備考
57	遺構外 西側表土	土師器	壺	—	(5.5)	10.4	ヘラケズリ	不明	灰赤	砂流
58	遺構外 西側表土	土師器	壺	—	(2.1)	7.6	ヘラケズリ	不明	灰赤褐色	砂流
59	遺構外 西側表土	土師器	壺	—	(1.4)	3.0	不明	不明	灰白	砂流
60	遺構外 西側表土	土師器	杯	—	(1.9)	6.2	ウツロ	不明	浅黄褐色	内風
61	遺構外 表土	須恵器	壺	(14.8)	(3.0)	—	ウツロ	ウツロ	暗灰	

陶磁器

番号	出土地点	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	釉薬・胎付	製作地	製作年代	備考
62	遺構外 表土	磁器碗	(9.8)	5.3	(4.2)	白色	胎付(釉)	鎌倉	1690～1780	沼草花文 高台内縁不明 青煎
63	遺構外 表土	磁器心皿	—	(4.7)	5.4	白色	胎付(空白)	在尾瀬	19c 後半	
64	遺構外 表土	磁器杯口	(7.8)	6.1	(5.2)	白色	胎付(釉)	鎌倉	1780～1880	沼草文 焼成不真 V期
65	遺構外 表土	磁器染付瓶	—	(3.1)	—	白色	胎付(青)	鎌倉	1690～1780	沼草花文 青煎
66	遺構外 表土	海苔鉢	(11.2)	(4.3)	—	灰色(青)	胎付(灰白色)	不明	19c	
67	遺構外 西側表土	磁器皿	—	(2.5)	—	白色	胎付(青)	不明	19c	
68	遺構外 西側表土	磁器手瓶皿	—	1.7	—	白色	胎付(青)	不明	19c	
69	遺構外 西側表土	磁器皿	—	(1.7)	—	白色	胎付(青)	不明	19c	焼成
70	遺構外 西側表土	磁器皿	—	(1.9)	—	白色	胎付(青)	鎌倉	19c	
71	遺構外 V字bアリアド	磁器風呂敷	—	—	—	灰白色	胎付	大船形海小	19c 以降小	
72	遺構外 表土	海苔鉢	—	(4.9)	—	暗赤褐色	胎付(褐色)	不明	19c 以降小	
73	遺構外 表土	海苔鉢?	—	(3.6)	—	暗褐色	胎付(褐色)	不明	19c 以降小	
74	遺構外 表土	海苔鉢	—	(4.7)	—	暗赤褐色	胎付(褐色)	不明	19c 以降小	
75	遺構外 西側表土	海苔鉢	—	(6.0)	—	暗赤褐色	胎付(褐色)	不明	19c 以降小	
76	遺構外 表土	海苔鉢	—	(2.0)	(12.0)	暗赤褐色	胎付(褐色)	不明	19c 以降小	
77	遺構外 表土	海苔鉢	(22.0)	(5.8)	—	暗赤褐色	胎付(褐色)	不明	19c 以降小	
78	遺構外 西側表土	海苔鉢	—	(4.9)	—	暗赤褐色	胎付(褐色)	不明	19c 以降小	
79	遺構外 西側表土	海苔鉢	—	(5.5)	—	暗赤褐色	胎付(褐色)	不明	19c 以降小	

煙管

番号	出土地点	遺物名	部位	計測値	備考
80	遺構外 V字bアリアド	煙管	筒首・篩字	筒首径5.4cm 水眼径1.5cm 篩字適合径約1.1cm	
81	遺構外 西側表土	煙管	吸口・篩字	吸口径5.2cm 篩字適合径約0.9cm 吸口径0.4cm	

第55図 遺構外出土遺物(2)

3. 考察とまとめ

(1) 遺構

① 竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居は1棟である。S A 1住居跡は調査区北側で検出され、削平により残存状況は悪かったが、カマドに残る焼土や土器から生活の痕跡が窺える。住居跡の周辺には土坑があるが、他の時代の遺構も同一面に存在するため、住居跡との関連性は不明である。住居跡の立地条件から鑑み、周辺に集落が存在していた可能性がある。遺構の時期については、出土遺物から9世後半～10世紀と考えられる。

② 掘立柱建物跡

今回の調査では多数の柱穴が検出されたことにより、33棟の掘立柱建物跡を推定した。建物跡を構成する柱穴は、本来の掘り込まれた面から下がった面での検出であり、掘り込みが浅く検出面まで達していない場合もあるため、その存在を確認できなかった柱穴もあった。これらの推定した建物跡の年代については、具体的な時期を特定することは非常に困難である。何故ならば、本調査区の場合、他の平泉町の遺跡の多くがそうであるように遺構検出面が地山面の一面のみであり、縄文時代の陥し穴状遺構から近世の墓塚まで同一面となるからである。また、柱穴からの出土遺物もごく僅かであり、資料に乏しい状況にある。したがって、ここでは平面型式による分類を最初に行い、次に切り合い関係を中心にしながら出土遺物及び間尺等を考慮に入れて可能な範囲で遺構の変遷を行いまとめとする。

・平面型式による分類

推定した33棟の掘立柱建物跡を廂（張り出し）の有無、桁行の規模等から次のように分類した。

I：桁行もしくは梁行に廂（張り出し）が付く建物跡

- ①：桁行のみに付く a…1面廂 b…2面廂
- ②：梁行のみに付く a…1面廂 b…2面廂
- ③：桁行と梁行に付く a…2面廂 b…3面廂 c…4面廂

II：廂を持たない長屋的建物跡

- ①：桁行が3間以内 a…間仕切りを持つ b…間仕切りを持たない
- ②：桁行が3間以上 a…間仕切りを持つ b…間仕切りを持たない

となり、該当する建物を集計すると次頁表10ようになる。以下それぞれについてみていきたい。

〈I型〉 10棟が該当する。②類に該当する建物跡はない。

①類：8棟が該当する。

①a類は3棟該当する。S B 4、S B 12は北西側桁行に付く。建物面積はそれぞれ約65.1㎡（19.7坪）、約56.9㎡（17.2坪）である。S B 12は南東側が調査区外へ延びるため2面廂の可能性もある。S B 17は南東側桁行に付く建物で、建物面積は約25.6㎡（7.7坪）である。

①b類は5棟該当する。S B 1は身舎に内柱がみられる。建物面積は約92.7㎡（28.1坪）である。S B 2、S B 3は身舎に内柱がみられ、また南東側桁行に出入り口と思われる張り出しが付く。建物面積はそれぞれ約139.2㎡（42.2坪）、約102㎡（30.9坪）である。S B 8は身舎中央付近に内柱P 573がみられる。建物面積は約95.8㎡（29.0坪）である。S B 13には内柱はみられない。建物面積は約37.5㎡（11.4坪）である。

③類：2棟が該当する。③a類及び③b類に該当する建物跡はない。

表10 掘立柱建物跡分類表

		遺構数	該当する掘立柱建物跡
I	①	a	3 SB 4、SB 12、SB 17
		b	5 SB 1、SB 2、SB 3、SB 8、SB 13
	②	a	0
		b	0
	③	a	0
		b	0
c		2 SB 7、SB 10	
II	①	a	0
		b	16 SB 18、SB 19、SB 20、SB 21、SB 22、SB 23、SB 24、SB 25、SB 26、SB 27、SB 28、SB 29、SB 30、SB 31、SB 32、SB 33
	②	a	2 SB 9、SB 11
		b	5 SB 5、SB 6、SB 14、SB 15、SB 16

③c類は推定を含め2棟検出された。SB 7は身舎に2基の内柱を持ち、3つの空間に分割されていたと思われる。建物面積は約97.6㎡(29.6坪)である。SB 10は身舎に内柱がみられるが、間取りの詳細は不明である。建物面積は約81.8㎡(24.8坪)である。

〈II型〉 23棟が該当する。

①類：16棟が該当する。①a類に該当する建物はない。

①b類は16棟検出された。規模をみると3×1間の建物が最も多く7棟(SB 18、19、20、22、23、31、32)、続いて3×2間が2棟(SB 24、25)となる。建物面積が最大の建物はSB 25で約24.7㎡(7.5坪)、最小はSB 32で約7.2㎡(2.2坪)である。全体的に20㎡前後の規模の建物が多い傾向にある。残りのSB 21、26、27、28、29、30、33の7棟については調査区外へ延びるため規模は大きくなる可能性がある。

②類：7棟が該当する。

②a類は2棟検出された。SB 9は7×3間の建物である。内柱が数基みられるが、間取りの詳細は不明である。建物面積は約93.1㎡(28.2坪)である。SB 11は5×2間の建物である。詳細な間取りは不明であるが内柱P 663により身舎内は分割されていたものと思われる。建物面積は約44.7㎡(13.6坪)である。

②b類は5棟検出された。SB 5は5×1間の建物で、建物面積は約40.5㎡(12.3坪)である。SB 6は4×2間で、建物面積は約31.4㎡(9.5坪)である。SB 14は4×1間で、建物面積は約40.0㎡(12.1坪)である。SB 15は4×1間で、建物面積は約35.3㎡(10.7坪)である。SB 16は4×1間で、建物面積は約28.3㎡(8.6坪)である。

②類全体においては、建物面積が最大の建物はSB 9で約93.1㎡(28.2坪)、最小の建物はSB 16で約28.3㎡(8.6坪)となる。

・掘立柱建物跡の変遷および年代

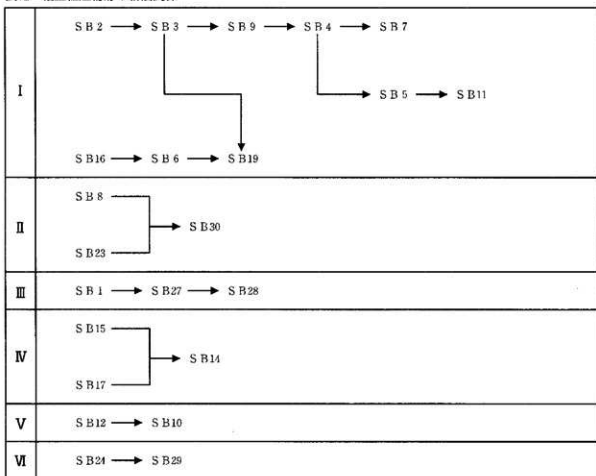
今回の調査で検出できた掘立柱建物跡は33棟である。これらについては表11及び表12のような重複が見られ新旧関係が成立する。しかしながら遺物が出土している建物跡は7棟と少なく、時期を断定することは非常に困難である。したがって、ここでは新旧関係を踏まえた上で、出土遺物及び間尺を考慮に入れ掘立柱建物跡の変遷及び年代について検討してみることにする。

I群：計10棟の新旧関係がみられる。

表11 掘立柱建物跡切り合い関係表

遺構名	当該遺構より古い遺構	当該遺構より新しい遺構	備考
SB 1		SB 27	
SB 2	柱列 5号	SB 3、SB 4、SB 5、SB 7、SB 19	
SB 3	SB 2	SB 4、SB 7、SB 9、柱列 1号	
SB 4	SB 2、SB 3、SB 9	SB 5、SB 7	
SB 5	SB 2、SB 4	SB 11	
SB 6	SB 16	SB 19	
SB 7	SB 2、SB 3、SB 4		
SB 8		SB 30	
SB 9	SB 3	SB 4、柱列 6号	
SB 10	SB 12		
SB 11	SB 5		
SB 12		SB 10	
SB 13			
SB 14	SB 15、SB 17		
SB 15		SB 14	
SB 16		SB 6	
SB 17		SB 14	
SB 18			
SB 19	SB 2、SB 6	柱列 2号	
SB 20		SE 1	
SB 21		SE 1、SK 1、SK 2	
SB 22			
SB 23		SB 30	
SB 24		SB 26	
SB 25			
SB 26	SB 24		
SB 27	SB 1	SB 28	
SB 28	SB 27		
SB 29			
SB 30	SB 8、SB 23		
SB 31			
SB 32			
SB 35		SE 1	

表12 榑立柱建物跡の新旧関係



遺物は6棟 (SB 2、4、6、9、11、19) で出土している。SB 2からはかわらけの他、12世紀の中国産磁器、至道元寶、土師器が出土しており、SB 4とSB 6からはかわらけ、SB 9からは12世紀の瀬美産陶器、SB 11からは陶器碗、SB 19からは縄文土器が出土している。このうちSB 2、SB 4、SB 9はその出土遺物から中世に属するものと思われる。ただし、12世紀に属するかどうかについては平面型式等不明な点も多く結論は避けざるを得ない。SB 3は出土遺物はないもののSB 9より旧いため中世、SB 5も出土遺物はないが桁間の寸法が6.3尺であることから近世以降に属すると思われる。SB 6はその出土遺物から12世紀ないし中世に属する可能性がある。SB 7は7尺以上の間尺であることから中世、SB 11はSB 5より新しいため近世以降に属するものと思われる。SB 16は出土遺物はないもののSB 6より旧いため12世紀ないし中世に属する可能性がある。SB 19は縄文土器が出土しているが流れ込みによるものと思われ、間尺の寸法から中世に属するものと思われる。

II群：計3棟の新旧関係がみられる。

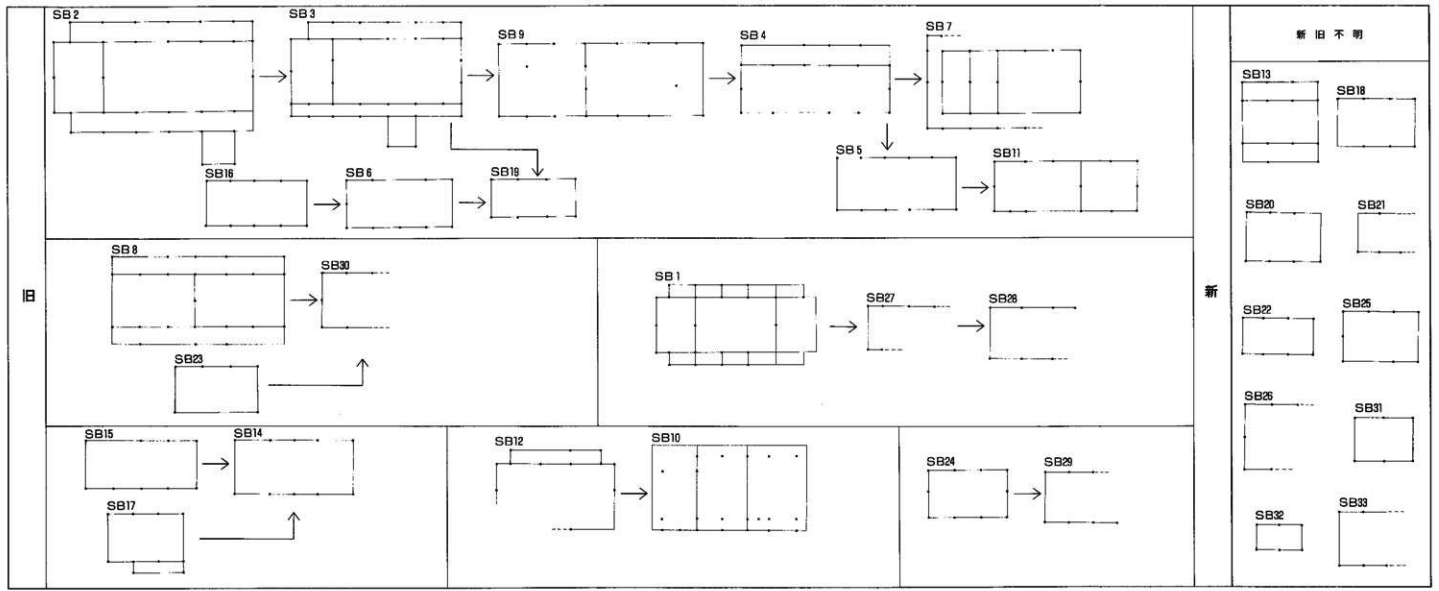
3棟とも遺物が出土していない。SB 8は7尺台の間尺を多く使用することから中世に属すると思われる。SB 23は12世紀ないし中世に属する可能性がある。SB 30は梁間は7.2尺であるが、桁間が6.6尺と6尺台が使用されていることから中世もしくは近世に属するものと思われる。

III群：計3棟の新旧関係がみられる。

3棟とも遺物が出土していない。SB 27、28は桁行7尺～8尺台の間尺を使用していることから中世に属

表13 掘立柱建物跡の柱間寸法と軸線方向

建物No	桁間寸法		梁間寸法		軸線方向
	cm	尺	cm	尺	
S B 1	209、221	6.9、7.3	221	7.3	N-32°-W
S B 2	255が主	8.4が主	282	9.3	N-32°-W
S B 3	215が主	7.1が主	260	8.6	N-22°-W
S B 4	251が主	8.3が主	194	6.4	N-28°-W
S B 5	191	6.3	424	14.0	N-34°-W
S B 6	212	7.0	185	6.1	N-31°-W
S B 7	215	7.1	245など	8.1など	N-21°-W
S B 8	224、251	7.4、8.3	209	6.9	N-19°-W
S B 9	218、248	7.2、8.2	179	5.9	N-18°-W
S B 10	142、197など	4.7、6.5など	185が主	6.1が主	N-38°-W
S B 11	221、236	7.3、7.8	197	6.5	N-38°-W
S B 12	242	8.0	213、312など	7.0、10.3など	N-19°-W
S B 13	197	6.5	339	11.2	N-20°-W
S B 14	194、276	6.4、9.1	426	14.0	N-28°-W
S B 15	224	7.4	394	13.0	N-33°-W
S B 16	188、210	6.2、7.0など	358	11.8	N-32°-W
S B 17	197	6.5	376	12.4	N-28°-W
S B 18	209、185	6.9、6.1	376	12.4	N-36°-W
S B 19	233、206	7.4、6.8	303	10.0	N-21°-W
S B 20	188、209	6.2、6.9	388	12.8	N-28°-W
S B 21	167	5.5	315	10.4	N-16°-W
S B 22	158、197	5.2、6.5	291	9.6	N-29°-W
S B 23	215	7.1	371	12.2	N-13°-W
S B 24	206	6.8	188が主	6.2が主	N-39°-W
S B 25	203	6.7	203	6.7	N-40°-W
S B 26	212	7.0	255	8.4	N-38°-W
S B 27	212、106	7.0、3.5	348	11.5	N-39°-W
S B 28	251、176	8.3、5.8	406	13.5	N-37°-W
S B 29	185	6.1	400	13.2	N-28°-W
S B 30	200	6.6	218	7.2	N-34°-W
S B 31	230	7.6	351	11.6	N-28°-W
S B 32	181	6.0	200	6.6	N-38°-W
S B 33	194	6.4	430	14.2	N-2°-W



第56図 掘立柱建物跡切り合い関係図

するものと思われる。SB1はこれより古い建物であるため中世の所屬とした。

IV群：計3棟の新旧関係がみられる。

3棟とも遺物が出土していない。SB15は桁行7尺台の間尺を使用していることから12世紀ないし中世に属する可能性を持つ。SB17は桁行6.5尺を使用していることから中世に属するものと思われる。SB14は新旧関係から近世以降とした。

V群：計2棟の新旧関係がみられる。

SB12から陶器片が出土しているが、極細片のため年代を決定する資料ではない。そのためSB12は桁行8.0台と長いことから、断定はできないが中世の所屬とした。SB10はSB12よりも新しく、また様々な間尺を使用するものの6尺台の間尺を使用していることから近世とした。

VI群：計2棟の新旧関係がみられる。

2棟とも遺物は出土していない。ともに6尺台の間尺を使用することから近世に属するものと思われる。

このように、遺構の新旧関係や出土遺物、間尺等から掘立柱建物跡の変遷および年代を検討してみたが、遺構検出面がどの時代も同一面での検出であることに加え出土遺物も少ないことから、推測に推測を重ねた部分も多い。したがって、誤りも多いと思われ、一つの考え方を提示したものと考えていただきたい。

③墓塚

・墓の形態

今回検出された22基の墓塚はすべて土葬墓であり、形状及び埋葬施設の違いから次のように分類した。

- a：円形木棺墓…早桶を棺として使用した墓。
- b：正方形木棺墓…廣箱を棺として使用した正方形の墓。
- c：長方形木棺墓…廣箱を棺として使用した長方形の墓。

これに当てはめていくと、以下のようになる。

- a：円形木棺墓…6基（SX2、8、15、18、21、22）
- b：正方形木棺墓…10基（SX3、4、6、7、9、10、11、12、13、14）
- c：長方形木棺墓…5基（SX1、5、17、19、20）

その他、形態不明のものが1基（SX16）である。木棺の出土が無く、木棺墓かどうか不明なものについては、その形態から判断し最も可能性が高いものに該当することとして数えた。

・墓の年代

今回検出された墓塚の年代を考えてみたい。今回検出された22基の墓塚群には重複が見られず、切り合いから新旧関係を追うことはできなかった。しかしながら、そのうち9基から銭貨が出土している。したがって、ここでは銭貨の組み合わせをもとに銭貨が出土した墓塚を区分し、遺構の年代について検討してみることにする。年代決定に際しては、銭貨の組み合わせの中に寛永通寶が共伴していることから、古寛永銭、文銭、新寛永銭の区分による区分と、その鑄造年代をもとに行うことにする。

銭貨が出土している墓は、SX2、3、6、13、15、17、19、20、21がある。これらは銭貨の組み合わせから、以下のように分類できる。ただし、SX2、13、19、20については種類が不明な銭貨があるため分類から除外した。

- A：古寛永銭のみが出土する墓 …なし

B：古寛永銭と文銭が共存する墓…SX 6、SX 17

C：新寛永銭が出土及び共存する墓…SX 3、SX 15、SX 21

これらA・B・Cの上限年代については、銭貨の鋳造年代より、次のような年代が与えられる。

A：古寛永銭の鋳造年代より1636（寛永13）～1659（万治2）年以降

B：文銭の鋳造年代より1668（寛文8）～1683（天和2）年以降

C：新寛永銭の鋳造年代より1697（元禄10）年以降

次に、これらの下限年代についてふれてみたい。

A：今回の調査では該当する墓はない。Aの場合、古寛永銭のみが出土という点を重視すれば、Bの組み合わせよりも古い墓である可能性が考えられ、文銭鋳造以前の年代が考えられる。したがって、今回の調査で該当がないということは、この墓域群全体が文銭鋳造年代以降との推測も可能と言える。

B：銭貨の組み合わせに新寛永銭を全く共存しない点を考慮すると、新寛永銭が鋳造される1697年以前のものである可能性が高い。したがって、ここでは新寛永銭鋳造以前の年代が与えられる。

C：新寛永銭の細分類で得た鋳造年代をみると、18世紀中葉以降に鋳造された銭貨が出土していない。したがって、ここでは19世紀代には下らないものと考えておきたい。

一方、種類が不明な銭貨があるため分類を除外したSX 2、13、19、20について、埋葬時期の可能性を考えたい。SX 2は出土銭貨が全て鉄銭であることから江戸時代中期以降、SX 13は出土した寛永通寶に鉄銭が含まれないことから江戸時代17世紀末～18世紀、SX 19は出土した新寛永銭が銅銭であることから江戸時代17世紀末以降と考えられるが、鉄銭が出土していることから年代が下る可能性もある。SX 20も種類不明の銭貨も含めすべて銅銭であることから新寛永銭鋳造以降の17世紀末以降が考えられる。何分種類不明の銭貨であるので、あくまで一つの可能性として提示しておきたい。

その他、銭貨の出土のない墓域については、年代を追うことは非常に困難である。したがって、これら銭貨が出土した墓域がすべて江戸時代に該当することから、同様に江戸時代に埋葬されたものと考えたい。

④その他の遺構

・陥し穴状遺構…調査区北側からSI 1住居跡と重複して1基検出された。遺物の出土はないが、時期は縄文時代と思われる。

表14 墓域内出土銭貨の組み合わせ

遺構名	出土した銭貨	上限年代
SX 2	不明46枚（鉄）	不明
SX 3	新寛永銭8枚（銅）	新寛永銭の鋳造年代より1697（元禄10）年以降
SX 6	古寛永銭4枚（銅）、文銭1枚（銅）	文銭の鋳造年代より1688（寛文8）年以降
SX 13	古寛永銭3枚（銅）、文銭1枚（銅） 新寛永銭2枚（銅）、不明2枚（銅）	新寛永銭の鋳造年代より1697（元禄10）年以降の可能性有り
SX 15	新寛永銭1枚（銅）	新寛永銭の鋳造年代より1697（元禄10）年以降
SX 17	古寛永銭2枚（銅）、文銭3枚（銅）	文銭の鋳造年代より1688（寛文8）年以降
SX 19	古寛永銭1枚（銅）、文銭1枚（銅） 新寛永銭3枚（銅）、不明13枚（銅7、鉄36）	新寛永銭の鋳造年代より1697（元禄10）年以降の可能性有り
SX 20	古寛永銭1枚（銅）、新寛永銭16枚（銅） 不明4枚（銅）	新寛永銭の鋳造年代より1697（元禄10）年以降の可能性有り
SX 21	古寛永銭2枚（銅）、新寛永銭4枚（銅）	新寛永銭の鋳造年代より1697（元禄10）年以降

表15 墓壇内出土遺物一覧表

遺構名	形状	棺材	鉄貨		煙管		和鏡	柄鏡	毛抜	櫛	土人形	陶磁器	その他
			銅	鉄	雁首	吸口							
SX1	長方形												鉄片1
SX2	円形	○		46	1	2				1		掘り鉢1	
SX3	正方形	○	8		1	1							種子(モモ)1
SX4	正方形	○			1								
SX5	長方形	○			2	1	1						
SX6	正方形	○	5		1								
SX7	正方形	○				1		1				陶器丸輪1	
SX8	円形												
SX9	正方形	○											
SX10	正方形	○											
SX11	正方形	○											
SX12	正方形	○											
SX13	正方形	○	10										
SX14	正方形	○											
SX15	円形	○	1										
SX16	長楕円形												
SX17	長方形	○	5										
SX18	円形	○											
SX19	長方形	○	12	36	2	2							
SX20	長方形	○	21		1	1			1				
SX21	円形		6			1							
SX22	円形												

・井戸…調査区中央部付近西側で検出した。遺物は出土していないが、建物跡に伴う遺構と思われる。重複する遺構はあるが、詳細な時期は不明である。

・土坑…5基検出された。SX1、SX2は調査区中央部付近西側で並んで検出された。確証がないため土坑としたが、ともに井戸跡の可能性もある。平面形はともにほぼ円形であり、規模も開口部径約200cm程で似通っている。埋土の様相も似通っており両者に時期差はあまりないものと思われ、SX1は、井戸跡とすれば割と浅く地表から最大125cm程で底面に達し、また底面が平坦ではなく南から北側に向かって傾斜していることから、何らかの理由により途中で放棄した可能性がある。時期はSB21との切り合い関係から近世以降と思われる。SX3、4、5は調査区北側で検出された。SX3からはかわらけ?の細片、SX4からは錆化の著しい鉄片が出土している。遺構の時期については、遺物は出土しているものの周辺の遺構の時期などを考慮すると時期決定の明確な根拠となり得ず詳細は不明である。SX5は遺物の出土はなく、時期は不明である。

・カマド状遺構…調査区北側西隅で検出された。全体形は不明であるが鍵穴状を呈するものと思われる。平泉町内では特に高玉遺跡で多く検出されている。時期については、中世の可能性もあるが詳細は不明である。

(2) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、墓壇内出土遺物を除くとかわらけ、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄片で量的には小コンテナ1箱程で、復元できたもの、実測可能なものがほとんどなかったため、細かく分類することができなかった。主立った遺物に関する詳細は本文中に記している。一方、埋葬時に墓壇内に副葬さ

れた遺物として銭貨、煙管、陶器、櫛、和鏡、柄鏡、毛抜等が出土しており、ここではそれらについて若干見ていきたい。

①銭貨

今回の調査では、9基の墓塚から合計150枚の銭貨が出土しており、佐野遺跡第1次調査と同様の方法で分類を行った。詳しくは43頁を参照していただきたい。

本邦銭55枚、銹化あるいは銹化による極着が著しく判別できなかったものは95枚である。渡来銭は出土していない。本邦銭はすべて寛永通寶と思われる。さらに寛永通寶は表16のように細分される。これをみると、最も多いのは新寛永銭で34枚、次が古寛永銭の12枚、さらに文銭の5枚と続く。鉄新寛永銭は出土していないが、SX2やSX19で出土した錢種不明の銭貨が鉄新寛永銭である可能性もある。西文銭は出土していない。また、個々の銭貨の分類は表9に提示しており、泉貨学の提示する細分類については、活用可能な限り選別を行った。

表16 寛永通寶分類表

遺構名	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	合計
SX2	0	0	0	0	0	0	0
SX3	0	0	8	0	0	0	8
SX6	4	1	0	0	0	0	5
SX13	3	1	2	0	0	0	6
SX15	0	0	1	0	0	0	1
SX17	2	3	0	0	0	0	5
SX19	0	0	3	0	0	0	3
SX20	1	0	16	0	0	0	0
SX21	2	0	0	4	0	0	6
合計	12	5	34	0	0	0	51

※寛永通寶と確認できたものに限って分類している。

②煙管

煙管の分類についても、佐野遺跡第1次調査と同様の方法で分類した。

本遺跡においては、9基の墓から雁首8点、吸口10点、羅字のみ1点の合計19点が出土した。羅字除いた18点を分類すると、3類が3点、4類が3点、5類が6点、不明が6点となる。

29は吸口の肩に段が付くことから3類に分類される。30は肩部に線刻の文様が入り、31は同じく肩部に12段の輪状の装飾が施される。装飾性から同一製品と思われ、4類に分類できる。37、38は肩部にわずかに段が入り3類の特徴を持つ。39は火皿部分は残存していないが脂返しの湾曲度合いから5類で、38、40は同一製品と思われる。42は脂返しの湾曲度合いの特徴から4類、48、51は脂返しの湾曲度が小さくなる5類に分類される。52は吸口先端が僅かに広がり肩部に細かい線条が入る。51、52は同じ墓塚からの出土で同一製品と思われる。

③陶器

SX2から擂鉢が1点(33)、SX7から丸碗が1点(45)出土した。33は口縁部の破片であり鉄軸が掛かる。副葬品ではなく埋土への流れ込みによるものと思われる。45は口径6.8cm、底径4.2cm、器高3.2cmを

薄。灰白色の薬灰釉が掛かり、胎土は白色である。産地は不明である。

④櫛

SX 2 から木櫛が 1 点 (32) 出土した。残存長は 7.6cm、厚さは 0.9cm である。歯の付け根から先は残存していなかったが、確認できた歯数は 43 本あり、1cm に対する歯数の割合は 6.72 本である。櫛種はナナカマドの一種である。

⑤和鏡

SX 5 から 1 点 (41)、SX 7 から 1 点 (44) の計 2 点が出土した。41 は長方形木棺墓の北寄りで鏡面を下に向けた状態の出土であった。鏡面背に二重圓界、亀形紐と菊花紋を配する。面径 11.3cm、縁高 1.1cm、厚さは 0.3cm～0.75cm である。44 は正方形木棺墓の底面ほぼ中央、柄を南方向に鏡面を下に向けて置かれていた。また、柄鏡のドには縁紋が 2cm 程敷かれていた。鏡面背は丸に正六角形の亀甲紋を配する。地紋は竹(ササ)であろうか。亀甲紋は出雲大社に縁ある神社に多く認められる家紋とされている。面径は 10.4cm、縁高は 0.4cm、柄長は 8.5cm、柄幅は 1.9～2.0cm である。

(3) 小結

三日町 1 遺跡第 2 次調査区は、断続的にはあるが縄文時代から近世の遺跡であることが確認された。当初予想された 12 世紀に該当する明確な遺構は検出されなかった。遺構は、柱穴をはじめ調査区西側で多数検出されたが、東側では少なかった。これは調査区東側が水田造成の際に一段低く土を削ったことによるものである。その段差は 30～40cm 程あり柱穴等は削平されてしまっており、そのため残った遺構は深さのある柱穴及び墓塚のみであった。一方、調査区北側においても旧地権者宅のコンクリート基礎や電力会社の仮鉄塔の跡により地盤が改変されていた。

縄文時代と思われる遺構としては、調査区西端より陥し穴状遺構が堅穴住居跡に重複して 1 基検出された。現在は平坦地であるが、縄文時代にこの付近は西から東へ傾斜する地形であったと思われる。本調査区にはど近く地形的にも似る高田遺跡第 2 次調査においても 12 基検出されており、狩り場であった可能性がある。

平安時代に属する遺構としては、調査区西端より 9 世紀後半～10 世紀頃の堅穴住居跡が 1 棟検出された。削平により残存状況は良くなかったが、カマドの焼土や土器などから生活の痕跡が窺えた。立地条件からみると周辺に集落があった可能性は高いと言える。

中世～近世に属する遺構としては、調査区西側を主に全体で計 731 基の柱穴が検出され、掘立柱建物跡が 33 棟、柱列が 6 条確認された。柱穴の検出状況からみると調査区西南側にはさらに柱穴が存在するものと予想される。また水田造成時の削平により一段低くなっている調査区東側からは深さのある柱穴のみが検出されているが、これは削平により柱穴の検出数が少ないのか、あるいは元々柱穴は少なく建物のない場所であったのかは不明である。ただし、江戸時代に属する墓塚群が検出されていることから、少なくとも墓塚とされた年代以降は、その付近に建物跡はなかったものと思われる。個々の建物跡の時代決定については、柱穴同士の間合い、桁行・梁行の間尺、埋土、出土遺物等から総合的に判断を行ったが、推測の域を出ず確証を得るには至らない建物跡も多い。

近世に属する遺構は、調査区西側より墓塚が 22 基まとまって検出された。円形木棺墓、方形木棺墓、長方形木棺墓からなり、木棺材は 17 基で検出され比較的良い残存状況を示すものもあった。遺構の時期は出土遺

物から江戸時代に属するものと推測できるが、墓石など年代を知る上で手がかりとなるものが残っていないため、具体的な時期に関しては主に古銭などの出土遺物から推測した。しかしながら、その古銭についても近世遺構の調査例が増加するに伴い、年代的に泉貨学の成果と矛盾する出土状況を示すものも確認されているため、鋳造年代がほぼ確定している古寛永銭、新寛永銭の分類を基本にし、細分類については活用可能なものに限って選別を行い、埋葬時期を推測した。

本遺跡周辺の遺跡については、前掲の佐野遺跡で述べているように平泉町中心部地域に比べ調査事例が少くない。調査は佐野原遺跡第1次～2次、三日町Ⅰ遺跡第1次、三日町Ⅱ遺跡第1次、高田遺跡第1次～2次等行われているが、高田遺跡第1次～2次でのみ遺構が検出されている。高田遺跡第1次では縄文時代の落とし穴遺構、平安時代の掘立柱建物跡、近世～近代の厩跡、井戸跡、溝跡が検出されている。高田遺跡第2次では縄文時代の土坑、中世の溝跡、掘立柱建物跡、カマド状遺構、近世近代の竪穴状施設が検出されている。高田遺跡は本調査区に距離的にも近く、関連性が注目される。

本遺跡は、断続的にはあるが縄文時代～近世の遺跡であることが確認され、長い年月にわたる人々の生活の痕跡の一端を窺い知ることができた。しかしながら、遺構の時期については不明なものや推測の域を出ないものも多い。今後さらに周辺地域の調査事例が増加することにより、本遺跡及び遺跡周辺の様相が明らかになっていくものと思われる。

〈引用・参考文献〉

- 岩手県文化振興事業団 (1997) : 『瀬原Ⅰ遺跡第2次・第3次発掘調査報告書』岩理文第257集
岩手県文化振興事業団 (1996) : 『岩陽遺跡発掘調査報告書』岩理文第235集
岩手県文化振興事業団 (1997) : 『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩理文第248集
岩手県文化振興事業団 (1985) : 『高玉遺跡発掘調査報告書』岩理文第93集
岩手県文化振興事業団 (1994) : 『柳之御所跡』岩理文第228集
岩手県文化振興事業団 (1995) : 『志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書』岩理文第216集
平泉町教育委員会 (1990) : 『柳之御所跡発掘調査報告書—第24・25次調査概報—』平泉町文化財調査報告書第19集
平泉町教育委員会 (1995) : 『高田遺跡第2次発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第54集
平泉町教育委員会 (1996) : 『東北電力鉄塔用地発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第58集
平泉町教育委員会 (1995) : 『高田遺跡第1次発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第52集
平泉町教育委員会 (1995) : 『志羅山遺跡第35次発掘調査報告書』
多賀城市教育委員会 (1998) : 『人日北遺跡』多賀城市文化財調査報告書第49集
石川長喜 (1983) : 『発掘調査された墳墓について』『紀要Ⅲ』岩手県史文
高橋和右衛門 (1990) : 『掘立柱建物跡の簡尺と時代性』『紀要Ⅸ』岩理文
岩手県立博物館 (1982) : 『岩手の土器』
永井久美男 (1996) : 『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
阿部正光・佐藤敏幸 (1997) : 『宮城県の近世墓と六道銭』『近世の出土銭Ⅰ—論考編—』兵庫埋蔵銭調査会
古代城構官衙遺跡検討会 (1998) : 『第24回シンポジウム「城構と地域社会の変容」資料集「東北地方の古代城落」第3分冊』

- 千葉信胤 (1996) : 「平泉地名研究の諸問題」『考古学ジャーナル No407』ニュー・サイエンス社
- 古泉弘 (1985) : 「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学 第13号』雄山閣出版
- 青木豊・内川隆志 (1994) : 『柄鏡入鑑』刀水書房
- 東北陶磁文化館 (1987) : 『東北の近世陶磁』
- 東北歴史資料館編 (1983) 『東北の中世陶器』
- 森郁夫著 (1986) : 『考古学ライブラリー43 瓦』ニュー・サイエンス社
- 古泉弘著 (1987) : 『考古学ライブラリー48 江戸の考古学』ニュー・サイエンス社
- 板詰秀一編 (1986) : 『考古学ライブラリー45 出上渡来銭-中世-』ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 (1989) : 『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』ニュー・サイエンス社

付篇

三日町 I 遺跡出土材樹種同定
報告書

木工舎「ゆい」

平泉町三日町 I 遺跡出土材の樹種

高橋 利彦 (木工舎「ゆい」)

1. 試料

試料は近世のものとされる墓 (S X 2・4・7・11・13) から検出された棺材 5 点 (No. 2~6) とそのうちの 1 点 (S X 2) に副葬されていた櫛 1 点 (No. 1)、同時期のものとされる竪立柱建物 (S B 3・11・26) の柱穴から検出された柱材 4 点 (No. 7~10) の計 10 点である (表 1 参照)。棺材のうち No. 2 のみは桶状で、試料はその側板である。他の棺は箱型のもので、試料はいずれもその四隅に立てられていた角柱状の部材のうちの 1 つで、それに側板や底板が釘打つされて組み立てられた痕跡があった。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・径目・板目の 3 面の徒手切片を作製、ガム・クロラール (Gum chloral) で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版 (図版 1) も作製した。なお作製したプレートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料は以下の 3 Taxa (分類群、ここでは属と種の異なった階級の分類単位を総称している) に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各 Taxon の科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本 I・II」(佐竹ほか 1989) にしたがって、一般的な性質などについては、「木の辞典 第 1 巻~第 17 巻」(平井 1979~1982) も参考にした。

・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 No. 2, 3, 4, 5, 6

早材部から晩材部への以降はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型 (Taxodioid) で 2~4 個。放射組織は単列、1~15 細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、又各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樺桶類・舟材など各種の用途がある。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No. 7, 8, 9, 10

環孔材で孔圍部は多列、孔圍外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形、小道管は単独および 2~3 個が斜 (放射) 方向に複合、横断面では角張った楕円形~多角形。道管は単穿孔を持ち、環孔は交互状に配列。放射組織との間では櫛状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~25 細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性は高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材や海苔粗染などの用途が知られている。

・ナナカマド属の一種 (*Sorbus* sp.) バラ科 No. 1

散孔材出、単独または2～5個が複合する。年輪界付近で、やや急に密度を減少させる。道管は単穿孔を持ち、塵孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性Ⅲ型～同性、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は短接線状。年輪界は不明瞭。

ナナカマド属は羽状複葉をもつナナカマド (*Sorbus comixta*) の仲間と単葉をもつアズキナシ (*S. alnifolia*) の仲間に分けられ、6種が野生しいくつかの品種がある。このうち最も分布域の広いのはアズキナシで、北海道から九州まで(伊豆半島を除く)の低山地に普通に見られる。アズキナシの材は重硬・強韌で、器具・建築・家具・施作・薪炭材などに用いられる。

以上の同定結果を検出遺構名や推定されている用途とともに一覧表で示す(表1)。

表1 三日町遺跡出土材の樹種

資料番号	検出遺構名	用途	種名
1	S X 2	櫛	ナナカマド属の一種
2	S X 2	棺側板	スギ
3	S X 4	棺隔柱	スギ
4	S X 7	棺隔柱	スギ
5	S X 11	棺隔柱	スギ
6	S X 13	棺隔柱	スギ
7	S B 26 P 240	柱	クリ
8	S B 3 P 276	柱	クリ
9	S B 11 P 392	柱	クリ
10	S B 11 P 403	柱	クリ

4. 考察

櫛はナナカマド属に同定された。櫛の用材は、東北地方では仙台城三ノ丸跡から出土したネジキの例もある(仙台市教育委員会 1985)が、全国的にイソノキやツゲが多く、ナナカマドの例は知られていないようである。(伊東ほか 1987, 伊東 1990)。

棺は桶と箱の2型があったが、いずれにもスギが用いられていた。現在では、棺材として思いつくのはモミ (*Abies firma*) であるが、モミは暖地生の樹木で平泉地上はその分布北限に近い。現在、中尊寺境内にはスギとともにモミの大径木も生育しているが、その数は限られている。当時から、スギの法が入手しやすかったのであろうか。なお、遺跡から出土した棺材が検討された例は古墳からのものが圧倒的に多い。(伊東ほか 前出、伊東 前出)。今回の試料に近い時期では、東京都都立上野高等学校遺跡出土の江戸時代とされる棺材がスギとヒノキ属各1点に同定されている例(バリノ・サーヴェイ株式会社 1988)と、北海道苫小牧市の江戸時代末期とされる蝦夷地開拓移住隊士の墓から出土した棺材がエゾマツ類やトド

マツ類などに同定されている例(三野 1976)がある。東北地方では、試料より新しい例ではあるが、仙台市富沢遺跡第15次調査で、明治時代?とされる棺材4点がスギとマツ属復雑管束亜属各2点に同定されている(高橋 1987)。

柱材はいずれもクリであった。強度や耐朽性に優れたクリを掘立柱に用いるのは合理的な選択といえ、筆者が検討した泉屋遺跡第15次調査¹⁾・同第16次調査²⁾試料でもそのほとんどがクリであった。

〈注〉

- 1) 18点中17点がクリ、1点はオニグルミであった。詳細は「泉屋遺跡第15次調査出土材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1996)を参照のこと。
- 2) 12点中11点がクリ、1点はヤマグワであった。詳細は「泉屋遺跡第16次調査出土材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1997)を参照のこと。

引用文献

平井 信二 1979～1982 「木の辞典 第1巻～第17巻」, かなえ書房。

伊東 隆夫・山口 和徳・林 昭三・布谷 知夫・島地 謙 1987 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途、「木材研究・試料」、第23号、42-210

伊東 隆夫 1990 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ、「木材研究・試料」、第26号、91-189

三野 紀雄 1976 旧勇弘墓地発掘木棺材の樹種同定、「苫小牧市勇弘(蝦夷地開拓移住隊の墓)」、苫小牧市教育委員会、55-56。*

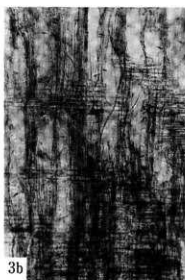
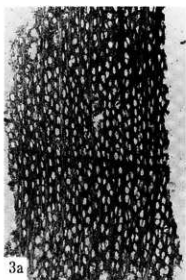
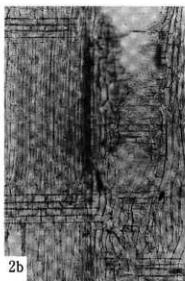
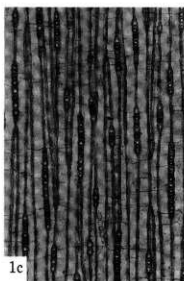
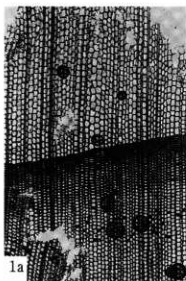
バリノ・サーヴェイ株式会社1988 出土材の同定、「東叡山寛永寺護国院 都立上野高等学校改築に伴う第一次調査概報」、都立上野高等学校遺跡調査会、60。*

佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」、平凡社、321、305pp。

仙台市教育委員会 1985 樹種同定結果について、「仙台市文化財調査報告書第76集 仙台城三ノ丸跡 発掘調査報告書」、197-199

高橋 利彦 1987 富沢遺跡出土材同定、「仙台市文化財調査報告書第98集 富沢 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書」、仙台市教育委員会、397-412。

*: 原典を直接参照できなかった。資料は伊東ほか(*1987)・伊東(1990)によった。



図版1

1. スギ No.5
2. スギ No.10
3. ナナカマド属の一種 No.1

a : 木口 $\times 40$ b : 柁目 $\times 100$ c : 板目 $\times 100$

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柁目では左から右。

三日町 I 遺跡第 2 次調査
写 真 図 版



遺跡全景 (S→)



基本土層 (VAOC北壁)

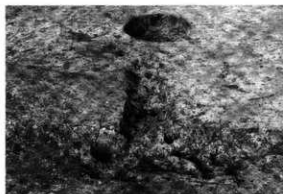
写真図版11 遺跡全景(上空より)・基本土層断面



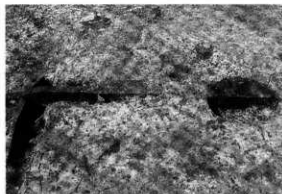
S11全景 (W→)



土層断面 A-B (S→)



カマド全景 (W→)



煙道部断面 (S→)

写真図版12 S11住居跡



SB1



SB2



SB3



SB4



SB5



SB6



SB7



SB8

写真図版13 掘立柱建物跡(1)



SB9



SB10



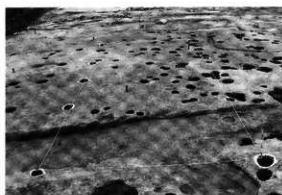
SB11



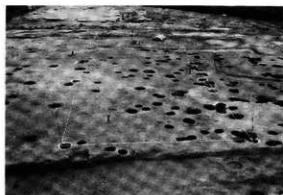
SB12



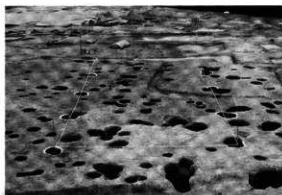
SB13



SB14



SB15



SB16

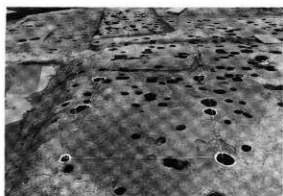
写真図版14 掘立柱建物跡(2)



SB17



SB18



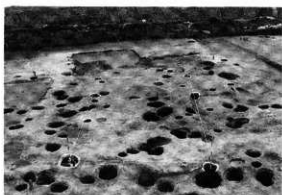
SB19



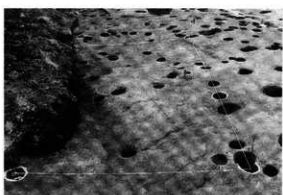
SB20



SB21



SB22

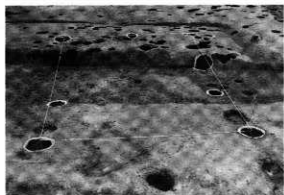


SB23

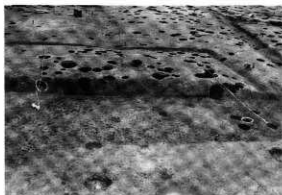


SB24

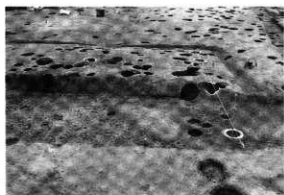
写真図版15 堀立柱建物跡(3)



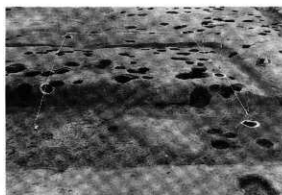
SB25



SB26



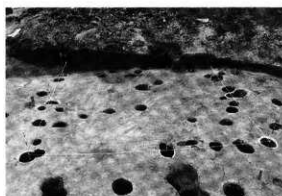
SB27



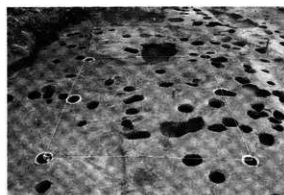
SB28



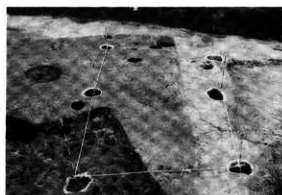
SB29



SB30



SB31

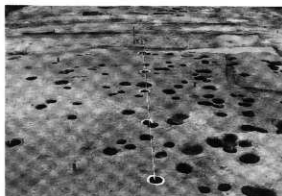


SB32

写真図版16 掘立柱建物跡(4)



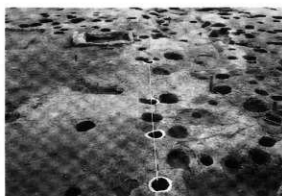
柱穴列 1号



柱穴列 2号



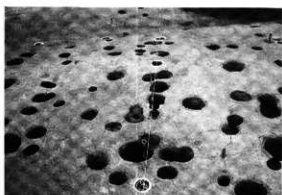
柱穴列 3号



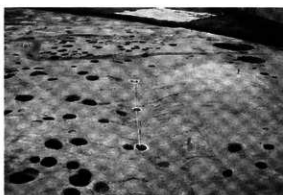
柱穴列 4号



柱穴列 5号

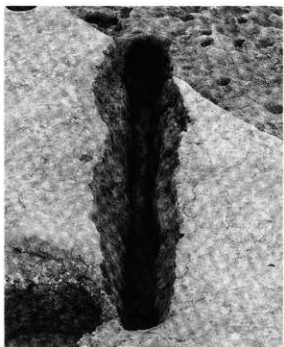


柱穴列 6号



柱穴列 7号

写真図版17 柱 列



TP1完掘 (S→)



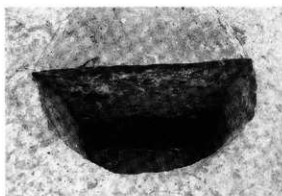
カマド状遺構1号完掘 (N→)



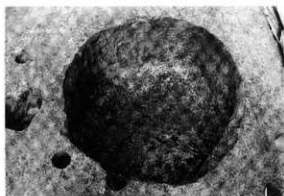
カマド状遺構1号断面 (E→)



SE1 (S→)



SE1断面 (S→)

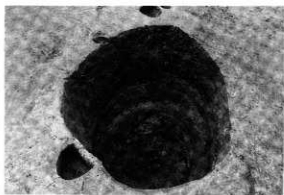


SK1 (S→)



SK1断面 (S→)

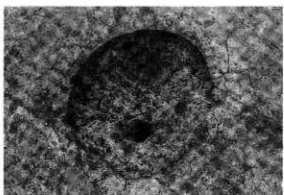
写真図版18 陥し穴状遺構・カマド状遺構・井戸・土坑(1)



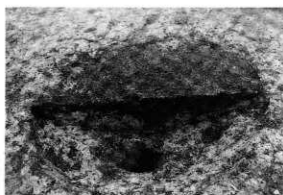
SK 2 (S→)



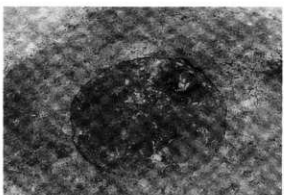
SK 2断面 (S→)



SK 3 (S→)



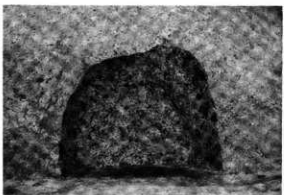
SK 3断面 (S→)



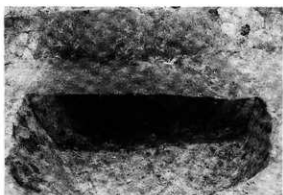
SK 4 (S→)



SK 4断面 (S→)

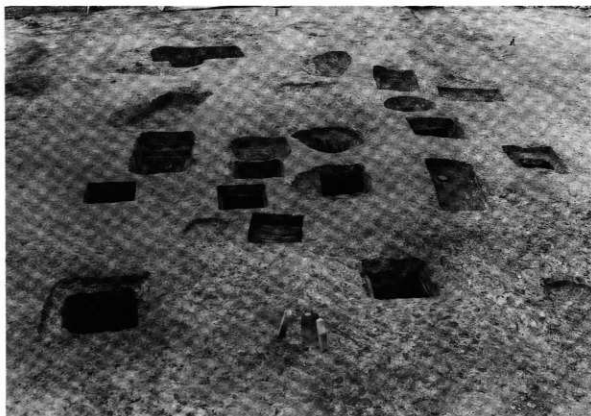


SK 5 (N→)



SK 5断面 (S→)

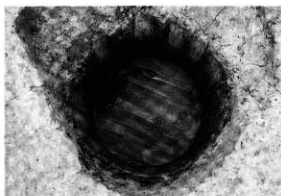
写真図版19 土坑 (2)



墓墳群 (S→)



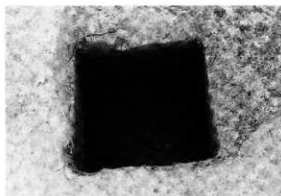
SX1 (N→)



SX2 (S→)



SX3 (N→)



SX4 (N→)

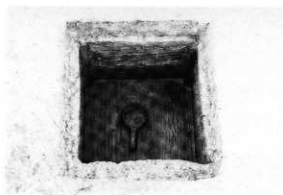
写真図版20 墓墳 (1)



SX5 (S→)



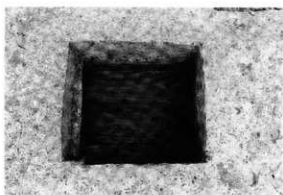
SX5 遺物出土状況 (W→)



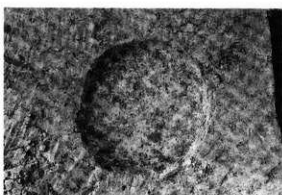
SX7 (S→)



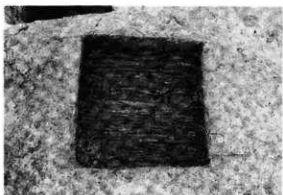
SX7 遺物出土状況 (S→)



SX6 (S→)



SX8 (S→)



SX9 (S→)

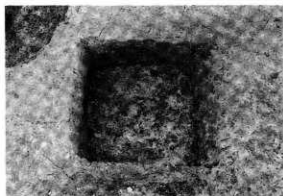


SX10 (S→)

写真図版21 墓 墳 (2)



SX11 (N→)



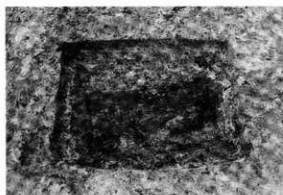
SX12 (N→)



SX13 (S→)



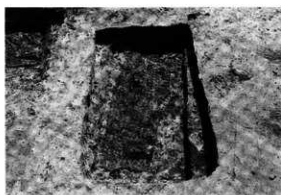
SX14 (S→)



SX17 (S→)



SX18 (N→)

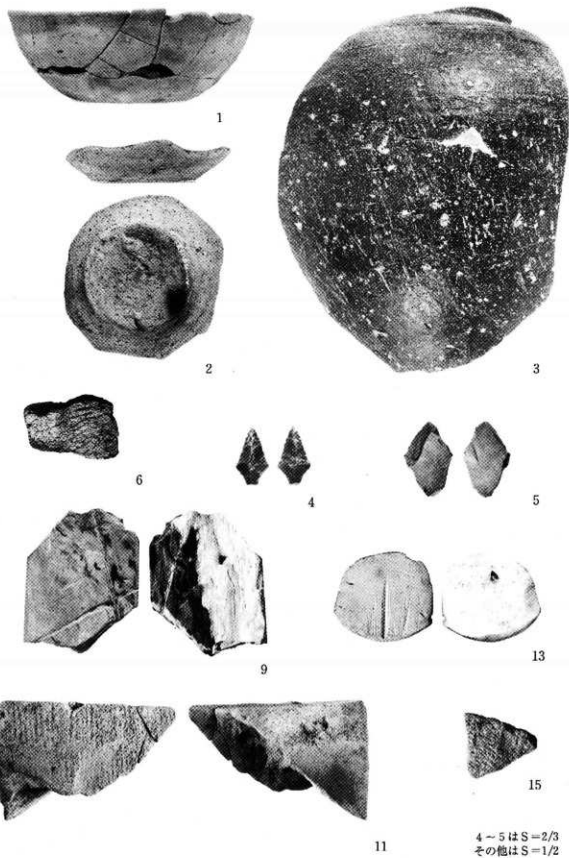


SX19 (N→)



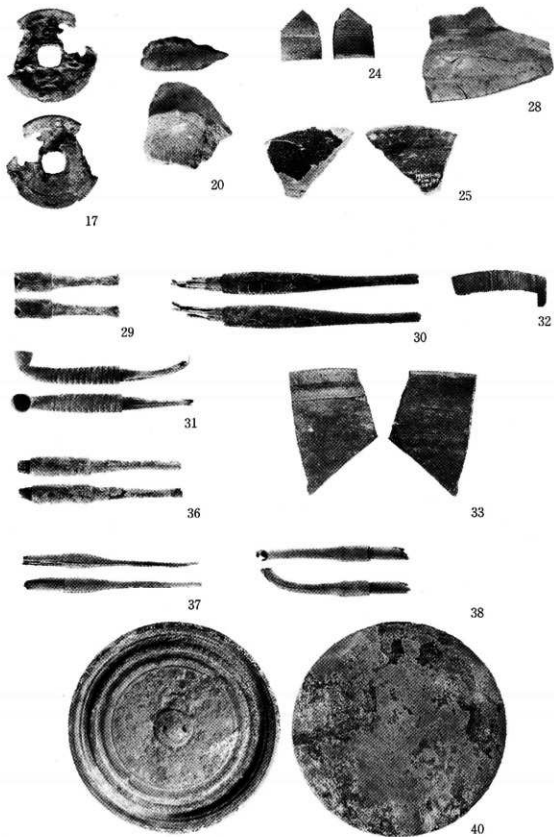
SX20 (N→)

写真図版22 墓 墳 (3)



4-5はS=2/3
 その他はS=1/2

写真図版23 遺構内出土遺物(1)



S=1/2

写真図版24 遺構内出土遺物(2)



41



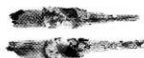
42



44



43



46



47



48



50



51



52



53

写真図版25 遺構内出土遺物(3)

SX2



1

SX3



3



4



5



SX6



6



7



8



9



10

SX13



11



12



13



14



15



S—原寸

写真図版26 墓墳内出土銭貨(1)

SX15



SX17



18



19



20



21



22

SX19



23



24



25



26



27

SX20



32



34



35



36

S=原寸

写真図版27 墓壙内出土銭貨(2)

SX21



43



44

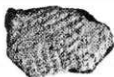


45

遺構外



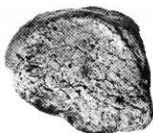
54



55



56



57



58



59



60



63



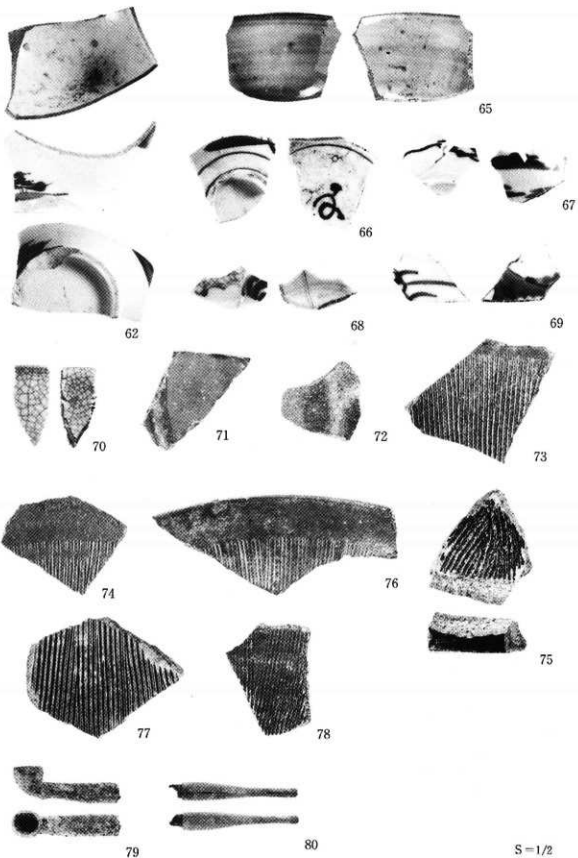
64



61

43~45はS=原寸
54~64はS=1/2

写真図版28 墓墳内出土銭貨(3)・遺構外出土遺物(1)



写真図版29 遺構外出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	さいせきだいいちじ・みつかまらちいせきだいにじはくつちようさほうこくしょ								
書名	佐野遺跡第1次・三日町I遺跡第2次発掘調査報告書								
副書名	平泉バイパス建設事業関連発掘調査								
巻次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第313集								
編集者名	朝倉雄大								
編集機関	財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001								
発行年月日	西暦 2000年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
佐野遺跡 第一次調査	岩手県西磐井郡平泉町字 佐野21-1他	03042	ME86-0152	38° 58' 9"	141° 7' 18"	1998. 8.1~10.31	1,200	平泉バイパス 建設事業	
三日町I遺跡 第2次調査	岩手県西磐井郡平泉町字三日町143-1他	03042	NE86-0120	38° 58' 14"	141° 7' 18"	1998. 8.1~10.31	1,550		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
佐野遺跡 第1次調査	墓地	江戸時代	墓壇8基	古銭、煙管等		江戸時代の墓地跡			
	集落跡	近世以降	掘立柱建物跡1棟						
	その他	近代以降	土坑39基 溝状遺構3条 柱穴38基	磁器等 かわらけ等					
三日町I遺跡 第2次調査	狩り場	縄文時代	陥し穴状遺構1基			中世~近世の掘立柱建物跡 江戸時代の墓地			
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡1棟	土師器、須恵器等					
		中世~近世	掘立柱建物跡33棟	土師器、かわらけ					
	墓地	江戸時代		柱列8条 柱穴731基	陶磁器、古銭等				
				墓壇22基	古銭、煙管等				
その他			井戸跡1基 土坑5基 カマド状遺構1基						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第313集
佐野遺跡第1次・三日町Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書

平泉バイパス建設事業関連発掘調査

印刷 平成12年3月24日

発行 平成12年3月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 小松総合印刷株式会社

〒020-0827 岩手県盛岡市鉾屋町15-4

TEL (019) 624-1374

FAX (019) 623-6719

